

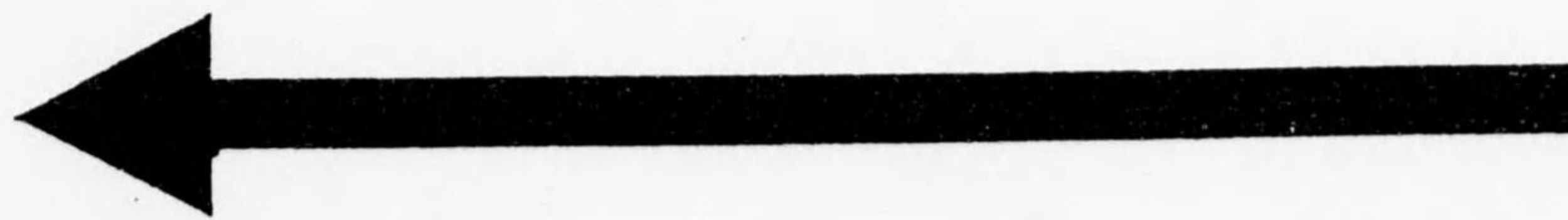
135. 3-P26-4ウ



1200500726281



始



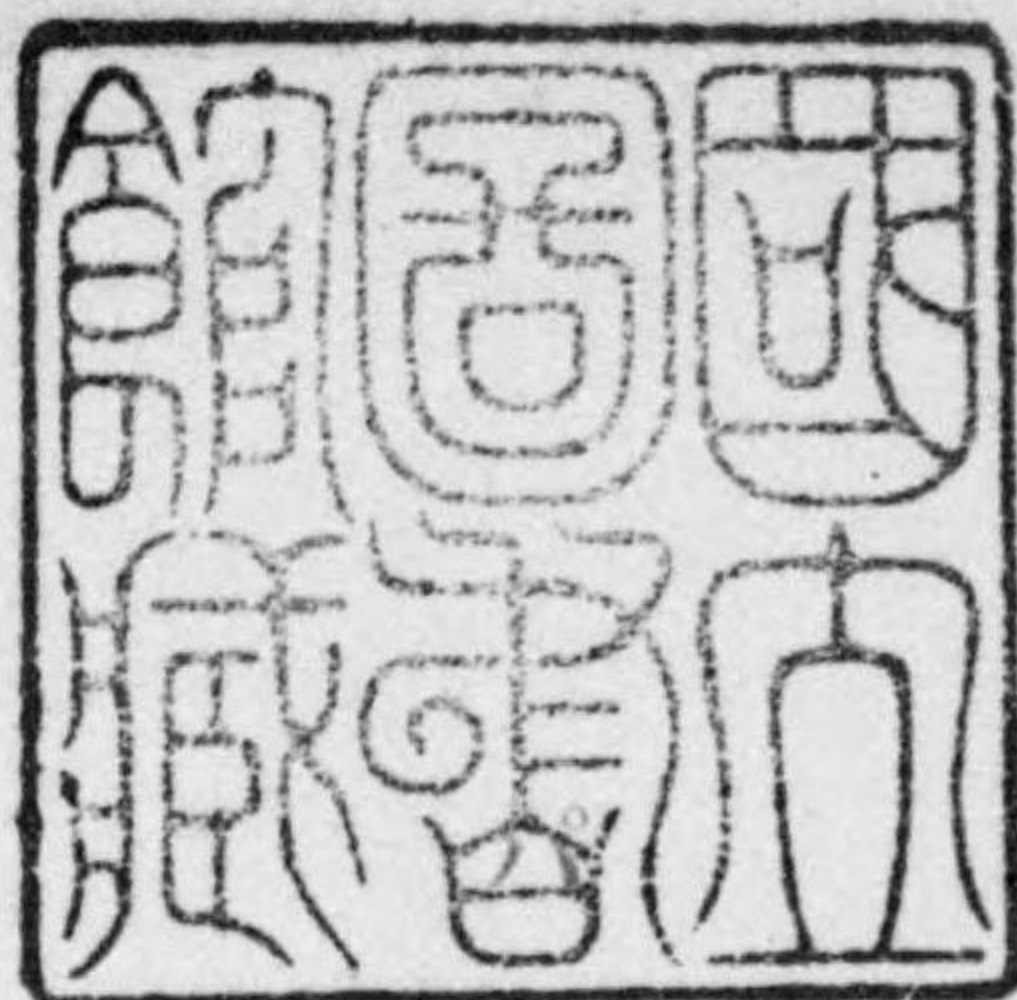
IT 2A 3A

135.3

P26-4

(1)

ウ



ブレイズ
バスカル

ン
セ

未完のキリスト教辨證論

津田
稜
譯





は し が き

フランス十七世紀の數學者物理學者ブレーズ・パスカル 1623—1662 は、何よりもまづ深い思想の持ち主であつた。晩年、その病身を修道院によせ、キリスト教辨證論の著述に専念したが、しかし短い生涯はそれを完成せしめなかつた。さうしてきれきれのおほえがきのみが遺された。それらを我々はふつうパスカルの『パンセ』とよんでゐる。

この作品を日本語にあへて移しとらうとまことのみなしい結果がいつにあら。逃げ動いてやまぬ獲物を、はじめなことばの柵でどうにか追ひかこむことはできたかもしれない。獲物をぢかにとらへることは、今はもう、未知の友にその勞をあふがう。

翻譯のテキストとしてはアシエット書店刊行パスカル全集 (Œuvres complètes de Blaise Pascal, édition des Grands Ecrivains de la France, publiées suivant l'ordre chronologique, avec documents, introductions et notes, 14 vol., Paris, Hachette, 1908-1914. 中のブロンシュヴィグの三冊本 Troisième série, Tomes XII, XIII, XIV. Les Pensées, par Léon Brunschvicg. 改訂版の三冊本) 書店發行トゥルヌールによる二冊本 Blaise Pascal, Pensées, Edition critique, établie, annotée et 1

précédée d'une introduction par Zacharie Tournour, Paris, Cluny, 1938 を用ひた。

2

そのほか前者による教科書版小型一冊本 Blaise Pascal, Pensées et Opuscules, Hachette. 並びに
トロッターの英語譯 Pascal's Pensées, by William Finlayson Trotter, Everyman's Library. を参照
した。

全譯とし上下二卷に収める。

パンセ原文の解讀・整理・再現その他あらゆる點において右記二種のテキストのうちトゥルヌール版の
ほうがすぐれてゐる。本来ならばこの版にのみもとづくべきであつたかも知れない。トゥルヌールの業績
のあらはれるまで最もひろくおこなはれてき一般になじみぶかいところのブロンシュヴィックによる斷章
の選擇分類に従ふことは人のおもふ以上に好都合のことがありいはばパンセの國の見なれた地圖を手にす
ることにならうといふなにか便宜的踏襲的理由からのみ私はブロンシュヴィック版の番號づけに従つた。
ほかに理由はない。この版はトゥルヌール版にくらべてはるかに多くの斷章を採擇してゐるがそれらのう
ち素性の疑はしい斷章やこの版において出會ふ少なからざる誤讀に關しまた不備の再現法などに關しては
一切をトゥルヌール版に校合し、多くのばあひトゥルヌール版のよみかたに準據してこれを批判訂正する
ことができたし、合理的再現法の一部に従ふこともできた。

なほ詳細は下卷のあとがきにのべる。

左にこの譯書中に用ひた幾つかの符號を説明しておかなければならない。

本文の傍にB印をつけたところはブロンシュヴィック版のよみかたに従ふしるしである。

同じくT印をつけたところはトゥルヌール版のよみかたに従ふことを意味する。

B T印もあるが、これはそのところがB版もT版も共にそのよみかたの一致してゐることをしめしてゐる。これはむろん他の諸版例へばモリニエとかフォージュールとかの版のよみかたとは相違してゐるといふわけである。

パスカルが一度書いてのち線をひいて消してしまつてゐるところは、括弧「」の中に入れた。

またパスカル自身があとから加筆したことは、これを星印*で挿んだ。

原文の下線は、傍線をもつて示した。

編纂者(ブロンシュヴィックやトゥルヌールなど)の補正した文字もまた一切同じ括弧「」の中に入れたが、これはさらに小さく六號活字を用ひた。各斷章のかしらにつけた番號もたうせんこの括弧の中に入られるべきものである。この番號數字のごときは整理に役立つほか意味をもたない。

略記のことについて一言。書名および章節をあらはすのにモンテーニュに關するばあひにかぎりその書名をも略してモンテーニュ二ノ七のごとくしるした。『エッセー』第二卷第七章のつもりである。

總索引は下卷にある。

千九百四十八年春

京都にて

譯

者

3

パ

ン

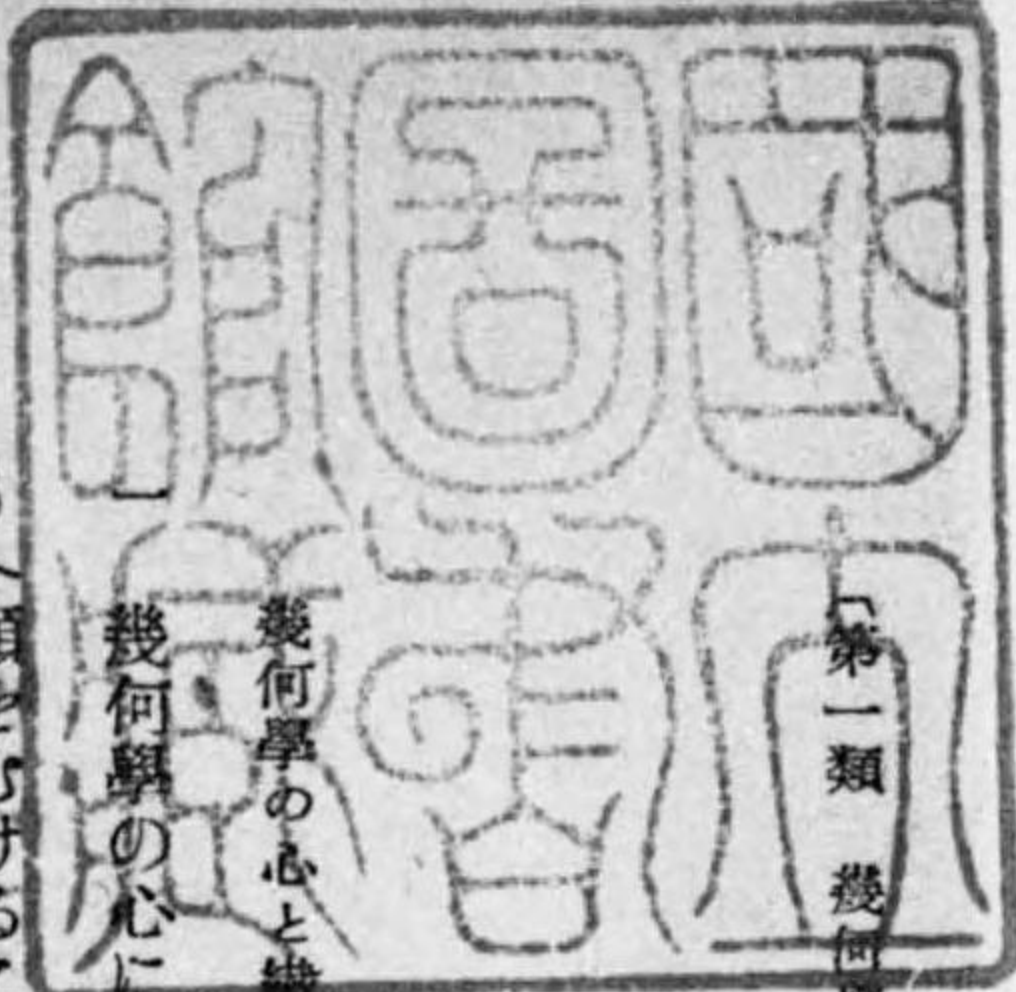
セ

上

斷章一—五五五

【第一類 幾何學の心と繊細の心】

幾何學の心と繊細の心とのあひだの相違



幾何學の心においては、原理は明白であるがふつうに使はれることはすくない。従つて、人はそのは

うへ顔をむけることに困難をおぼえる。慣れないからである。しかしすこしでもそのはうへ顔をむけるな

らば原理は十分に*見える*。人の眼をのがれることのほとんど不可能なほどに大きいこの原理の上であ

やまつた推理をしようとするならばまつたく不正確な頭腦をもつよりほかはあるまい。

しかし繊細の心においては、原理はふつうに使はれすべての人の眼の前にある。顔をむけさへすればよ

い。努力することは要らない。ただ、よい眼をもつことだけが問題である。よい眼をもつことは必要であ

る。なぜといふのに原理はじつにこまかくまたじつに數が多くて眼をのがれずにあることはほとんど不可

能なほどであるから。ところで原理が一つ缺けても人は誤謬^{ごびつ}にみちびかれる、さうであるからあらゆる原

理を見るために明らかな眼をもつこと、それから既知の原理の上であやまつた推理をせぬために正確な頭

腦をもつこと、これが必要である。

だから*すべての*幾何學者はもしよい眼をもつならば繊細であるといひえよう、なぜなら彼らは彼ら

の知つてゐる原理の上であやまつた推理をしないであらうから。また繊細な人々はもしその眼を幾何學の

不慣れな原理に屈せしめることができるならば幾何學者であるといひえよう。

従つて或る繊細な人々にして幾何學者でないことがあるのはこの繊細な人々がすこしも幾何學の原理のはうへ身を向けることができないからである。ところで幾何學者たちにして繊細でないことがあるのはこの幾何學者たちが眼の前のものを見ないからであり、また幾何學の明らかで大きな原理に慣れてをり、原理をよく見きはめ使ひこなしたのちはじめて推理するといふことに慣れてゐるので、原理がどうもさういふぐあひに使ひこなされないところの繊細の事物においては途方にくれるからである。人はそれらの原理を見るのがむづかしい、人はそれらを見るといふよりはむしろ感ずる、さうしてじぶん自身で感じない人々にはいくら感じさせようとつとめても骨の折れるばかりである。それらはまことに微妙なまたじつに數の多いものであるから十分微妙で十分明らかな一つの感覺をもちこれをもつてそれらを感じることまたその感じに従つて正確に判断することが必要であり、幾何學におけるやうにじつにしばしばそれらを秩序立てて證明してかかるといふやうなことをしてはならない。なぜなら人は原理をさういふ仕方であらへてゐるのではないからであり、またさういふことをくわだててはきりがなからである。*すくなくともある程度までは*事物を推理の歩みによることなく一と目で一撃に見ることが必要である。さうであるから幾何學者が繊細であることはめつたにないし、また繊細な人々が幾何學者であることもめつたにない、なぜなら幾何學者は繊細の事物を幾何學的にとりあつかはうとしまづ定義から次ぎには原理からはじめようとして、自分を人の笑ひものとするからである。さういふやり方はこの種の推理においてはしてはならないことである。心がそれをしないといふのではない、ただ心はそれを黙つて自然にさうして方式なしにお

こなふ、なぜといつてそれを表出することはいかなる人間のちからをも越えてをりそれを感知することはわづかの人間にしかゆるされてゐないのである。

繊細の心はこれと反對に一と目で見て判断することに慣れてゐるから、かすかすの命題を出されてそれをすこしも理解することができずまたそれらに立ち入るためにはさやうに詳細にわたつては一向に見る習慣がなかつたところの*じつに*味氣ない定義や原理を経てゆくことが必要であるといふことになる。大いにおどろいて、氣をおとし、厭氣をおこす。

しかし不正確な心の人々はこれは決して繊細でもなければ幾何學者でもない。

幾何學者でしかない*幾何學者たちは*さういふわけで、正しい心を持つてゐる、がただしそれはあらゆることがらを定義と原理とに従つてひとからよく説明してもらふかぎりにおいてであり、さうでないならこの人々は不正確であり我慢がならない、なぜといふのにこの人々の心は十分明らかにせられた原理の上でしか正確ではないのであるから。

また繊細でしかない繊細の人々は、この世に一向に見たことのないさうして全然使はれることのない理論的構想的事物に關してはそれら事物の最初の原理にまで降りてゆくといふしんばうをすることができない。

(1) 幾何學の *esprit de géométrie* と繊細の *esprit de finesse* とついでには *esprit de finesse* の三十一

歳ごろ——推定年代一六五三年末——の作といはれる『愛の情念に關する説』 *Discours sur les passions de*

l'Amour. の中に右バンセ斷章一の素描ともいひえられる次ぎのやうな文言が見られる。「二つの種類の心があ

る。一つは幾何學的な心でありもう一つは繊細の心とよばれるものである。幾何學的な心はゆるやかで固く
てたわみがない眼をもつてゐる。しかし繊細の心は柔軟な思想をもちこれを愛するもののいろいろの愛すべき
部分に對して同時に適應する。繊細の心は眼をもつて心にまで達し外部の動きによつて内部におこることがら
を知る。幾何學的な心と繊細の心とを共に持つとき愛は何と喜びをあたへてくれることであらう！ なぜなら
人は心の力と柔軟さとを同時に所有することになるさうしてそれは二人の者の交はず雄辯にとつて大そう必要
なものである」

二 直覺 sens droit の種類。或る人々はこの直覺を事物の或る秩序のうちに持ち、他の秩序のうちでは
持たない、そこではこの人々は罅を越える。

或る人々はわづかの原理からよく結果をひき出す、これは心の直覺性による。

他の人々は原理のたくさんある事物からよく結果をひき出す。

たとへば或る人々は一向に原理をもたないところの水のかすかすの作用をよく理解する。しかしその結
果は大そう微妙であるからそれに立ち入ることのできるのは心の極度の直覺性だけである。

これらの人々は右のやうだからといつてすぐれた幾何學者であるといふことにはおそらくならないであ
らう、なぜなら幾何學はひじやうに多くの原理をふくんでゐる心の本性はわづかの原理に根柢までよくし
みとほることができることもあり、原理のたくさんある事物にさつぱりしみとほることができないことも
ありうるのであるから。

従つて二種類の心がある。一つは原理の歸結へ活潑にふかくしみとほるものでありこれは真正の心であ
る。もう一つは多數の原理を——混同することなく——ふくむものでありこれは幾何學の心である。一つ
は心の力と直さとであり、他は心の廣さである。さて一は他なくしてありうる、なぜなら心は強く狭くあ
りうるし、また廣く弱くありうるのであるから。

(一) この考へは前の考へとは區別せられなければならない。斷章一においては廣く包容的な特性をもつも
のは繊細の心であつたが、ここでは幾何學の心が多數の原理をふくむことにおいて成り立つてゐる。おそらく
この二つの思想は同じ時期のものではない。最初の區別に對しここに第二の區分が接ぎ木せられてゐると見る
のとどめればよいであらう。すなはちここで幾何學の心は sens droit とよばれてゐる、さうしてこの直覺
には種類がある、一は物理學や代數學におけるやうにただ一つの原理からもろもろの結論をひき出すものであ
り、他は何よりもまづ綜合の心であつてこれはきはめて複雑な圖形をその線のこんらんをひきおこすことなく
構成するものであるといふ。

三 直觀で判斷することに慣れた人々は、推理をしなければならぬことがらについては何事も理解しえな
い、なぜならこの人々はまづ一と目ではひりこまうとし、原理をさがすことにはすこしも慣れてゐないの
である。反對にまた別のある人々は、原理によつて推理することには慣れてゐるが、直觀しなければなら
ぬことがらにおいては——原理をそこにさがすけれども——と目で見ることはできないものだから——何事
も理解しえない。

四 眞の雄辯は雄辯をけいべつし、眞の道德は道德をけいべつする、すなはち判断の道德は理知の道德をけいべつする、判断の道德は規準を持たない。

なぜといふのに判断には直観がぞくしてゐる、ちやうど理知に學問がぞくしてゐるやうに。織細は判断のがはにあり、幾何學は理知の*がはにある*。

哲學をけいべつすること、それが眞に哲學することである。^(二)

(一) 直観あるひは判断と、推論あるひは理知と、この對立がここに論及せられ明確にせられてゐる。判断は生命であり眞理であるところの直観となつてをり理性は人爲と抽象とのうちにとどまつてゐる。雄辯にはアリストテレスの修辭學とは別のものがあり、道德にはストア學派の立てる區別や逆説とは別のものがあり、哲學にはスコラ學派のシロツスムやデカルト學派の定理とは別のものがある、さうして、この別のものこそ實在のふかい複合した直観であり判断であり心情である。ラロシュフコーの格言集に「よい趣味は理知からよりも判断から来る」(格言二五八) また「理知があつてはかな者はよくあるが判断があつてはかな者は決してゐない」(四五六) しかしかうもいつてゐる「人が理知と判断とを二つの違つたものと考へたのはあやまりだつた。判断は理知の光の大いさにほかならない」(九七) なほモンテーニュ二〇二「或る古代人は、あなたは自身を哲學者であると公言してゐるが私の見るところではあなたは一向に哲學を念頭にしてゐない、といふひなんをうけたときかう答へた、それがじつはほんたうに哲學をしてゐるのだ」

五 規準を持たずに或る仕事を判断する人々はちやうど時計を持たぬ人々が他^Bに對するやうなものであ

る。一人はいふ、二時間たつた。他の一人はいふ、四十五分しかたたない。私は私の時計を見て一人にいふ、君は退屈してゐる、他の一人にいふ、君にとつては時のたつのがおそいとおもはれない、なぜなら一時間半たつたのであるから。——さうして私に向つて「時のたつのが私にはおそくおもはれるさうしてそのことを私はきまぐれに判断する」といふ人々を、私はけいべつする。さういふ人々は私が私の時計によつて判断することを知らないのだ。^(二)

(一) バスカルは左腕にいつも時計をつけてゐたといふことである。時計がここでは理知のなす仕事に對して適應するにふさはしい規準の比喩とせられてゐる。時計をもつて物事を判断するやうに或る規準をもつて理知の仕事と判断するといふのである。ただしバスカルは、理性がさやうな種類の規準を提供しうるものでないこと、結局それみづからでは規準をもたぬところの直観へたちもどらなければならぬことを、別の箇處で認めてゐる。じつさいまた時計のたとへについてみても、ちやうど理性がよき規準となりえないやうに、時計の計りうる時間もまた實存的人間の生とは一向にかかはりのない物理學的時間のみにかぎられる。眞の實在の時間とは退屈なときには長く楽しいときには短いさういふ持續でなければならぬ。この分量時間と性質時間とについては特に Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889, chap. II を参照。

六 知性がそこなはれるやうに、直観もそこなはれる。

知性と直観とは會話によつて作りあけられる、また會話によつてそこなはれる。だから良い會話は知性と直観とを作りあけ悪い會話は知性と直観とをそこなふ。従つてこれらを作りあけこれらをそこなはずにするためには選ぶといふことを十分よく知らなければならぬ。ところでこれをすでに作りあけてゐる、そ

こなはずにゐてこそ、選ぶといふことをすることはできる。かうしてそれは循環する、この循環からののが
れ出る人々は幸福である。 8

七 人は知性を一そう多く持つにおうじ獨自的なる人間の「一そう多くゐることを見出す。凡庸の者は人々のあひだに相違を見出さない。」

(一) 『愛の情念に關する説』の中にはかう書かれてゐる。「人は知性を一そう多く持つにおうじ獨自的なる美を一そう多く見出す」。パスカルはその不健康のため科學的研究や宗教的省察をすこし遠ざかり幾月かのあひだ氣晴らしを目的として社交界に出入りしたころ、人々のうちに容貌や性格の數かぎりない多様性を見、個々の人々の根本的な獨自性を識別した、さうしてそれは彼のおどろきであり喜びであつたにちがひない。

八 晩禱をきくのと同じ態度で説教をきく人が多い。

九 人をききめのあるやうに戒めその人がまちがつてゐることを示してやりたいとおもふならばその人がどんな方面から事柄を見てゐるかを觀察する必要がある、なぜならふつうその方面においては事柄は正しいものである、さうしてその正しいことを認めてやりどの方面において事柄は誤るかも示してやる必要がある。人はそれで満足する、なぜなら人は自分の誤つてゐなかつたことを知り、また、ただすべの方面を見ることはおこたつてゐたことを知る。ところで人といふものはすべてを見ないことを遺憾に

はおもはないけれども誤つてゐたとはいはれたくないものである。たぶんそのわけは本來人間はすべてを見るといふことはできないものであるからであり、また彼の見るがはにおいては——たとへば與へられた感覺そのものは常に眞であるやうに——本來誤ることはないからである。

一〇 人はふつう他人の精神の中に生じた理由によつてよりも、自分自身で發見した理由によつて、一そうよくなつとくする。

一一 大がかりな娛樂はすべてキリスト教徒の生活にとつて危険である、が世人の作り出したさういふ娛樂のうちでも演劇ほどおそるべきものはない。演劇は情念の大そう自然で大そう巧妙な表現であるから、もろもろの情念をうごかし、それらを——殊に戀愛の情念を——我々の心に生ぜしめる。戀愛を大そう潔らかな大そう正しいものとして表出するときとりわけさうである。なぜならその戀愛が淨らかな心の人々に淨らかに見えれば見えるほど人々はそれに感動をうけるやうになる。戀愛のはけしさは我々の自愛心の氣に入る、さうしてこの自愛心はそこに見るじつに巧みなる演出による効果と同じ効果をひきおこしたいといふ欲望をすぐにいだく。またそれと同時に、その抱く考への基礎を、そこに見る感情の潔らかさの上におく。この感情は淨らかな心からこの淨らかな心の持つおそれをとりのぞいてくれる。この淨らかな心は、あのやうにも貞節に見える愛をもつて愛することは純潔を傷つけるものではないとおもふのである。

かくて劇場を出るとき心はあらゆる美とあらゆる甘やかさにじつによく満たされてゐる、また魂と理性

とはみづからの清浄さをじつによく納得させられてゐるから、我々は、ただもう感動のおこりしだいにこの感動を受け容れうる状態になりきつてゐる——といふよりは劇中に見たあのやうにも巧みに表現せられた喜びや犠牲と同じものを受け容れたために、誰か人の心にさういふ感動を生ぜしめる機会をひたすら求める状態になりきつてゐる。

(一) この断章は寫本しかなく素性は明らかではない。パスカルの思想にもとづいてゐるとしてもサブレ夫人のかいたものかもしれない。

一二 スカラムッシュ(二)これはただ一つのことをしか考へない。學者はすべてのことを言つたのちになほ十五分間もしやべる、それほどこの人物は語る欲望で一ぱいだ。

(一) スカラムッシュといふのはイタリア人の俳優チベリオ・フィオレルリのこと、この人は一六四〇年パリに来てフロンドの内亂の時まで滞在。つぎに再び一六五三年プチ・アルボンに来て五九年までゐた、その時おそらくパスカルはこの人を観たとおもはれる。この人は *comedia del arte* を演じた。スカラムッシュと學者 *Doctore* は二人の傳統的人物である。このイタリア喜劇の上演はパスカルに強い印象をあたへた。

一三 人はクレオピュリーヌの誤りと情熱とを見ることを好む、なぜならこの女性はそれをさうと知らな
いであるのである。誤つてゐるのでなかつたら人を不快にすることであらう。

(一) クレオピュリーヌはコリントの皇女後に女王。パスカルと同時代の女流小説家スキュデリの小説に現れる人物。クレオピュリーヌはその家臣ミラントを愛する。ミラントはその先祖においてさへコリント人ではない。女王はこの男を愛してゐると知らずにじつはふかく愛してゐた、さうして「大そう長いあひだこのあやまりのうちにあたがためにそれと氣づいたときはもうその愛情はおさへつけることができなくなつてゐた」といふ。——なほ、このクレオピュリーヌといふ人物はスエーデンのクリスチナ女王をゑがいたものとしてほつてゐたのでさういふ特殊な事情からこの人物にパスカルの注意はひかれたと考へられる。(クリスチナ女王はアヌスターヴ・アドルフの娘一六三二年二十六歳にして王位を繼承し二年にして退いた)、『田舎人への手紙』において自分は小説をよんだことがないと明言してゐるパスカルも、自分の發明した計算器をささげるにあたり有名な書簡をかいたところのこの女性のためには「一つ例外を設けたのであらうか。」

一四 ある自然な話の一つの情念あるひは印象を語つてきかせるると人はそこにきく事柄の眞理を自分自身
のうちに發見する。さやうな眞理がさやうなところにあらうとは知らなかつた、そこで人はさういふことを氣付かせてくれた者を愛するやうになる、なぜならこの者はこの者の財を見せてくれたのではなく我々の財を見せてくれたのである。かくて——この者と我々とのあひだの理解の共有からどうしても心はこの者を愛するやうに傾くのみならず——そのおかげでこの者は我々にとつて愛すべきものとなる。

一五 至高の力によつてではなくやさしきによつて、また王としてではなく暴君として、人を説きふせる
雄辯。

(一) 雄辯が人を説きふせるのは至高の力をもつて王としてでなければならぬ。やさしきをもつて暴君とし

てであつてはならない。王は至高の力をもつて合法的に命令する。暴君は優位性を濫用し固有の秩序を越えて支配しようとする、たとへば王であるがゆゑに最良の詩人とならうとのぞむネロのやうに。心情に對しては快適といふことが何よりもたふとばるべきであつて力は濫用であり、説得する場合には理解力といふことが何よりもたふとせらるべきであつて、快適は濫用である。説得の至高の力は合法的なまた固有なものとして證明の學問にぞくしてゐる。人を納得せしめようとせず人の氣に入らうとくわだてる雄辯は従つて、人の意志を不當に突きくづすものであるといはなければならぬ。

一五ノ追加 雄辯とは、第一にそれをきく人がらくに喜んで理解できるやうに第二にその人が興味をおほえ従つて自愛心にひかれて一そう自發的に反省するやうに、物事をのべる術である。

だから雄辯は、一方きく人々の知性と心情、他方話し手の用ひる思想と表現、この双方のあひだに設けようと努力せられるところの呼應 *correspondance* において成り立つものである。このことから見當がつくやうに、人は、心のあらゆる活動を知るためにまた次ぎにはそれらの活動に對してとりたたいとおもふろんぎの正しいつりあひを知るために、心をよく研究すべきである。きく者の身になることが必要である、さうして話にあたへる言ひまはしを自分自身の心の上のためにためして、それがしつくりするかどうか確かにきき手をして服従せざるをえなくさせる自信がもてるかどうかを見なければならぬ。できるだけ簡素と自然とから出ないやうにし、小を大に大を小にしてはならぬ。ある事物が美しいといふだけでは十分でない、その事物が主題にかなつてゐること、そこにすぎたところもなく及ばぬところもないことが必要である。

一七 川は、歩いてくれ行きたいところへ運んでくれる道路である。^(一)

(一) パスカルはこの比喻を印象的だつたからただ孤立的に書きとめたのであらうか、それともなにか雄辯を説明するためのことばであらうか。エルネスト・アヴェによればこれはラブレ第五の書第二十六章にある表現の回想だといふ。色々の比喻に役立つであらう。雄辯の説明としても面白いとおもふ。我々の代りに歩いてくれる道路、我々はらくに知らぬまに話し手のぞむ結論へと運ばれてゆく。

一八 ある事柄の眞理が分らないときそこに共有の誤謬にして人心を安定せしめるもののあるのはよいことである、たとへば季節の變化や病氣の進行やそのほかさういふものを月のせるにするやうに。なぜといつて人間の大きな病弊は分らない事柄に對する不安な好奇心である。かかる無益の好奇心のうちにあるよりも右の誤謬のうちにあるほうがまだしも悪くない。

エピクテトスやモンテーニュやサロモン・ドゥ・チュルシ^(一)ふうの書き方は、最もよく使はれ最もよくしみるとほり最もよく記憶にのこり最もよく引き合ひに出されるものである、なぜといふのにその書き方は全く生活の日常の會話から生れた思想で出來てゐる。たとへば月が一切のものの原因だといふ世間に共有のあやまりについて話が出ると人はきつと次ぎのやうなことをいふだらう、サロモン・ドゥ・チュルシはいつた、ある事柄の眞理が分らないときそこに共有の誤謬にして……云々と、上記の思想を。

(1) サロモン・ドゥ・チュルシとはパスカル自身のことにはちがひない。パスカルは『田舎人への手紙』をルイ・ドゥ・モンタルト Louis de Montalte とする偽名で出版したがこの文字を綴りかへると Salomon de Tuite となる。パスカルはこの名前でキリスト教辨證論を出版するつもりであつたらしい。なほ同じ文字でアモス・デルトーンヴィル Amos Delonville とする名前を拵へこの名前で一六五八年末ごろに小さな科學論文を發表してゐる。

一九 作品を拵へてゐる一ばんあとに氣付くことは何を一ばんはじめに置いたらよいかを知らなければならぬといふことである。

秩 序

二〇 なぜ私は私の道徳を六つに分けないで四つに分けるのか。なぜ私は徳を四つに樹て或は二つに樹て或は一つに樹てるのか。なぜ私は徳を「自然に従ふこと」*とか*プラトンのいふやうに「不正なくおののの仕事をする事」とかその他のこととせず^{アブステイネ} *abstine et sustine* にする^{エクスステイネ}のか。——だつて見たまへすべてのことが一語につくされてゐる、と君はいふかもしれぬ。——なるほど。しかしさういふことはこれを人が解釋しないかぎりもの用に立たない。また解釋するとなると、この訓言を解きかけるやいなやそこにはあらゆるほかのものもふくまれてゐるのだから、それらのものは君の避けたいといふはじめのこんらん状態にもどつてそこから逃げ出してしまふ。だからそれらのものは、みんな一語のうちにとぢこめられてゐる*ときは*ちやうど箱の中にあるときのやうなもので、匿れてしまつて役に立たないし

それらのものが外へ出るとすれば必ずそれらのものの本來のこんらん状態をとることになる。*自然はそれらをすべて、一を他にとぢこめることなく、するつけてゐる。^(二)

(一) 「汝つつしめ、堪へ忍べ」(ストア主義の標語)。(二) ホールロワイヤル版はこれに附加して「それゆゑにこれらの區別やこれらの訓言は、記憶のたすけになり、内容を明示する名宛の役をするほかには、ほとんど用に立たない」

二一 自然はすべての眞理をおののそれ自身のうちにするた。我々のわざはそれらを一を他にとぢこめる、しかしそれは自然ではない。それぞれがそれみづからの立場を保つ。

二二 私は何も新しいことをいはなかつた、といつてくれてはならぬ、材料の配置は新しい。ロインテニスをするとき双方の打つのは同じ一つの球である、が一方は他方よりもよくそれを打ちこむ。

私は古い言葉を使った、といつてもらへたらそれだけ私はうれしい。思考は同じであらうとも*配置をかへるなら*別のちがつたらんぎの形が出来上るものであり、もしこれが出来上らないなどといふなら、ことばは同じであつても列べ方をかへるならちがつた思想が出来るといふ事實も、成り立たなくなつてしまはう!

二三 ことばは色々に配列されて色々の意味をとる、また意味は色々に配列されてちがつた効果を生む。^(三)

(一) たとへば grand homme とさふときと homme grand といふときとは全くちがふ。フランス語にはこの例が多い。また originalité, simplicité, malice などのことばは言ひまはしてより全く異つて解釋せられる。たとへば C'est un artiste original とさふときと Ce n'est qu'un original とさふとき。

ことば

二四 精神をほかへ外らしてはならない、外らせるのはただ憩はせるためだけにしなければならない、それも適当なとき必要なときに憩はしめるためだけにしなければならない、ほかのときはいけない、なぜなら適当な時をえないで憩はせると疲らせてしまふ、また適当なときをえないで疲らせると憩はせてしまふ、といふのは、すつかり手をひかしてしまふ。さやうにも、いぢわるの邪欲は好んで、我々が我々から得ようとのぞむこととまるで反対のことをして、我々に快樂をあたへてくれようとしない。——我々が人にその人のぞみしだいのものを何でもあたへてそれと引換へにもらふお金のやうなものである快樂を。

(一) Epictète, Dissertation, III, III, II のこの比喩がある。

雄辯

二五 こころよいものと實際のものが必要である、ただしこのころよいものはそれみづから眞實からくみとられてゐるものでなければならぬ。

二六 雄辯は思想の繪である、さうであるからゑがいてしまつてのちなほ附け加へる人は、肖像の代りに繪畫を作る。

(一) モンテーニユのよく用ひる比較。エッセーノ二五、三ノ五を参照。(二) 繪畫 tableau とは外面的效果をめざしてとのへられた情景、人爲と想像とによる作品を示してをり、肖像 portrait とはモデルの内面的性質の表現を試みる作品を示してゐる。パスカルはつぎのモンテーニユ(一ノ二五)のことばを回想してゐる。「全くこのやうな繪畫はすべて、單純にして素朴なる眞實の光のまへに消え失せる」

雜錄 ことば

二七 ことばをむりに使つて對句を拵へる人々は均齊のために目くら窓を設ける人々に似てゐる。この人の規則は、正しく話すことにはなく、正しい形を作ることにある。

均 齊

二八 これは一と目で分る。

これはかうよりほかにはする理由がないといふことの上にその基礎を持つてゐる。また人間の形態の上にもその基礎を持つてゐる。*このことからして人は均齊を横の方向においてのぞむが、高さにおいても與行きにおいてものぞまぬ。

(一) *ここに心理學的説明の面白い試みがある。我々が均齊 symétrie を求めるのは眼にとつてであり我々の

視界の範圍においてである。我々は殊に均齊を横の方向においてのぞむがそのわけは人體自身が横の方向において對象的であるからである。

二九 自然的なる文體を見ると人は大そう意外におもひうつとりする、なぜなら作者を見るつもりであるのに人間を見出すからである。ところがよい好みを持つてゐて本を見るにあたり人間を見出すつもりである人は作者を見出すと全く不意をうたれ失望する。Plus poëticque quam humanae locutus es. ⁽¹⁾自然はあらゆることについて語ることが出来る、神學についてさへ語ることが出来る、といふことを、自然からまなぶ人々は、よく自然をたふとぶ人々である。⁽²⁾

(一)「あなたは人間としてよりも詩人として語つた」(ペトロニウス九〇) (二)自然をたふとぶこと——パルザックが既にその著 Socrate chrétien のうちにいふ「神學について書くためには神學を知つてゐるだけでは十分でない」このことをみごとに實踐に移したのは『田舎人への手紙』の作者ではなかつたらうか。

三〇 ジャンセニストののべる第二第四及び第五の談論を見よ！これは高いものだ、またまじめだ。

「私はふざけも誇張もひとしくきらふ」* いづれの友にもなれない*

人は耳にしか相談しない。心を缺いてゐるからである。

彼の規準は正味といふことである。

詩人ではあるが純粹人ではない。⁽²⁾

「私の第八以後私は十分返答したとおもつた」

省略の美、判断の美

(一)『田舎人への手紙』のこと (二)詩人ではあるが純粹人 honnête homme ではない——斷章二九に引用せられてゐるペトロニウスを暗示してゐる。なほ純粹人とは十七世紀の一般的意味に解するなら家柄のよい風貌のりつぱな教養の深い人、おほよそ社會において自分を快適とするにふさはしいあらゆる性質をそなへた人のことであらうがそれぞれのモラリストにおいて使ひ方はひじやうにちがふ。パスカルはこのことばで、色づかぬ丸裸の人間をさしてゐる。素地のままの人間、純粹の人間である。人間としての人間とでもいはうか。

三一 我々はいつはりの美といふ點を指摘してキケロをひなんするが、このいつはりの美にはすべてに讃歎者がゐる、それも大そうおほぜいゐる。⁽¹⁾

(一)ここに我々といふのはパスカルのほかにモンテーニュ(二ノ一〇および二ノ三二)やシユヴァリエ・ドゥ・メレなどをさしてゐる。この人々はキケロの簡素にして自然なる性質を越えたすべてのもの、華麗をしか目ざさぬすべてのものを異口同音にとがめる。たとへばメレはキケロをひなんしてかう語る。この雄辯家は「いつ

も文人として自分を表明してゐる」さうして「思想と表現とのあひだに保たせなければならぬところの正しい関係をいたるところで考へる」といふことをすこしも知らない。

三二 強いものもあり弱いものもあるさういふ我々の性質と、それから我々に氣に入る事物と、この兩者のあひだに存在する或る關係において成り立つところの快適と美との或る原型がある。

この原型にもとづいて作られたものは、家にせよ、歌にせよ、話にせよ、詩にせよ、散文にせよ、女にせよ、鳥にせよ、川にせよ、木にせよ、部屋にせよ、著物にせよ、すべて我々の氣に入る。

この原型にもとづかないで作られたものはすべて、よい好みをもつ人々を不快にする。

またこのよい原型にもとづいて作られた歌と家とは——それぞれその種類に従つてゐるとはいへただ一つの原型に似てゐるのであるから——そのあひだに完全な關係がある、それと同様に悪い原型にもとづいて作られた事物のあひだにも完全な關係がある。悪い原型はただ一つだといふのではない、悪い原型は無数にあるのだ、がたとへばまづい十四行詩は——それがいかなるいつはりの原型によつて作られたにせよ——このいつはりの原型によつて衣裳をつけたところの女にまつたく類似する。

まぢがつた十四行詩がいかに笑ふべきかを知るためには、その本性とそれの原型とをよく見、次にその原型にもとづいて装ひをした女或は作られた家を、目に浮べるほどよいことはない。

詩の美しさ

三三 詩の美しさといふやうに幾何學の美しさ醫學の美しさといつてもよささうである、がさうはいはない、そのわけは幾何學の目的は何かといふこと、それは證明であるといふこと、醫學の目的は何かといふこと、それは治療であるといふことを人は知つてゐるからである。しかし詩の目的であるところの快さとは何で出来てゐるものであるかを人は知らない。手本とすべき自然的な原型がどんなものであるかを人は知らない。そこでそれを知らないために人は或る妙なことを作り出した。黄金の世紀とか現代の不可思議とか宿命的とかさういふことを。さうして人はこのしやれたことを詩的美とよぶ。

しかし小さなことがらを大げさなことでいふことにおいて成り立つところの原型にもとづいてゐる一人の女を想像しようとする人は、美しい一人の娘が玉鏡や輪を一ぱい身に装つたさまを目に浮べるであらう、さうしてこれを笑ふであらう、なぜなら人は、詩の快さよりも一さうよく女の快さがどういふもので出来てゐるかを知つてゐるからである。しかしそれを知らぬ人々はこの娘をこのやうな身なりにおいて歎稱するであらう、またこれを女王と見まがふ村もたくさんあらう、だから我々はさやうな原型にもとづいて作られた十四行詩を村の女王とよぶ。

三四 詩人とか數學者とかそのほかさういふ看板をあけなければ詩に或はさういふものに堪能な人としては世間に通用しないものである。ところが普通人は看板を用ひない、また詩人の職と刺繡工の職とのあひだにほとんど區別をしない。

普通人は詩人ともよばれず幾何學者ともよばれずそのほかどんな人ともよばれない、がそれらのものの

いづれでもある、さうしてそれらすべてのものを批判する者である。普通人はすこしも見抜かれることがない。彼ははひつたときそこで話されてゐたことを自分も話題にとつて話をする。人々は、彼の持つ特性のうちとりわけて一つの特性を見るときは、いふことはない、尤も必要があつてその特性を用ひるときは別である、さういふとき人々は思ひあたる、なぜといつてことばが話題になつてゐないときは彼が話に巧みであることはうはさされぬし、ことばが話題になるときは彼が話に巧みであることはうはさされる、さういふことはどちらも彼の性質にぞくしてゐるのである。

さういふわけであるから人がはひつてきたときその人が詩に大そう巧みであることが人々の口にのほるやうならその人はいつはりの稱讃をあたへられてゐるのである、しかし或る詩句を批評する必要のおきたとき意見を求められないとするならそれは好ましくない現象である。

(一) 普通人 *gens universels* の概念の根柢はすでにモンテーニュに見られる、殊にエッセー一ノ二五には次のやうな文句がある「さて我々はここで反對に文法家でもなく論理學者でもなくむしろ眞の人間 *gentilhomme* を作らうと努める」。また一ノ五四には「素樸な百姓は正味の人間 *honestes gens* ださうして正味の人間は哲學者だ」。また三ノ九には「まつたくだ、正味の人間は無礙の人間である」。ここに無礙 *mesle*、といふのはモンテーニュにとつていかなる世界にも立ちまじることを知るといふ意味である、ところがたとへば詩人は同じ種類の人々を相手に詩のことがらをしか話すことを知らない。

三五 數學者だ、説教師だ、雄辯家だといはれぬこと、正味の人間 *honnête homme* だといはれる

ことが大切である、この普遍的性質のみが私の氣に入る。人を見てその人の著書を思ひおこすやうなら、それは悪い徴候だ。私はどの性質にも氣付かれたくない。必要がおきてそれを——*Ne quid nimis*——用ひるときを除いては。ある一つの性質がきはだち、異名をつけられるといやだからである。私は話に巧みだとおもはれたくない。ただし巧みに話す必要のあるときは別だ、そのときはさうおもはれたくない。

(一) モンテーニュ一七「りつばな心とは普遍的で開闊で萬事に純正なるもの、教へこまれてはあなくともすくなくも教へられうるものをいふ」 (二) 「すぎたるところのすこしもなく」——ギリシアの賢者たちの格言であるとせられてゐる。

三六 人間はかすかすの必要に満ちてゐる。人間はそれらのすべてを満たしうる人々をしか好まない。あの人のはりつばな數學者だとひとはいふかもしれない。——しかし私は數學に用はない。數學者は私を一つの命題ととりちがへるかもしれない。——あの人のはりつばな軍人だ。——軍人は私を攻めかこんだ要塞ととりちがへるかもしれない。従つておほよそいかなる私の求めにもおうじてくれることのできる正味の人間が必要である。

三七 「すべてのものをすこしづつ。——人間は萬物に關して知られうるかぎりのあらゆることがらを知つて萬物抱有の者となるといふことはできないのであるからには、すべてのものをすこしづつ知るといふことにしなければならぬ。なぜなら一つのものについて何でも知つてゐるよりすべてのものについて幾ら

かづつ知つてゐるはうがすつとりつばなのである。*さういふ普遍性が何よりもりつばである。二つながら有しうるならさらによからうけれども選ぶとするならばこれを選ぶべきである、民衆はそれを心得てるそれをおこなつてゐる、なぜなら民衆はしばしばすぐれたる批判者である*」

三八 詩人であつて純粹人でないひと。

三九 もし雷が低いところへ落ちるとかあるひはさういふそれに類したことがあるとしたら、詩人や、この種のことならにもとづいてしか推理することを知らぬ人々は、證據を缺くことにならう。

四〇 人は例をとつて或ることがらを證明する、が、もしこの例を證明しようとするとなつと、この或ることがらをその例としてとるであらう、なぜといふのに困難は證明しようとするものうちにあるといふことがいつも念頭にあるために、例を明瞭なものさうして證明に役立つものとおもふからである。

だから一般的事物を證明しようとおもふならば一つの場合の特殊の規則をそれにあたへなければならぬ、しかし特殊の場合を證明しようとおもふならば「^{B.T}一般的」規則からはじめなければならぬ、そのわけはいつも人は證明しようとおもふことがらを分りにくいものにおもひその證明に用ひるはうのことがらを明瞭なものとおもふからである、なぜといふのに或ることがらを提出されてこれを證明せよといはれると、さてこそこれは分りにくいものであらう、また反對に、その證明に用ひるはうのことがらは明瞭なもので

あらう、そんな想像にまづ満たされる、さういふふうにして容易に理解するからである。

マテイヤリスの諷刺詩

四一 人間はいぢわるがすきである、ただしそれは片目や不幸な人々に對してではなく、高ぶつた幸福な人々に對してであるが。*さうでないならまちがつたことだ*

おもふに邪欲は我々のあらゆるうごきの原動力である、*さうして人間性^{T(1)}*
人間的なやさしい感情をもつ人々に氣に入つてもらふことは必要である。

二人の片目の諷刺詩はつまらない、なぜならこの諷刺詩は彼らをなぐさめぬ、なほまた作者の名聲にひと撮みの香の物をそへるにすぎない。作者のためにあるにすぎないやうなものはどんなものでもつまらない。Ambitiosa recidet ornamenta.⁽¹⁾

(一)「さうして人間性」このことはバスカルの加筆であり、邪欲と——さうして人間性と——この二つは我々のあらゆるうごきの原動力であるといふのである (二)「華美にすぎた文飾をけづらう」ホラティウス Epitre aux Pisons, 447-448.

四二 王を公爵とよぶのはゆくわいだ、なぜなら位^{くらゐ}がさがる。⁽¹⁾

(一) 王に公爵といふ名をあたへるのは臣下にとつてはゆくわいなことである。君主の身分が低まつてしまふからである。へだたりのすくなくなることを人間の悪意はよることよ。

四三 ある作者たちは自分の著書のことを「私の本、私の註釋、私の物語」などといふ。——自分の家に住んでゐていつも「うちでは」を口にしてゐる俗人のにほひがする。「私どもの本、私どもの註釋、私どもの物語」などといふはうがよからう。なぜならふつうさういふものの中には彼らの財よりも一そう多く他人の財がはひつてゐるのだから。

(一) この文章は Bossut 版に始めて収録せられたものであるが素性は明らかにせられてゐない。誰かによるパスカルのことばの想起であらう。

四四 君は人からよくおもはれたいか。さうであるなら君のよさを人に語つてはならない。

(一) モンテーニュ三ノ八「自分のことをしゃべればきつと損をする。自分に對するひなんは必ずふえ稱讚はくる」

四五 國語といふものは、文字が文字に變るのでなく言葉が言葉に變るところの符牒である。さういふわけで未知の國語も判讀しうる。

(一) 幼時母を失つたパスカルは父によつて教育せられた。この斷章にはこの父による教育の回想があるやうにおもはれる。ライブニッツは繪入りの『テイトス・リヴィウス』の繪の下にある文言の意味を判讀しながらラテン語を學んだといふがパスカルは十二歳になるまでラテン語を學ばせられなかつた。それは能力に餘裕を

持たせつつ物を學ぶといふ教育方針に従つたためである。がこの期間も決してむだにすごされたのではなく、國語とはどういふものかといふこと、それが或る規則の下に文法に要約せられてゐること、規則にも注意すべき例外のあること、かくていかなる國語も一から他へと移しうる方法の見出されてゐること、これらのことが教へられたから、この概念によつてパスカルの頭腦は整理せられ文法の規則の存在理由は明確にせられ、やがてラテン語の勉強を始めたとき十分の自覺をもつて勉強に熱中することができた。

四六 「口のうまい人」、悪いしるし。

(一) 口のうまい人は性が悪いといふ意味にふつう理解せられてゐるが、トルヌールの解釋によればある人のことを口のうまい人だといふのはそれはよくないよび方だなぜならそれはその人に目じるし(看板)をあたへることになるといふ意味であるといふ。詩人とか數學者とか雄辯家とかそのほかさういふ看板をかかげるとは純粹人ののぞむところではなかつた。

四七 話をするのは上手であるのに書くのは上手でない人々がある、そのわけは場所や聴衆がその人々を熱し、その人々の心から、この熱のないときにその人々の見出すであらう以上のものを、ひき出すからである。

(一) モンテーニュ一〇「機會、伴侶、すすんでは私のこゑのふるへ、さういふものが私の心から、私が自分ひとりで心をさぐり心をつかふときに私の見出す以上のものをひき出してくれる。だからことばは書いた物よりも値打が高い……」

四八 話の中にことばのくりかへしがあるのを見つけてそれらをなほさうとつとめるとき、もしそれらをなほすと話をそこなつてしまふほどにそれらがびつたりしたものであると知つたならば、そのままにしておくことが必要である、なほせば話をそこなつてしまふといふことは、なほしてはならぬといふ證據である。だからさういふ場合にそれらをなほしたい氣持になるならその氣持は盲目であつて、このくりかへしがこの場合缺陷でないことを知らないものである、なぜなら一般的規則などといふものはないのであるから。

四九 自然をおほうてこれを假裝せしめること。「王」「法王」「司教」でなく「尊嚴なる君主」またパリでなく「王國の首都」*等々*

ある場所ではパリをパリとよばなければならぬし、ほかのある場所ではこれを王國の首都とよばなければならぬ。

五〇 同じ一つの意味でもそれを表はすことばによつて變はる。意味はその品位を、ことばにあたへるのではなく、ことばから受けとる。その例を捜さう……(11)

(11) 同じ職を表はすのに僧侶といひ坊主といふ。どちらを用ひるかによつて我々の表はす意味乃至思想はすでに同じでない。

五一 頑固なものとして、ピュロンの徒。

五二 宮廷人^Tでない人々だけがひとを宮廷人^Tとよぶ。生^なま學者だけが生^なま學者とよぶ。田舎人だけが田舎人とよぶ。『田舎人への手紙』といふこの題に田舎人といふことばを用ひたのはきつと印刷者にちがひないと私はおもふ。

(11) 宮廷人でない人々だけがひとを宮廷人とよぶ、いひかへると宮廷人——つまり honnête homme ——はひとを「宮廷人」とよばない、すなはちひとを特長づけるやうなことばをひとにあたへることを好まない、ひとに異名をつけることを好まない、さういふ意味のことをパスカルはいはうとしてゐるのであらう。

五三 意圖に従つて馬車がたふれた *verse* 或はくつがへされた *renverse*。意圖に従つて流す *répandre* 或はそそぐ *verser*。

ル・メートルの口答辯論。むりに繩帶僧^{コルドル}にさせられる者⁽¹¹⁾。

(11) 意圖のない場合たとへば自然の事故による馬車はたふれた *verse* といひ意圖のある場合馬車はくつがへされた *renverse* といふ。また水をうつかり流す(こぼす)ときは *répandre* としつむわざとするときはそそぐ *verser* といふ。繩帶僧^{コルドル}とはフランシスコ派教團の僧のこと。アントワヌ・ル・メートルの辯論集第六篇「むりに宗門に入れられる或る息子のために」の初めに、神は正しからざる欲情に盲目と暗黒とを流した

まふ repand とあるのは、もしパスカルのここにのべた意見によるとすればそそぎたまふ verse としたはうがよいといふことになる。

雑録 はなしの仕方

五四 「私はそれに専念したかつたのだが」

五五 ねぢまはしの進める力、鉤かぎの引く力。

五六 見抜くこと。

「君の不満にあづかる私」

樞機官は見抜かれることを好まなかつた

「私は不安に満ちた心を持つてゐる」「私は不安に満ちてゐる」このいひ方のはうがよい。

五七 こんなあいさつに私は不快をおぼえた。「ご苦勞をかけました。おいやでせうが。あまり長すぎるかもしれません」——これは人をひき入れるか、人をいらだたせる。^(一)

(一) こんなあいさつをきくとじつさいにかけられてゐる苦勞をわざわざ意識させられ苦勞のおもひにひきいられることになる。あるひは、自分のしてやつた事とつりあはないでいねいすぎる感謝のことは返されて

いらだたされることになる。いづれにしても不快をおぼえる。

五八 「君は義理といふものをわきまへぬぞ。失禮ながら」この失禮ながらといふわびがそへられなかつたら、私はのしられたことにすこしも氣づかなかつたであらうに。「おそれいりますが……」「こんなことわりほど厭いとふべきものはなう。

五九 Eteindre le flambeau de la sédition——あきのわへらほつて。

L'inquiétude de son génie——大膽な二語が過ぎる。

六〇 第一部 神を持たぬ人間のみぢめさ。

第二部 神を持つ人間の至福。

あるひは、

第一部 本性の墮落してゐること、本性そのものにもとづいて。

第二部 贖主あがなひぬしのあること、聖書にもとづいて。

秩序

六一 私はこの論を次ぎのやうな秩序において取扱つたかもしれない。すなはちあらゆる種類の存在の仕方のみなしさを示し、一般の生のむなしさを示し、次ぎにピュロンの徒やストア派の人々の哲學的生のむなしさを示す。しかしこの秩序は守られないであらう。私は秩序といふものがどんなものであるかをすこしは知つてゐる。またこれをいかにわづかの人々しか理解してゐないかをも知つてゐる。人間のいかなる學問もこれを守ることではできない。聖トマスもこれを守らなかつた。數學はこれを守る、が數學はその深さの點で用に立たない。

六二 「(一)にのべることは、認識の本體を論じた人々についてであり、シャロンの立てた區別についてである、*この區別は人を憂鬱にし退屈にするが*。それからまたモンテーニユの混らんについてのべる。それから彼が「直線的」^{B T}方法の缺陷を感じてゐたこと、彼がそれを主題から主題へ跳ぶことによつて避けたこと、彼がいきなやうすを求めたことをのべる。

自分を忍がかうとする彼のおろかなるくわだて！ それも、ほんのちよつと*そして自己の主義に反して、ちやうど誰しもあるやまぢをするやうなふうにして*おこなふのではなく、*自己固有の主義として*また第一の主要なる目的としておこなふのである！ おもふに偶然にまた弱いがゆるおろかなことがらをいふのはふつうに見られる缺點であるがわざといふのはこれはがまんのならぬことである、さらに次ぎのやうなことをいふのは……

モンテーニユ

六三 モンテーニユの缺陷は大きい。かすかすのみだらなことは、これはグウルネ嬢がどういはいはうと何の値打ちももたない。輕信。眼を持たぬ人々。無智。圓をそれにひとしい面積をもつ正方形にすること。さらに大きい世界。自殺や死に關する彼の意見。彼はおそれなく悔いなく救ひに對する無關心をふきこむ。彼の著書は信仰へのいざなひを目的としたものではないから、必ずしも信仰を説かなければならないといふことはなかつた、がしかし信仰から人をさらさぬやうにすることはいつの場合にも心がけらるべきこと

である。生涯の或る幾つかの機會における少々自由にして享樂的な考へに對しては言ひわけをすることがゆるされる*七三〇、(七)三^{T(二)}*がしかし死に關する彼の全く異教徒ふうの考へに對しては、言ひわけをゆるすことができない。なぜといふのに、もしすくなくともキリスト教徒として死ぬといふことをのぞまないならあらゆる信仰をすてなければならぬ。ところで彼は、彼の全著書にわたり、だらしなく締まりなく死ぬことをしか考へない。

- (一)「私は死を生の終りとして無頓着にながめる」(モンテーニユ三ノ四)「この人生をくりかへすことになつたら生きてきたやうにして生きるつもりだ。私は過去を惜しまないしまた未來をおそれもしない」(三ノ二)
- (二)「一六三五年及び一六五二年版『エッセー』の頁を示す。モンテーニユはそれらの箇處で苦痛のことや」(二ノ三七) 自分の病氣のことを(三ノ九) 語つてゐる。

六四 私はモンテーニユにおいて見るすべてのことをモンテーニユのうちでなく私自身のうちに發見する。

六五 モンテーニユの持つてゐるよいところはこれは困難をもつてのみ獲得せられたものにちがひない。彼の持つてゐる悪いところは——彼の徳性以外のものを私は意味するのであるが——これは一時矯正することができたであらう、もし人が彼に向つて、あまりもつたいをつけすぎる、あまり自己を語りすぎると忠告してやつたのであつたら。

六六 自分自身を知らなければならぬ。自分を知ることが眞理を見出すことに役立たないとしても、
なくとも自分の生を規則づけることに役立つ、さうしてこれほど正當のことはない。

學問のむなしさ

六七 外面的事物に關する學問は、苦しみるとき、道德に對する私の無知をなぐさめ^てくれない、しかし
徳性 *mœurs* に關する學問はいつも、外面的學問に對する私の無知をなぐさめてくれる。

六八 人々は眞の人間 *honnête homme* となることを教へてもらふことがない、^(一)ほかのことがらは何で
も教へてもらふことができる。ところで人々が、ほかのことがらについて何か知つてゐることを大いに誇
らうとするとき、何よりもまづ誇ることはただもう、眞の人間となるすべを知つてゐるといふことであ
る。彼らの一向に學ばぬただひとつのことであるものを知つてゐるとするものが、彼らのもつばらなる誇り
なのである。

(一) モンテーニュ一ノ二五を参照「我々は人生がすぎ去つた時分に生きることを學び知る」

六九 あまり早くよむと分らない、あまりゆつくりよんでも分らない。

二つの無限 中間

六九ノ二 あまり早くよむと分らない、あまりゆつくりよんでも分らない。

七〇 自然は……—「自然は、我々をじつによく中間にするたから秤の一方を變へると他方も變はる。
Je fasons, zôa trekei.」^(一)このことから私は考へさせられる、我々の頭の中には、一方にふれるとその反對
の方にもふれることになるやうなぐあひに取りつけられてゐるばねがある」

(一) フランスの方言におけるやうに單數の主語に複數の動詞をつける。さうかとおもふとギリシアの古典に
おけるやうに複數の主語に單數の動詞をつける。上例のことはの意味は、私はする、動物は走る。

七一 多すぎる酒、すくなくすぎる酒。彼にすこしもあたへずにもたまへ、彼は眞を知ることができない。
あたへすぎてみたまへ、同じことだ。

人間の〔無能力〕不均衡

七二 「自然に關して我々のもつところの認識は……へ我々をみちびいてゆく。この認識がもし眞でない
とするならば人間のうちには眞はない*また*もし眞であるとするならば人間は、いづれの仕方によるに
せよ身をひくめることを強ひられて、卑下すべき大いなる理由をそこに見出すこととなる。

人間はこの認識を持たずには存在することができないのであるからには、自然を一そうふかく探究する
に先き立つて私は希望したい、自然を一度まじめにさうしてゆつくり觀察せよ、また自分自身をも注視せ

よ、さうして人間が自然といかなる釣合ひをなしてゐるかを見たのち……」

されば全自然をその高くまた満ちたる威容のうちにながめよ、身のまはりにある低いもろもろの對象から眼を遠くへむけよ。あのきらめく光が宇宙を照らす永遠のランプのやうにするらるるのを見よ、この太陽のゑがく大なる輪にくらべるならば地球も一點に見えることをおもへ、この大なる輪そのものもまた大空をめぐるもろもろの天體のいづくものにくらべるならばごくかすかなる尖端にすぎないことにおどろくがよい。しかしもし我々の眼がそこに歩みをとめるならば我々の想像力をしてそこを越えてゆかしめるがよい、自然が提供するのに疲れるよりもむしろ想像力が抱懐するのに疲れるであらう。見えるところのこの全世界が自然のゆたかなるふところにおいては眼にもとまらぬ一線にすぎない。いかなる想念もそれに近づくことはない。我々の觀念を*想像せられうるいかなる空間以上に*ひろけていつてもむだである。事物の實在にくらべて原子を作り出すにすぎない。それは中心をいたるところにもち周邊をどこにももたない無限大の球である。要するに我々の想像力がさういふものの思ひのうちに失せ去るといふことは神の全能を明白に感知せしめる最も大なるしるしである。

人間をして自己自身に立ち戻りすべての存在にくらべて人間がいかなるものであるかを觀察せしめるがよい。自己が自然のへんびな一隅にさまよふのを見るがよい。さうして彼の宿るこの小さな土牢、といふのはこの宇宙のことを私は意味するのだが、この小さな土牢から地球を、國を、町を、また自己自身を、その正しい値打に見つめることをまなぶがよい。無限のうちにあつて人間とはいかなるものであらうか。

しかしこれと同じくおどろくべきもう一つのふしぎを示すために、人間をして人間の知れる物のうちに最も微小なるものをさがしめよ。一匹のシロン(ダニの一種 譯者)を得てその小さな體のうちにその體と比較にならぬほど小さい諸部分を見よ、關節をもつた脚を、脚のうちに血管を、血管のうちに血を、血のうちに液質を、液質のうちに滴を*滴のうちに蒸氣を*見よ、さらにこの蒸氣を分析して、彼の思考力をつきはてさせよ*さうして*彼の辿りつくことのできる最後の對象を今あらたに我々のはなしの對象とするがよい。これこそ自然のうち最も小さなものであると彼はおそらく考へるであらう。

私はそこにあらたなる神祕境のあることを彼に示したいとおもふ。私はこの原子の縮圖のはんる内に、目に見える宇宙のみならず自然について考へられうるあらゆる無邊際を亙がいてみせたい。人間はそこに無数の宇宙*を見るがよい*それらの宇宙はそれぞれその天空とその遊星とその地球とを*この見える世界におけると同じ比例をなして*持つてゐるのである。次いでその地球のうちに動物を見、*最後に*シロンを見ちがよい、彼はこのシロンのうちにさまほどのシロンの示したものを見出すであらう。さうしてさらにこのあとのシロンのうちにさまほどと同じものを限りなく休みなく見出して「茫然とするであらう」

人はそれらのふしぎのうちに——さまほどのふしぎがその大いなることにおいておどろくべきものであると同じやうにその小なることにおいておどろくべきものであるところのそれらのふしぎのうちに茫然とするがよい。*なぜといつて*さまほどは萬有のふところにあつて眼にもとまらなかつた宇宙のそのまた中にあつて眼につかなかつた我々の體が今は、この辿りつくことのできない無にくらべて一つの巨人とな

り一つの世界となりむしろ一つの萬有となるのを見て、誰か驚嘆しない者があらうか。

「自分をこのやうに眺める人は自分自身におそれをいさぐであらう、さうして、自分が自然のあたへてくれた體のうちにあつて無限大と虚無とこの二つの神祕境の中間に支へられてゐるのを見、そのふしぎの眺めにおののくであらう。私はおもふ、人間の好奇心は驚嘆に變り、もうそれらのふしぎを僭越せんえつなる心をもつて探究しようとするよりも黙つて眺めようといふ氣持になるであらう。

おもふに結局人間とは自然においていかなるものであらうか。無限にくらぶれば虚無であり虚無にくらぶれば萬有であり、虚無と萬有とのあひだの中間者である。二つの窮極を知ることから限りなく遠いところに置かれてゐる人間にとつては、事物の窮極もまたその根源も、はかり知れぬ祕密のうちにどうしようもなく匿されてゐるのである。

人間は彼の曳き出されてきたところの虚無をも、彼の呑みこまれてゆくところの無限をも、ひとしく見ることができない。

さうであるならば人間は、事物の窮極をもまたその根源をも知ることのできぬ永遠の絶望のうちにあつて、ただ事物の中間者の持つ「何らかの」外見を見ること以外に、何をなすのであらうか。すべてのものは虚無より出でて無限へと運ばれてゆく。*誰がこのおどろくべき歩みに隨いてゆくのであらうか*。このふしぎを創造した者はこのおどろくべき歩みを知つてゐる。ほかの者は誰も知ることができない。

人間は、これらの無限を見つめることをせず、あたかも自然と何らかのつりあひでももつてゐるかのやうに大膽だたんに自然の探究へのり出した。

妙なことだ、人間はその対象と同じ無限の不遯ぶたんをもつて、事物の根源を理解しようとのぞみ、そこからまた萬物を知るにいたらうとまでのぞんだのである、おもふにさやうなくわだては、自然のやうに無限の能力乃至僭越をもつことなくしては、たしかに、もくろみうべくもないことである。

人はよく教へられるならばつぎのことになづく、自然は自然の似顔と自然を創造した者の似顔とをすべての事物の上なきざみつけたから、事物はほとんどすべて自然の二重の無限性にあづかつてゐる。さうであるから、いかなる知識もその探究のはんらは無限であることが分る、なぜといつてたとへば幾何學の提出する命題の數は無限に無限であるといふことを、誰が疑はうか。これらの命題はそれらの原理の多數性とこまかさにおいてまた無限である、なぜなら、これこそ窮極のものであるとして人の提出する命題も、じつはそれみづからによつて立つてゐるのではなくてほかの命題によつて支へられてゐるのであり、ほかの命題なるものがさらにまたほかの命題を支へてもつてゐるのであり、決して窮極のものとはなりえないといふことを、理解しえないものが誰かあらうか。

*しかし*我々は、ちやうど、物質的なものにおいて、もうこれ以上は我々の感覺が何も見とめることのできなくなるさういふ點を——尤もその性質からして無限に分けてゆかれるものであるとはいへ——不可分の點とよんで、窮極のものを設けると同じやうにして、これが理性の見とめうる窮極のものであるといふものを設ける。

これら知識の二つの無限性のうち大のはうの無限性はずつと感知せられやすい、そこで幾人かの者は主張して自分はあらゆることがらをとりあつかふといふにいたつた。私はこれからあらゆることについて語

つてゆかう、デモクリトスはさういつた。

しかし小における無限性はそれほど眼に明らかでない。哲學者たちはしばしば主張してそこに到達したといつた、がそこにみんな足ぶみしてゐるのである。「事物の原理について」とか「哲學の原理について」とかそのほかさういふ——外見上はさほどでもないが實際にはあの *De omni scibili* といふ人の目を見はらせる一題名と同じやうに豪華な——さういふ書名が、ごくふつうのものやうにして生じたのは、さういふわけである。

我々は、事物の周邊を抱擁することよりも事物の中心に到達することのほうがずつとらしくできるとおのづから考へる。世界の見えるはんるは明らかに我々を越えてゐる、が我々自身が小さな事物を越えてゐるものだから、それら小さな事物をずつとらしく把握できるとおもふのである、しかしながら虚無にまでゆくには萬有にまでゆくの劣らぬ能力がある。虚無にまでゆくにも萬有にまでゆくにも無限なる能力を、必要とする。ものの窮極の原理を理解しえた人があるとしたらその人はまた無限をも知るにいたるであらうと私にはおもはれる。一は他に依存してゐる、また一は他へみちびいてゆく。この兩極は互ひに離れて行つたがゆゑにふれあひむすびつき、神においてただ神においてのみめぐりあふ。

されば我々は我々の限界を知らう。我々は何ものかであるが萬有ではない。我々の存在の仕方は、虚無より生れる第一原理を知るみちを我々からうばふ。また我々の存在のとほしさは、我々の眼をふさいで無限を見ることをゆるさない。

我々の叡知は、身體が自然のひろがりにおいて占めてゐるのと同じ地位を、概念の世界において占めて

ゐる。

* 我々はあらゆる仕方で制約されてゐるから、兩極のあひだの中間者といふこの状態はあらゆる我々の能力のうちにかがはれる。我々の感覺は極端なものを何もつけけない。あまりひどい音は我々をつんほにし、あまり多い光は我々の眼をくらませ、あまり離してもあまり近づけても物は見えない、あまり長くてもあまり短くても話は分りにくい、あまり多い眞理は我々を茫然とさせる、私は零から四を引けば零であること分らぬ人を知つてゐる。第一原理は我々にとつてあまり多くの明證性を持つてゐる、あまり多くの喜びはいやであり、音楽においてあまり多くの協和音は不快であり、あまり多くの恩恵をうけると我々はいら立つ、我々は恩を十二分に返すに足るほどのものを持ちたいとおもふ。 *Beneficia eo usque*

laeta sunt dum videntur exsolvi posse; ubi multum antevenero, pro gratia odium redditur. (1) 極

度のあつさ極度につめたさは知覺せられない。過度の性質は我々にとつて有害である、さうして感覺にはほらない。我々はもうそれを感じなくなり、それを自由にふるまはせる。あまり若いのもあまり老いてゐるのも知力をさまたける。教育のあまり多いのもあまりすくないのもまたさうだ。

要するに、極度の事物は我々にとつて無いにひとしく、我々はまたそれらの事物にとつて無いにひとしい。それらが我々をのがれるか我々がそれらをのがれる*

これが我々の眞の在り方である。このゆゑにこそ我々は確實に知ることでもできずまた全然無知であることもできない。我々はたえず定めなく浮びつつ一つの端から他の端へと押しやられてひろい中間にただよふ。いつれかの端に自分をつないでおちつかうとするとそこはゆらいで離れてゆき、追へば手をのがれて

すべり去り、どこまでも逃げる。何ものも*我々のために*じつとしてるてくれぬ。これが我々の本来の在り方である、しかるにこの状態は我々の好むところとまさに反対である。我々は固い地盤と*最後の*變らざるいしずるを見つつけそこに無限に向つてのびてゆく塔を立てようといふ希望にもえる、ところが我々の土臺はすべてゆらぎ、地面はさけて深淵をひらく。

されば確實と堅固とを求めないやうにしようではないか。我々の理性は變化定めない外觀につねにあざむかれる、さうして何ものも二つの無限の中間に有限を固定せしめることはできない、二つの無限は有限をのみこむ*さうして有限をのがれざる*

*このことがよく分つたら人はそれぞれ自然によつて自分の置かれた状態に安らかにみづからを保つであらうとおもふ。

我々の受け前としてたまたまたあたへられたこの中間者の境遇はつねに兩極からへだたれるものであるからには、人間が事物に關する知識をすこしばかり多く持つてばとて何ほどのことがあらうか。すこしばかり多く持つならば事物をすこしばかり深く見る、がやはり極からは無限に離れてゐるではないか、また我々の生命は十年長く生きたとて同じく永遠からは無限に離れてゐるではないか。

無限の眼から見れば、有限なるものはいかなるものもすべてひとしい。それらのものうち特にどの一つのものに想像をよけいめぐらすべきであるといふ理由はないはずである。

我々と有限とをくらべることだけが我々を苦しめる^(二)。

もし人間がまづ第一に人間自身を研究するとしたらそれを越えてさらにさきへ進むことのいかに不可能

なことであるかを知るであらう。

いかにして部分が全體を知ることができようか。——でもこの部分は、この部分とつりあひのうちにあるところの諸部分をすくなくとも知りたいとおそらくは願ふであらう。——ところが世界の諸部分といふものはそれぞれお互ひに或る關係或る連鎖を保つてをり一を知ることが他をおよび全體をよそにしては不可能であると私はおもふ。

たとへていへば人間は人間の認識するあらゆるものと關聯してゐる。彼は彼を容れるために場所を必要とし、存続するために時を必要とし、生きるために動きを必要とし、彼を作るために要素を、養ふために熱と食とを、呼吸するために空氣を必要とする。彼は光を見る。物體を知覚する。要するに一切のものは彼と關係してゐる。だから人間を知らうとするならばなにがゆゑに人間は生きるために空氣を必要とするかを知らなければならず、空氣を知らうとするならばなにがゆゑに空氣は人間の生命とさやうな關係にあるかを知らなければならず、等々……

焰は空氣がないなら存在しない、従つて一を知らうとするならば他を知らなければならぬ。

さうであるから、すべてのものは、因であり果であり、支へ支へられ、直接的であり間接的であり、いかにへだたつたもの、いかに異なつたものをも結ぶところの自然的でさうして感知されないつなでつながれてゐるものであるから、全體を知ることなくして部分を知ることが不可能であり、部分をくはしく知ることなくして全體を知ることとも不可能であると私はおもふ。

〔事物のもつてゐるところの、事物自身における或は神における永遠性は、これまた我々の短い生をお

どうかすにちがひない」

「自然のもつところの確乎不變の不動性もまた、我々のうちにおこる絶えざる變化にくらべるならば、やはり同じ効果をあたへるにちがひない」

事物はそれ自身において単一である、が、我々は精神と身體といふ互ひに反し種類を異にする二つの性質で出来てゐる、そのことが事物に對する我々の認識の無力さといふものをつひに決定的なものにしてしまふ。なぜといふのに我々のうちにあつて推理するところの部分が精神的なものであることはありえない。またもし我々を單に身體的なものであるといふならば我々はいよいよ事物の認識といふことから遠いものになつてしまふ、なぜなら物質が物質自身を認識するといふことほど分らぬことはないからである。物質がいかにして物質自身を知るかを我々は知ることができない^B。

そこでもし我々が單一なる物質^T「である」^Bならば我々は何一つ知ることができない。もし我々が精神と物質とで作られてゐるとするならば我々は單一なる事物を——それが精神的なものであるにせよ物質的なものであるにせよ^B——完全には知ることができない。

ほとんどすべての哲學者たちが事物に對する觀念を混同し、物質的なものを精神的なものやうに精神的なものを物質的なものやうに語るのはさういふわけからである。なぜなら彼らは大膽にかういふのである、物質は下へ向ふ、それはその中心にあこがれる、それはその破壊をさける、それは空虚をさらふ、またそれは傾向や共感や反感を「持つ」などと、これらはすべて精神にしかぞくしないものであるのに。また精神的なものについて語るとき彼らはそれをあたかも一つの場所にあるかのやうに考へ、一つの

位置から他の位置への運動をそれにあたへるのである、場所も運動も物質にしかぞくしないものであるの

17。

我々はこれらの事物の觀念を純粹のままに受け入れることをせず我々みづからの性質でそれを色づけ我々の見るあらゆる單一なるものに我々の複合せる存在をきざみつける。

あらゆるものを精神と物質とで出来たものであるとする*我々*を見て、この混合は我々にとつてごく理解しやすいものであらうと誰しもおもふにちがひない。ところがこれこそこの上もなく理解しにくいものなのである。人間は、人間自身にとつて自然における最もふしぎなる對象である。なぜなら人間は身體とはどういふものであるかを考へることができない。精神とはどういふものであるかはさらに考へることができない。身體が精神といかにして結合しうるかは全然考へることができない。ここに彼の困難は絶頂に達する。しかもそれが彼の固有の存在の仕方なのである。 *Modus quo corporibus adhaerent spiritus comprehendendi ab hominibus non potest, et hoc tamen homo est.*⁽¹¹⁾

最後に我々の缺陷を決定的に證明するために私は二つの考察をもつてをばらう。^T

- (一) タキトゥス『年代誌』四ノ一八(モンテニュー三ノ八)「思はこれを返しうるとおもふうちは快い。越え
ると感謝は嫌悪にかはる」(二) 我々と有限とをくらべることだけが我々を苦しめる。我々と無限とをくらべ
ることは、有限なるものがいかなるものもすべてひどいことを我々にをしへてくれる、従つて我々をなぐさ
めてくれる (三) アウグスティヌス『神の國』二ノ一〇(モンテニュー二ノ一二)「精神が身體に結合する
仕方は人間にとつて理解することができない、がしかしそれが人間である」

七三 「しかしおそらくこの問題は理性の能力をこえる。だから理性がその力のおよぶはる内にあることとがらに關してなしたところのもろもろの考究を吟味することにしよう。もし理性がその固有の關心をもつて最もまじめに努力したところのことが何かあるとするならばそれは至高善しこうぜんの探求といふことである。さうであるから、有能明察の人々がその至高善をどういふものと考へたか、またこの人々の考へは一致したかどうか、そのことを見よう。

「ある人は至高善を徳のうちにあるとし、ある人はそれを逸樂のうちにあるとし、ある人はそれを自然の知識のうちにおき、ある人はそれを真理のうちにおく * *Felix qui potuit rerum cognoscere causas.* * またある人はそれを全き無知のうちにおき、ある人はそれを怠惰のうちにおき、ある人々はそれを外觀に對する抵抗のうちにおき、ある人はそれを何もものを見てもおどろかぬことのうちにおく。 *Nihil mirari prope res una quae possit facere et servare beatum.* ⁽ⁱⁱⁱ⁾ またまじめなビエロンの徒はそれを彼らのアタクシア、懷疑、不斷の休止のうちにあるとし * またある一そう賢い人々はつぎのやうにいふ、人間は至高善を見出すことができない、どんな至高善を希望してよいかをさへ知らないと * ^(iv)。このくらの擧げたらもう十分であらう」

「次ぎの見出しで法律のあとにおきかへること」

「しかしこのりつばな哲學がその長いさうして張り切つた研究によつて何か確實なものを得たかどうか、

それを見なければならぬ。魂はすくなくとも魂自身を知ることにはできさうである。このことに関する世界の支配者たちのいふことをきいてみよう。魂の實體について彼らはどう考へたか。三九五〔頁〕。魂の實體を人間の身體の中のどこに宿るものとするかについて彼らは苦勞をしなかつたらうか。三九五〔頁〕。そのの誕生その壽命その離脱についてどういふことを彼らは發見したか。三九九〔頁〕。

「さてそれならば魂はなほ、彼らのよわい知力にとつてあまりにも高いところにある * 対象である * のか。さうならば * 魂を * 物質にまでひきおろしてみよう、さうして魂は、魂によつて生氣を與へられるところの身體がそもそも何で出來てゐるかを知つてゐるかどうか、またその身體のほか、魂が意のままに眺めるところのまた動かすところのもろもろの物質が何で出來てゐるかを知つてゐるかどうかを見よう。さういふこと(v)に關してどういふことを彼らは認めたか、何事も知らぬものなきこれら大いなる獨斷論者たちは。三九三〔頁〕 *Harum sententiarum.* ^(vi)

「もし理性が理性的であるとするならばおそらくこれで申しふんのないことといはなければなるまい。理性はじつさい十分に理性的であるものだから、自身が未だに確實なものをすこしも見出すことができな

いであることを告白してゐる。とはいへ確實なものへ到達することに絶望してゐるわけではない、それどころかこの探求に相變らず熱心であり、この征服に必要なもろもろの力が自身のうちにあることを確信してゐる。

だからこのことを見きはめなければならぬ、さうして理性の能力を結果に照らして吟味したのち、能力それ自身を再認識しよう。理性が眞理をとらへうる何らかの能力を持つてゐるかどうか、何らかの把握

力を持つてゐるかどうかを見よう」

(一) この問題——おそらくモンテーニュ二ノ一二(レーモン・スボン辯明)に取扱はれてゐる神の性質の問題であらう (二)「事物の原理を知りえた人は幸福である」(ウエルギリウス田園詩二ノ四九〇。モンテーニュ三ノ一〇) (三)「幸福を得てこれを保ちうるほどただ一つのことは何事にもおどろかぬこと」(ホラティウス書翰一ノ六ノ一。モンテーニュ二ノ一二) (四)「そう賢い人々はつぎのやうにいふ——このことばおよびそれ以下のよみかたを丁版に従ふ。モンテーニュ二ノ一二によればじつさい「哲學者たちのあひだで人間の至高善の問題についてなされる論争ほど激烈なものはない。そしてヴァロの計算によるとその論争から二百八十の黨派が生じた」(五)これらの數字はモンテーニュ『エッセー』一六五二年版における頁を示してゐる (六)數字の示すところからしてパスカルは *Harum sententiarum quae vera sit, Deus aliquis viderit.* (Cicero, *Disputationes Tusculanae*, I, II. モンテーニュ二ノ一二)を引用しようとしたものにちがひない。「これらの意見のうちどれが眞であるか神はそれを知りたまふ」

七四 人間の知識と哲學との狂氣について、といふ手紙。

この手紙を慰戯の前に。

Felix qui potuit.....Nihil admirari.....

モンテーニュにおける二百八十種の至高善。

七四ノ二 哲學者たちにとつて二百八十の至高善。

* Part. I, L. II, C. I, S. 4.*

〔推 測〕

七五 「ぢらに一段ひきおろしてそれを笑ふべきものに見せることはむづかしいことではなからう」
「なぜといつて*そのことを吟味してみるのに*」生命のない身體が情熱やおそれや嫌惡を持つてゐるといふことほどばかけたことがあらうか。感覺をもたず生命をもたず生命を得る能力をさへもたない身體が情熱をもつてゐるといふ*こと*ほどばかけたことがあらうか、情熱をもつてゐるといふ以上、その情熱をうけいれるためには、^Tすくなくとも感覺をもつた魂がまづ考へられなければならないはずであるのに。なほまたそれのもつてゐる嫌惡は空虚を對象としてゐるといふことほどばかけたことがあらうか。空虚の中にそれら物體をして嫌惡せしめうる何があるといふのか。これほど淺薄なこれほど笑ふべきことがあらうか。

これだけではない。それら物體は空虚をさけようとして動くその能力をそれら自身のうちに持つてゐるといふ。一たいそれらの物體には腕があるのか、脚があるのか、筋肉があるのか、神経があるのか。

七六 學問をあまり深める人々に向つて書くこと。デカルト。

七七 私はデカルトをゆるすことができない。彼は彼のすべての哲學においてもしてきたら神なすですま

しうることをのぞんだかもしれない、が世界に動きをあたへるためにはどうしても神をして一と押しさせないわけにはゆかなかつた、しかしそれをさせたあとにはもう神などは彼にとりどうでもよいものになつてしまつてゐる。

(一) この原文は寫本しかない。マルグリット・ペリエの『記録』中に Guettier 神父の採拾したもの。斷章
四三などと同じく誰かがパスカルの談話を想起したそのことばであらう。

七八 デカルト、無用にして不確實。

デカルト、

七九 「それは圖形および運動より成る」とおぼづかみにいふことは必要であらう。なぜならそれは眞であるから。しかし、それらが何々であるかをのべてさうして機械を作りあけることは、笑ふべきことである。なぜならそれは無用であり不確實であり難儀である。それがたとひ眞であらうとも哲學はすべて一時間の勞苦にも値ひしないと我々は考へる」

八〇 なぜだらう、びつこの人は我々を腹立たせないのにびつこの精神は我々を腹立たせる。そのわけはびつこの人は我々のまつすぐ歩くことを認めるのにびつこの精神は我々のはうがびつこをひいてゐるのだといふからである。さうでなかつたら我々はびつこの精神に同情し腹などは立てないであらうのに。

エピクテトスはさらにつよくかう尋ねる、君は頭痛がしてゐるといわれてもなぜ怒らないのか、君の推理は誤つてゐるとか君の選擇は誤つてゐるとかいはれるとなぜ怒るのか。

そのわけはかうである、頭痛がしてゐないことびつこでないことには確信があるが眞をえらぶことにはさほど自信がないからである。従つて我々は、確信のよりどころとしてはただもう我々が我々の全視力をもつて見るがゆゑにといふことしか持たないから、ほかの一人がその人の全視力をもつて我々と反對のこととがらを見ると我々は宙に迷はされおどろかさされ、ほかの千人が我々の選擇を笑ふと我々はいよいよ宙に迷はされおどろかさされるのである、なぜといふのに我々は我々自身の光をほかの多くの人々の光よりも正しいものとしなければならず、ところでそれは大膽であり困難である。びつこの人に關する意見にはさうな矛盾は決してない。

八一 心はおのづから信するものであり意志はおのづから愛するものである、さうであるから眞の對象がないと、心も意志も偽りのものに結びつくよりほかはない。

(一) モンテーニュノ四の標題に「心は、まことの對象がないと、いつはりの對象のうへにその熱情を投げおろす」

想 像

八二 これは人間のうちにあつて人間を支配する部分であり、あやまりといつはりとを手下にもち、つね

には狡猾でないのだからそれだけいよいよ狡猾である。なぜといつても、このものがいつはりをしめすところの * まちがひない * 規準であるならば、眞理をしめすところの * まちがひない * 規準にもなることであらうから。しかしこのものはたいていの場合いつはりであつて眞にも偽にも同じ刻印をおし、自分の特性を一向にしるさない。 * さらにまた *

私は愚人についていふのではない、大いなる賢者についていふのである、想像は大いなる賢者のあひだにおいてこそ人を説きふせる大いなるその長所をふるふのである。理性は抗辯しても無益である、理性は事物に眞の値打をつけることはできない。

好んで理性を監督し支配するところの、この理性の敵、この高慢なる力は、人間のうちに第二の本性をすゑて、じぶんがいかに全能であるかをしめた。この想像力は、人を幸ひにし、不幸にし、健康にし、病氣にし、富ませ、貧しくする。理性をして信ぜしめ、疑はしめ、否定せしめる。感覺をして休止せしめ、或は働かしめる。人をおろかにし、賢くする。この想像力はまたその持ち主を理性とはちがつた仕方であますところなく十分に満足せしめるがこれを見ることほど我々にとつてくやしいことはない。有能の人々は、智者が理性をもつて * たのしむ * のとはまつたく違つた仕方だ、想像をもつてたのしむ。この人々は人を見るのに權勢をもつてする。この人々はぎろんをするのに大膽と信念をもつてする、 * ほかの者はおそれと疑ひとをもつてする *。またこの人々はその快活な容貌をもつて聞き手の意見をしばしば自分のはうに有利なものにする。想像の賢者たちは自分たちと性質を同じくするところの批判者たちからするぶんひいきにしてみらふのである！^T 想像は愚人を賢くすることはできないが、しあはせにするこ

とはできる、これにくらべ理性はじぶんの味方を不幸にするだけである。じぶんの味方を想像は光榮でおほひ理性は恥辱でおほふのである。

この想像力を除いて一たい何が人に仕事に法律に偉人に名聲をあたへるであらうか、また尊敬をあたへるであらうか。この想像力の協賛がないならば地上のいかほどの富も不十分である！

諸君はかういふかもしれない、すべての人がそのそんけいすべき老齡にあたまをさけるところのあの法官は純粹にして高大なる理性をもつて身を治めてゐる、 * さうして * もろもろのことからそのことがら本性に従つて裁き、よわい者の想像をただ惱ませるばかりであるところのむなしいかすかすの情狀には意をとどめることはない。この法官が、神に對する * 燃えるやうな愛 * で理性をうちかためつつ全く獻身的なる熱心をもつて説教所へはひるのを見よ。 * 彼はそこで模範的なそんけいの念をもつて説教をきかうと待つてゐる *。そこに説教者があらはれるとせよ、さうしてこの説教者は生來こゑがしわがれてゐて顔が奇妙なかつたたとせよ、 * 床屋のひげの剃りかたがへただつたとし *。なほその上に偶然よごれてゐたとせよ、この説教者がいかに大いなる眞理をのべようと、かの元老はその謹嚴さを失ふことを私は斷言する。

この世のいかに大いなる哲學者だとして、たとへ必要以上にひろい板の上にあるとしても、もしその板の下が深淵であるとしたら、いかに彼の理性が彼をときふせて * 安全だ * といつても、彼の想像のはうが立ちまさるであらう。多くはそのおもひにたへきれず青ざめ汗をかくであらう。

私は想像のあたへる影響を一から十まで語らうとはおもはない。

* 猫を見たり鼠を見たり炭がはねたり、さういふ種類のことが理性をその蝶てつつがひからはづしてしまふことを誰が知らない者があらうか。この調子はどんな賢い人々をもあざむいてしまふ、また話や詩をいやおうなしに變へてしまふ*

* 愛は、にくしみは、裁きの局面を變へる。あらかじめ十分に謝禮をうけた辯護士は、その口頭辯論をおこなふ訴訟事件を、どんなにじつさいよりも正當なるものとおもふことであらう！ その大膽なる身ぶりはこの外見にあざむかれたる裁判官たちにむかひ、この訴訟をどんなに尤もなるものに見せしめることであらう！ 何といふ笑ふべき理性！ 一とふきの風であやつられる、しかもどんな方向にでも*

人間の行爲のおほかたは、想像によつてのみゆすぶられてゆらぐ、それらの行爲のことを私はできれば一つ一つについて語りたいのだが。おもふに理性はその立場をゆづらざるをえなかつたのである、さうしていかに大いなる賢者といへども彼の原理として、人間の想像があらゆるところに大膽にとりこんだところのもろもろの原理を採るのである。

〔理性にしか従はうとしない者は*ふつう一般の考へからすると*氣違ひじみてる。最大多数の人々の判断に従つて判断すべきである。皆がよろこんでさうやつてゐるのだからには、實體のない幸福*だと承知してゐても*それを求めて終日労働すべきであり、眠りが理性のつかれをなほしてくれたらすぐにとびおきて幻を追ひに出かけ、この世界の支配者の影響をうけに出かけるべきである。〕

〔これは誤謬の一原因である、がこれ一つにはかぎらない。〕

〔人間がこの二つの力を同盟させたのは正當だ、尤もさやうに和合せしめてもなほ想像力は十分相手に

威を振ふのだが。理性は*決して*想像力を完全に壓倒することがない、つねにこれに負かされる〕^T

我々の法官たちはこの秘密をよく心得てゐた。彼らの赤い服、毛ぶかい猫のやうに身をつつむ貂てんの毛皮、裁きをおこなふ法廷、ゆりの花、これらのいかめしい道具立ては、いづれも大いに必要だつたのである。

*もし*醫者たちが長衣や上靴を用ひず博士たちが四角い帽子やどの部分もゆつたりしすぎてゐる衣服をつけなかつたら、この人々は世人をあざむくことができなかつたであらう、世人は*かやうにも*正當なる外見に對しては手を出すことができないのである。もしも法官が正しい裁判をおこなひ醫者がほんたうの醫術をおこなふことができるのであるならば、四角い帽子などをこの人々は無用のものとするのであらうし、さういふ人々の學識の尊嚴はその尊嚴だけで十分にそんけいされることであらう。がしかし架空の學識しかもたないものだからいきほひこの人々はこれらのむなし道具立てを用ひて彼らの必要とする想像を働かしめるやうにしなければならぬ、またじつさい彼らはこの方法によつてそんけいをうけるのである。^(三)ただ軍人だけはさやうな假裝をしなかつた、なぜといふのに、じつさい軍人の受持つところはもつと本質的である。軍人は實力によつて立ち、他の者は假面による。

さういふわけで我々の王たちはさやうな假裝を求めはしなかつた。彼らは自分を王と見せるのに特別の衣服をまとふことはなかつた、がしかし衛兵や鉞まさかりつきの槍をともなつた。腕も力も自己自身のためにのみ持つところの武装した部隊^T、それから先登をすすむらつばと太鼓、それらを取りまく軍團、これらのものはどんなにしつかりした人をもゆすぶる。王たちは衣服を持たない、ただし、實力を持つてゐる。……莊れいな宮廷に四萬の近衛兵にとりまかれてゐるトルコ王をふつうの人間のやうに見ようとするためには

するぶんすみきつた理性をもつ必要があらう。

一辯護士が長い衣をき帽子をかぶつてゐるそれを見ただけで我々はこの辯護士を有能視しようとする意見をいだかすにはをられない。

想像はあらゆるものを調理する。想像は美をつくり正義をつくり*また*幸福をつくる、これらこの世の一切のものであるところのものを。私は *Dell' opinione regina del mondo* ^(四) といふイタリアの本を心から見たいとおもふ、私はこの標題しか知らないのだが*ただこの標題だけでも数多くの本に匹敵する*この本を知らないでも私はこの本を是認する、もしそこに缺點があるならそれは別として。

わざと我々を必然的誤謬にいざなはうとして我々にあたへられてゐるもののやうにおもはれるこのあざむく能力のもつ効果はおほよそ以上のやうなものである。ほかに*誤謬の*原因は多いが。

むかしうけた印象のみが人をまよはせるのではない、新しいものの魅惑も同じく人をまよはせる力をもつてゐる。人々は、あるひは幼時のあやまつた印象に従ふことを咎め、あるひは新しい印象をだいたんに追ふことを咎めてお互ひにぎろんしあふがさういふぎろんはすべて右のことから由來する。誰か正しい中間を保つてゐる人があるならば、その人は進み出てそのことを證明するがよい！ ある一つの原理であつて、どんなにそれが*幼時からの*自然なものであらうとも、教育によるまちがつた印象だといはれないやうな、あるひは、感覺によるまちがつた印象だといはれないやうな原理は一つもない。

ある人はいふ「君は箱の中に何もはひつてゐるものが見えないとその箱は空虚だと幼時から考へてきてゐるから、空虚といふものはありうるものだとおもつてゐる。これは君の感覺のまよひでありそのまよひ

は習慣によつて一そう強められてゐるのだ*學問で訂正する必要がある*」またある人はいふ「君は學派に教へられて空虚といふものはないときいてゐるから君の良識はだめになつてしまつてゐる、君の良識はさういふまちがつた印象を持たされるまへにはじつにはつきりと空虚のあることを知つてゐるのだ。君の第一の本性にたよつて訂正する必要がある」さてどちらがあざむいたのであらうか、感覺であらうか、教育であらうか。

誤謬のもう一つの原因がある、それは病氣である。病氣は判断と感覺とをそこなふ。大きな病氣が判断と感覺とを明らかに變へるなら小さな病氣だとてそれ相應の影響をあたへることを私は疑はない。

我々自身のもつ利害關係もまた氣持ちよく我々の眼をさぐるふしぎなる道具である。世のいかに公正なる人といへども自分の訴訟事件に裁判官として立つことはゆるされぬ。さういふ自愛におちいるまいとして反つてこの上もない不正におちいつた人々を私は知つてゐる。全く正當であるところの訴訟に*必ず*敗れる方法は、さういふ人々にその近親たちをして大いに警告せしめることであつた。正義と眞理とは二つのいづれもじつに微妙な尖端であつてそこにびつたりとふれるためには我々の用ひる道具はあまりにも磨滅してゐる。道具はそこにつくにしてもその尖端をおほひつぶしてしまひ、そこをはみ出して、眞の上をよりもつとよけいに偽の上をおさへる。

「従つて人間はじつに結構につくられてをり、眞については何らの原理をもたず、偽については多くのりつばなものを持つてゐる。今はかういふことが分らう、いかに……」

しかし人間の誤謬の一ばんおもしろい原因は感性と理性とのあひだのたたかひである」

(一) この高慢なる方は人間のうちに第二の本性をすゑて……すなはち理性は第一の本性をすゑ想像力は第二の本性をすゑたとパスカルはいふ (二) この秘密——すなはち理性に對する想像力の勝利。あるひは想像力と理性との同盟の必要。秘密といふことばの使ひ方についてはラロシュフウコーの『格言』二五七にこんながある「おもおもしとは精神の缺陷を匿すために案出された身體の秘密である」(三) モンテーニユ三ノ八に「その男からづきんと衣とラテン語とをとり去つてみるがよい、また全くむき出しの全く生煮えのアリストテレスで我々の耳を叩くのをやめさせてみるがよい、その男は我々仲間と變らぬ一人に見えるだらう、それ以下に見えるかもしれぬ」(四)「世界の支配者・輿論について」。この輿論といふことばをパスカルはここで彼のいふ想像と同義に近く考へてゐる。著者不詳 (五) アリストテレスの教説。

人をおさむく力についての章をここからはじめる

八三 人間は誤謬に満ちたものであるにはかならない。この誤謬は自然的なものであり、恩寵なしには消し去りがたいものである。何ものも人間に眞理を示さない。あらゆるものは人間をまよはせる。眞理の二つの根源である理性と感性とはおのおのが純粋性を缺いてゐるだけでお互ひにあざむきあふ。*感性はいつはりの見せかけで理性をおさむく。感性が理性に向つておこなふこのあざむきを今度は感性が理性から受ける。理性が仕返しをするのだ*。魂のもろもろの情念は*感性を*かきみだし、感性にいつはりの印象をあたへる。理性と感性とはあらそつてあざむきだましあふ。

しかしこれらの誤謬がこれら異質的能力のあひだで偶然的にまた知力不足のためにおこるのと別に……

八四 想像はそのふしぎな評價によつて小さなものを大きくし我々の魂を満たすまでにいたらしめる。またその大膽な高ぶりによつて大きなものを小さくして自己の尺度にまでいたらしめる。たとへば神について語るときのやうに⁽¹⁾。

八五 一ばん我々の氣にかかつてゐること、例へばわづかばかりの持ち物を匿すといふやうなことは往々にしてとるにたらぬことなのである。一つのむなしきことなのだ、それが想像によつて山のやうにふくらんでゐるのだ。想像の働かせ方をもうひとつ切り變へたらそのことが苦もなくはつきりする。

八六 「私の空想は私をして、蛙のやうにがやがいふ人^Tや食べながら息をはづませる人をきはせる」
「空想は大きな威力をもつてゐる。我々はこれを利用すべきであらうか。この威力は自然的なるものであるから我々はこれに従ふべきであらうか。いや、我々はこれに抵抗しよう……」

八七 *Næ iste magno conatu magnas nugas dixerit. 583. Quasi quidquam infelicius sit homine
cui sua figmenta dominantur. (Plin.)*⁽¹⁾

(一) 「まことと今やこの人は大きな努力をしてじつにつまらぬことを言はうとしてゐる」テレンティウス
Heaut, iv. 1. 8. モンテーニユ三ノ一 (二) 「想像によつて支配された人間よりもさらに不幸なるものが何かあるかのやうに」プリニウス二ノ七。モンテーニユ二ノ二二。

八八 仲間の者の顔に墨をぬつて、その顔を怖れる子供たち。それは子供たちのことだ。がさやうにも幼時に弱かつたものが、年をとつたからとて強くなるわけがあらうか！ ただ空想を變へるだけのことであつて、すべて進歩によつて完成するものはまた進歩によつてほろびる。すべて弱かつたところのものは、絶對に強いといふやうには、決してなりえない。「彼は成長した、彼は變つた」などといつてもだめだ。彼はやはり同じである。

八九 習慣は我々の本性である。信仰に慣れる人は信仰を心にいだく、さうして地獄をおそれずにあることはできない、さうしてほかのものを信じない。王をおそれるべきものとおもふことに慣れる人は……等々さうしてみると、我々の魂は、數や空間や運動を見ることに慣れるなら、さういふものを信じ、さういふもののみを信ずるといふことを、誰が疑はうか。

(一) 斷章三〇八「王を見ると……」を參照 (二) 斷章二三三「我々の魂は身體のうちを投げこまれてそこに數と時と次元とを見出す……」を參照。

九〇 *Quod crebro videt non miratur, etiamsi cur fiat nescit; quod ante non viderit, id si evenit, ostentum esse censet.* (Cic.)⁽¹⁾

(一) 「たびたび見てゐることはこれを人は驚異としない、たとひその原因が分らなくても。これまでに見たことのないやうなことはこれを人はふしぎなこととする」キタロ De divin., II, 49.

九一 *Spongia solis.*⁽¹⁾——我々は一つの効果が絶えず同じやうに働いてゐるのを見るとそこから一つの自然的必然性を結論する、たとへば明日も太陽はのほるとか、さういふやうに。しかし自然はしばしば我々をあざむくものである、さうして自然固有の規則には従はない。

(一) 太陽の黒點のこと。パスカルはこの黒點に太陽衰滅のきざしを見、結論として、習慣的には永久にかがやくとおもひこまれてゐるけれどもいづれ消滅するにちがひないといふ。

九二 我々の自然的原理とは我々の習慣的原理以外のなにもものであらうか、子供においていふなら、ちやうど動物における餌あさりのやうに、父の習慣からうけとつた原理以外のなにもものであらうか。

ちがつた習慣はちがつた自然的原理を我々にあたへるであらう、さういふことは經驗で分る。そこでもし*習慣によつて*消すことのできないところの自然的原理があるとするならば、自然によつて従つて第一の習慣によつて消すことのできないところの習慣、つまり自然に抵抗するところの習慣もまたある。この習慣は性質に依存してゐる。

九三 父は子供の本性的愛情の消えうせることをおそれる、一たいこの本性とは何であらうか、この消えうせるといふ性質をおびてゐるところの本性とは。

習慣は第二の本性であり、この第二の本性が第一の本性をうちこわしてしまふのである。しかし本性と

は何であらうか。習慣は本性的でないといつてはいけなからうか。私にはどうもかうおもはれるのだがつまりこの本性といふものはそれ自身が第一の習慣であるのにほかならないのではなからうか、ちやうど習慣が第二の本性であるやうに。

九四 人間の本性はまつたき自然である。 omne animal.⁽¹⁾

人間が本性的なものになしえないやうなものは一つもない。本性的なもので人間が墮落せしめえないやうなものは何もない。

(一) すべての動物——これについては創世記七ノ一四に「彼ら及びすべての獣その類に従ひ……」とあり舊約外典ベン・シラのちゑ一三ノ一八には「すべての生物はその同族を愛し、すべての人はその隣人を愛す」とある。

九四ノ二 人間はまことに omne animal である。

九五 回想や喜びは純粹な情感である。幾何學の命題だとて純粹な情感になる、なぜといふのに知性の修練がこの自然なる情感を生み出すのであり、またこの自然なる情感は知性の修練によつて消え去るのであるから。

九六 自然のもろもろの作用を證明するのに悪い理由を用ひることに慣れると、よい理由が発見せられたときもそのよい理由をうけいれようとしなくなるものだ。その實例は、なにゆゑに血管はくくり紐のものとでふくらむかを説明するための血液循環といふことに關してあたへられてゐる。⁽¹⁾

(一) ハーヴェイの我々にしたところによれば (William Harvey, De motu cordis et sanguinis in animalibus, 1628, ch. XI) まじたく人々は、くくり紐のもとで血管のふくらむ理由として、熱や苦痛や眞空嫌悪を考へてゐたのである。

九七 *生涯において最も大切なことは職業の選擇である。偶然がそれをきめる*

習慣が石工をつくり兵士をつくり屋根ふきをつくる。「あれはりつばな屋根ふきだ」といひ兵士のことを「ずるぶんばかけた人たちだ」といひまた或る人々は反對に「戦争ほどすばらしいものはない。ほかの連中はろくでなしだ」といふ。人々は幼いころに或る職業のほめられそれ以外の職業のすべてけいべつせられるのを聞かされきかされて*さうして選擇する*なぜなら人々はおのづから徳を愛しばかけたものをきらふ。*さういふことばが我々をうごかすのである*、たださういふことばをじつさいにあてはめるときにやりそこなふ。

自然はただ人間といふものをしかつくりなかつたのに人は人間のありとあらゆる身分をつくり出してゐる、さほどにも習慣の力といふものは大きい。なぜといつて或る地方は石工ばかり、或る地方は兵士ばかりといふぐあひである。自然はそんなにやうなものではないはずである。従つてそんなやうになるのは

習慣によるのである。習慣が自然をそくばくするからである。しかしをりをり自然は習慣にうちかつ、さうしてどんなよい習慣があらうと悪い習慣があらうとそれらにかかはらず、人間を人間の本能のうちにつきとめておく。

あやまりにみちびく偏見

九八 誰しもが方法のみを考へ目的を考へないのは歎かましいことである。各人はいかにして彼の身分のつとめを果たさうかとおもふ、がその身分の*それから社會の*選擇については運命からそれらをあたへてもらふ。

ずるぶん多くのトルコ人や異教徒や無信仰の徒がただもう彼らの父祖の歩みは最良のものであるといふ偏見をめぐりめいめいあらかじめ持たされてゐるといふそれだけの理由で彼らの父祖の歩みに従つてゆくがこれは見て氣の毒なものである。また錠前師とか兵士とかそのほかさういふ各人の身分のきまるのも右の理由だけによるのだ。

野蠻人がプロヴァンス州などをどうでもよいものにするわけもそこにある。

九九 意志の行爲とそのほかのあらゆる行爲とのあひだには、普遍的本質的相違がある。

意志は信仰の肝要なる機關の一つである。意志が信仰をつくりだすといふのではない。事物はその事物を見る面に従つて眞となり偽となるがゆゑにといふのである。意志はもろもろの面のうち或る一つの面を一そう好む、さうして自分の好まない面の諸性質を理性に見せまいとして理性をそれらから外そとむかせる。

従つて理性は意志とまつたく足をそろへて歩き、意志の好む面を見るために足をとめる、さういふふうにして理性はそこに見るところのものに基いてその事物を判断する。

自愛とその效用とに關する考察^(二)

一〇〇 自愛と人間の自我とは自分のみを愛し自分のみを考へるといふことにその本性を持つてゐる。しかし人間はどうしたらよいのであらうか。彼は彼の愛するこの對象が缺陷と悲惨とに満ちてゐるのをどうすることもできない。彼は偉大でありたいとおもふ、彼は自分が卑小であるのを見る。彼は幸福でありたいとおもふ、彼は自分がじめであるのを見る。彼は完全でありたいとおもふ、彼は自分が不完全に満ちてゐるのを見る。彼は人々から愛されうやまはれたいとおもふ、彼は彼の缺點が人々の嫌悪とけいべつとにしか値ひしないのを見る。人間はかやうな當惑におちいつてゐるがゆゑに、人間のうちに、考へられうるかぎりの最も不正にして最も罪ぶかい情念が生ずる、なぜといふのに彼は彼をひなんするところのさうして彼に缺陷のあることを承認せしめるところのこの眞理に對し非常なるにくしみをいだくのである。彼はこの眞理をうちほろほしたいとおもふが、この眞理そのものをうちほろほすことができないものだから、この眞理に對する彼の認識のうちでそれからまた他の人々の認識のうちでこの眞理をできうるかぎりうちほろほさうとするのである、といふのはつまりかうだ、彼は彼の缺陷をおほひ匿してこれを自己自身の眼にも他人の眼にも見えなくしようとあらゆる心づかひをするのだ、さうして人がそれらの缺陷を自分に見させることをゆるさないし、人がそれらの缺陷を見ることをもゆるさない。

缺陷に満ちてゐることは不幸にちがひない、が缺陷に満ちてゐてその缺陷を見とめようとしなければ、
らに大きな不幸である、なぜならことさらなる幻覺といふ缺陷をそこにさらに加へることになるからであ
る。

我々は他人にあざむかれることを好まない。我々は、他人がじつさい以上の値打に我々から見られたい
とおもふのを、正しいこととおもはない。さうであるならば同様にまた、我々が他人をあざむくことも
また我々がじつさい以上の値打に他人から見られたいとおもふことも正しいことではない。

さうであるから他人が我々のじつさいにもつてゐるところの不完全な點や不徳だけを指摘してくれるの
であるならば、彼らは明らかに不正をはたらいてゐることにはならない、なぜならさういふ不完全な點や
不徳は彼らのせるではないのであるから。むしろ彼らはよいことをしてくれてゐる、だつて彼らは、さう
いふ不完全なところを知らぬといふ不幸から我々をすくはうとして助けてくれてゐる。彼らがさういふ缺
陷を見とめても我々をけいべつしても、我々は腹を立てるべきではない、なぜといふのに彼らが我々をじ
つさいの値打どほりに見とめてゐることは正しいことであり、彼らが我々を——もし我々がけいべつせら
るべきものであるとするならば——けいべつしてゐることもまた正しいことである。

右のやうな自覺は、もし公平と正義とに満ちてゐる心があるとしたらさういふ心から生れ出るものであ
る。ところがさういふ自覺とまつたく反對の傾向が我々の心の中には見られるのであるとすると、我々は
我々の心についてどういつたらよいであらうか。だつて我々が眞實をいとひ、また眞實を告げてくれる人
人をいとふものであるといふこと、さういふ人々があやまつて我々をよく見てくれるのを我々は好むとい

ふこと、じつさいの値打以上に見てもらひたいと我々はそのぞんでゐるといふこと、これらのことはほんた
うではないであらうか。

その證據を一つつぎにのべよう、おそろしいことだと私はおもふのだが。カトリック教は、自分の罪を
誰にでも無差別にうちあけるやうにしひはしない。ほかの人には誰に對しても匿してゐてかまはないとい
つてくれる、ただし唯一人例外がありこの人に對してだけは心の奥底をうちあけ自分のあるがままを見せ
るやうに命ずる。カトリック教はただ一人この人にたよつてのみ迷ひをとくがよいと命じ、またこの人を
してはかたく祕密をまもらしめる、そこでこの人は、知つてゐても知らずにゐるかのやうにしてしてくれ
る。これほどにも慈悲ぶかいやさしいことがほかに何か考へられようか。さうであるのに人間の墮落した
心はこの定めをなほもきびしいと見るほどにはなはだしい。しかもそれがおもなる理由の一つとなつてヨ
ーロッパの大部分が教會に反抗したのであつた。

何と人間の心は不正にして不條理なことであらう、おほよそいかなる人に對しても當然なすべきことを
ただ一人の人に對してなすやうに命ぜられたとてそれをいやなことにおもふとは！　だつて人々をあざむ
くのは正しいことであらうか。

眞實をきらふのにはいろいろの程度がある、が或る程度においてすべての人が眞實をきらふといふこと
ができる、なぜならこの眞實をきらふ心は自愛と切りはなすことのできないものである。このいとふべき
氣づかひからして、他人を叱責する必要のおきた人々はよぎなくいろいろ多くの迂^まり路やしんしやくをし
て他人を怒らせまいとする。缺陷を小さいものやうにいひ、缺陷を辯解するやうに見せかけ、稱讚や愛

敬のしるしをまぜることをしなければならぬ。大いにさういふことをしても、この良薬は、自愛心にと

つてはにがにがしいものであるに變りはない。自愛心はこの薬をできるだけうけまいとする、またうけるにしてもそれはいつもいやいやであり、往々にして、その薬をくれる人々をひそやかに怨みさへもする。

そこからして、もし人が我々から愛されるのを得とするなら、人は我々の不快におもふやうなことは我々に向つてしないやうにする。人は我々の好きなやうに我々を取扱つてくれる。眞實をきらふならば眞實を匿してくれる。へつらつてもらひたいならへつらつてくれる。だまされたいならだましてくれる。

かうして我々はこの世において好運のゆゑに高い地位へのほつてゆくごとに眞實からはいよいよ遠ざかることとなる、なぜなら人は、その人々から愛されることは有利でありきはれることは危険であるやうなさういふ人々をおこらせることをいよいよおそれるからである。ある王が全ヨーロッパの語り草になつてをり、それを知らぬのはその王だけだといふこともあらう。私はそれをふしぎだとはおもはない。眞實をいふのは、それをきく人には有益であるが、いふ人には不利である、なぜといつてきはれるからである。ところで王とともに暮す人々は、仕へる王の利益よりも自分の利益を大切にす、従つて自分自身の損をしてまで王の利益をはかるといふことを彼らはしない。

この不幸はおそらくごく高い暮しの人々において一そう甚だしいものであり一そうふつうに見られるものである、がどんなに低い暮しの人々であつてもこの不幸を免れることはない、なぜなら人々から愛されることはいつも何らかの得になることである。されば人間の生活は絶えざる幻覺である、人々はただもうお互ひにだましあひへつらひあふ。かけでいふやうに面と向つていふ者は誰もない。人々のあひだの結合

はこのお互ひのあざむきあひの上ののみもとづいてゐる。かけで友人のいつてゐることをお互ひに知るとしたら、たとひはじめに偏見なしにいつてゐるのだとしても、友情はほとんど保たれないであらう。

だから人間といふものは彼自身においても他人に對しても、假裝、欺瞞、偽善にほかならない。彼は人から眞實をきくことを好まないし彼は人に眞實をいふことをさける。正義と道理とからかやうにも遠いところのこれらの性情はことごとくその生來の根を彼の心のうちにおろしてゐるのである。

(一) この原文はこの標題で一七二八年デモレにより始めて發表せられ一八四四年フォーシエールによりサン・ブーヴの古い一寫本に基き再版せられた。I版の収録せる同じくサン・ブーヴ所有のクレマンセによる寫しに我々は従つたがこれはB版と殆んど相違はない。

一〇一 もしすべての人がお互ひにいひあつてゐることがらを知つたとしたらこの世に四人の友達はあるな
いであらうといふことを私は實際だとおもふ。そのことは、お互ひにいひあつてゐることがらをつつかり
誰か告げ口したためにおこる争ひをみればよく分る。「私はさらにはう、すべての人は……」

一〇二 ある惡徳はただほかの惡徳をとほしてのみ我々をとらへてをり、これは幹をとりのければちやうど
どその枝のやうにしてはなれ去つてしまふ。

一〇三 アレクサンデルの眞潔の手本は、この人の酒好きの手本が不節制な人々を拵へたほどには、貞節

な人々を拵へなかつた。この人ほどに有徳でないのは恥づかしいことではないし、またこの人以上には不徳でないといふことはいひわけとして立つことのやうにおもはれる。人はさういふ偉人の不徳におちいつてゐると、ふつうの人々にありがちの不徳には少しもおちいつてゐないとおもつてゐる。さうして、偉人だつて不徳の點ではふつうの人々と同じであるといふことには氣づかない。人は、偉人が民衆とつながつてゐるそのつながり目のところで偉人につながりを持つてゐるだけのことである。といふのは、偉人たちといふものはどんなに高いところにも或る點においてはごく低い人々と一向に變らぬ面を持つてゐるのである。偉人たちは全く我々の社會から遊離して空中にかかつてゐるのではない。* 決して決して* 彼らが我々より高いとするなら、それはその背丈が高いからである、がしかし足は我々の足と同じやうに低いのである。彼らはその點ではみんな同じ平面にをり同じ地面に立つてゐる。彼らは、この一ばん下の端はしについて見るならば、我々やきはめて下級の人々や子供や動物と同じやうに低いのである。

一〇四 何か好きなことにひかれてそのことをしてゐると、しなければならぬことがらを忘れてしまふ。たとへば、ほかのことをしなければならぬのに本を好んでこれを読んでゐるときのやうに。しかし、しなければならぬことをおもひ出さうとするならば何かきらひなことをしようとおもへばよい、さうするとそのとき、何かほかに仕事があるからといふ口實は立つまいかと考へ、かやうにして、しなければならぬことがらをおもひ出すことになる。

一〇五 あることがらをのべて相手の判断を求めるといふことはじつにむづかしいことだ、どうしてもそのことがらのべ方が相手の判断をみだしてしまふ！ 「私はそれを美しいとおもふ、私はそれを暗いとおもふ」そのほかこれに似たことをいふとしたら想像をこの判断へひき入れてしまふ。あるひは想像をこれと反對の判断へひき入れて想像をいら立たせてしまふ。何もいはないはうがましである。さうすれば相手は、相手の在り方に従つて、つまり相手のそのときの在り方に従つて、またこちらが設けたのではないいろいろなほかの情況に支へられるのに従つて判断するであらう。ただ沈黙だつて、相手がどんな表現と解釋とをとりたいとおもつてゐるかに従つて、また相手が人の表情を見るのに巧みなら、それにおうじ動作や顔色やこゑの調子からその沈黙をおしはかるのに従つて、これまた影響をあたへるかもしれないが、それは別として。ともかくこちらからは少くとも何ら手をそへずにおもはれることになる。一つの判断をその自然的なる座からひきおろさずにあることはさやうにもむづかしいのである、むしろかういはず、判断はさやうにも、堅固にして安定せる座を持つことがないのである！

一〇六 それぞれの人のもおもな好みを知れば、たしかにそのそれぞれの人の氣に入ることが出来る。ところが各人は、幸福とはかういふものでなければならぬと考へるにあたり、その人自身の幸福に反するやうないろいろの氣まぐれな考へをいだく。これはどうにも始末のつかぬ一つの奇怪事である。(二)

(一) ラロシュフウコーの『格言』四五に「人間の氣まぐれは運命の氣まぐれよりもなほ奇怪である」モンテ
ニユ三ノ一三に「幾人かの人々のあひだにおいてのみならず、時を異にして見た同じ一人の人においてさへ

びつたりと類似した二つの意見といふものを見ることは不可能である」

一〇十 Lustravit lampade terras. ⁽¹⁾——天候と私の気分とは一向に關係をもたない。私は私の霧と私のよい天氣とを私のうちにもつてゐるのである。⁽²⁾私のなすべき事柄の幸運も不幸もそこでは一向に何もしい。をりをり私はみづから幸運にさからつて努力する。幸運征服の榮譽は私をして嬉々として運命を征服せしめる。ところがをりをりはまた幸運のうちにもつてせいたくをいふ。

(一) キタロによるホメロスの翻譯 Tales sunt hominum mentes, quafi pater ipse / Iuppiter auctiferas
Lustravit lampade terras. (『オデュッセイア』一八〇—一三五)。この句はモンテーニュ二ノ一および二ノ一二に引用せられてをリユピテル神が地上を照らすところの光と同じやうに人間の氣持は變化するものであるといふ
(二) モンテーニュ三ノ九に「大氣や氣候の變化はすこしも私には關係してこない。空は私にとつてはいつも一つだ。私は私のうちにつくりだすところの心の變調によつてしか打撃をうけない」

一〇八 人々は彼らのいふことながらにすこしも利害關係をもつてゐないにせよそのことから彼らは決して嘘をいひはしないと結論しては絶対にいけない、なぜならただもう嘘をいふためにのみ嘘をいふ人々があるのである。

一〇九 健康なときには病氣になつたらどうしたものかとおもふ、ところが病氣になるとよろこんで藥をのむ、つまり病氣がさう決心させるのである。もう娛樂や散歩に對する欲望はなくなる、さういふものは健康があたへてくれたるものであり病氣のもろもろの要求とは兩立することのできないものである。病氣になると自然はその状態にふさはしい欲望をあたへてくれる。ただそのとき、自然があたへるのでなく我々が我々自身にあたへるのであるところのいろいろの心配が我々をかきみだすだけである、なぜといふのにその心配は我々のあるところの状態に我々のないところの状態の欲望をむすびつけるからである。

自然は我々をいかなる状態においてもつねに不幸にするものだから、我々の欲望は一つの幸福な状態を我々に向つてゐるがいて見せる、といふのは、我々の欲望は我々があるところの状態に我々のないところの状態の快樂をむすびつけるのである。さてもしそれらの快樂に到達するとしてもそのゆるぎに幸福になれるかといふとさうではない、なぜならその新しい状態におうじて別の欲望をいだくであらうから。⁽¹⁾
この一般命題を特殊ならしめる必要がある……

(一) モンテーニュ一ノ一九、二ノ六、二ノ三七の回想。ラロシュフウユの『格言』四九「人間は自分のおもふほどに幸福でもなければまた不幸でもない」

一一〇 現在の快樂をいつはりのものであるとおもふこと、また、今ない快樂をむなしものと知らないこと、これが不安をひきおこす。

不安定

一一一 ひとはふつうのオルガンに向ふやうなつもりで人間に向ふ。なるほどこれはオルガンである、しかし奇怪な、定めない、變りやすいオルガンで「その管は音階の順に列んでゐない」。「ふつうのオルガンしかひけない人は」このオルガンでは和音が出せまい。「鍵」がどこにあるかを知る必要がある。

不安定

一二二 事物は色々の性質を持つてをり、心は種々の傾きを持つてゐる。おもふに事物にして單一なるものとして心に映るものは何もないし心はまたいかなる事物にも決して單一なるものとして現はれない。我が同一事物に對し泣きもすれば笑ひもするわけはそこにある。

不安定と奇怪

一二三 自分の労働によつてのみ生きることと世界最強の國を治めることは大そう反對のことである。この二つはトルコ王の身分においてはむすびついてゐる。

一二四 種類は大そう豊富である。あらゆるこゑの調子、あらゆる歩き方、咳の仕方、はなのかみ方、くさめの仕方、……。人は果物のうちでぶどうを識別する、さうしてこのぶどうのうちでもあらゆる種類のじやかうぶどうを、それからコンドリウを、それからデザルグを、それからその割り接木を。それです

べてであらうか。この割り接木は二つの同じ房をつけたらうか。この房は二つの同じつぶをつけるだらうか、等々。

私は同じ一つのことからを全然同じ仕方で判断したことはない。私は一つの作品を拵へながらその作品を判断することはできない。畫家たちのするやうにして作品から離れることが必要である。*しかしあまり離れすぎてもいけない。それではどのくらゐ？ 推測していただきたい*

(一) フランスの數學者デザルグ(一五九三—一六六二)はリヨンの人でコンドリウに別荘をもつてゐたがこゝはぶどうの栽培で有名であつた。これらの名稱はさういふところからじやかうぶどうの變種に對してつけられたものにちがひない。

種類

一二五 神學は一つの學問である、しかしさうであると同時にまた何とていろいろの學問にぞくしてゐることであらう！ 人間は一つの基體である、が解剖するならばそれは頭、心臓、胃、かすかすの血管、一つ一つの血管、血管の各部、血、血のもつそれぞれ液質とならうか。

都會や田舎は遠くからみれば都會であり田舎である、しかし近づくにつれて、家々となり樹木となり瓦となり葉となり草となり蟻となり蟻のあしとなり、かぎりがない。これらがすべて田舎といふ名前のものにつつまれる。

一六六 すべては一つでありすべては多様である。人間の性質のうちには何といふかすかすの性質！ 何といふかすかすの天職^B！ それも何といふ偶然^Tで！ ふつう誰でも、ひとがよいといふのをきいてそれをえらぶ。*靴の踵^T*

靴の踵

一七七 「あゝ！ これはぐあひよく出来てゐる。この職人は腕利きだ。この兵士は大膽だ」これが我々の好みのもとでありまた職業選擇のもとである。「あの人はよくのむ、あの人はじつにのまない」さういふことが人々を節制家にし酒のみにし、兵士にし、臆病者にし、そのほかさういふものにする。

一七八 主たる能力、これがほかのすべての能力を規制する。

一一九 自然は摸倣しあふ。種子はよい土に投げられて實をむすぶ。原理は、よい頭脳に入れられて實をむすぶ。

數は空間を摸倣する。きはめてちがつた性質のものであるのに。
すべては同じ一つの支配者によつて作られみちびかれる。すなはち根、枝、果實^(二)。原理、歸結。

(一) 「樹木の根の吸ふ液これが幹になり葉になり果實になる」(モンテーニュ二ノ一二)

一二〇 「自然は多様化し摸倣する。人工は摸倣し多様化する」

一二一 自然は絶えず同じものをくりかへす。年、日、時間。それとおなじやうに空間と數とはお互ひに端と端とがつながりあつてゐる。無限といひ永遠といふやうなものにはさういふふうに出てゐる。すべてさういふものが何か無限であり永遠であるといふのではない。かすかすの有限なるものがあつて、それらが無限にふえてゆくといふのである。従つてただ*それら有限なるものを増加せしめてゆく*數のみが無限である。私にはさうおもはれる。

一二二 時は苦しみと争ひとをいやす、なぜなら人は變るからである。^(二)人はもう同じ人ではない。ばかにした人もされた人ももう同じ人ではない。ちやうどそれは怒りを招いた國民と二代ほど後にふたたび會ふやうなものだ。フランス人であるに變りはないが同じフランス人ではない。

(一) ラフォンテーヌ寓話六ノ二に、一年たつとすつかり變る「若い未亡人」の詩がある。

一二三 彼は十年前に愛した人をもう愛しない、私はそれを尤もだとおもふ。彼女は同じでない、彼もまた同じでない。彼は若かつた、彼女も若かつた。彼女はすつかり別人である。^(二)むかしのやうな彼女であつ

たならば彼はおそろくなほ彼女を愛するであらうが。

(一) 「彼がいろいろ反対の事情からして別人になつたとてふしぎなことではない」(モンテーニュ二ノ一)

一二四 我々は事物をちがつた面から見のみならずちがつた眼をもつて見る。我々はそれらを同じやうなものには見ようとしない。

矛盾

一二五 人間は本來的に、信じやすい、不信になりやすい、臆病な、大膽なものである。

一二六 人間の描寫。獨立。獨立に對する欲。要求。

一二七 人間の在り方。不安定。退屈。不安心。

一二八 熱中してゐたことがらをはなれたときの味氣無さ。一人の男が家庭にあつて楽しく暮してゐる。この男が或る女を見これを好いたとしよう、五日か六日たのしくあそぶとしよう、この男がもし最初の營爲にもどるなら、見よ、この男はみじめである。がこれほどありふれたことはない。

一二九 我々の本性は動きにある。全き休息は死である。

動搖

一三〇 兵士が、労働者が、あるひはさういふ人々が、自分の持つ苦勞をなげくなら、この人々をして何もせすにおいてみるがよい。

退屈

一三一 情熱も持たず仕事も持たず娛樂も持たず勤勉も持たず全き休息のうちにあることほど人間にとつて堪へがたいことはない。*そのとき人間の感ずるものは彼の虚無であり放棄であり不十分であり依存性であり無力でありむなしさである*。たちまち彼の魂の奥からは、退屈、いうつ、悲しみ、いたみ、怨み、絶望が生じてくる。

一三二 カエサルは世界征服をこころみてたのしむのにはあまり老いてゐたと私はおもふ。このたのしみはアウグストゥスやアレクサンデルにはよかつた。若かつたからひきとめることはむづかしい。しかしカエサルは成熟しすぎてゐたといはなければならぬ。

一三三 似た二つの顔は、そのいづれの一つも別にひとを笑はせはしないが、ならぶと、似てゐるといふ

のでひとを笑はせる。

一三四 もとのものを人はすこしも歎稱して眺めはしないのにそのものに似てゐることをもつて人の稱讃をまねかうとする繪畫といふものの何といふむなしさ！

一三五 我々のよろこぶのはたたかひだけであつて、勝利ではない。人は動物どものたたかふのを見るのは好むが勝つたはうが負けたものの上に猛りかかるのを見るのは好まない。人は勝利といふ目的以外の何を見たいとおもつてゐるであらうか。だがそれが實現するや否や、人はそれに満腹する。遊びにおいても眞理の探究においても同様である。ろんぎにおいても、意見のたたかはされるのを見るのは好むが發見せられたる眞理を見つめるのはすこしも好まない。眞理をよるこんで見とめさせたいとおもふならば眞理がろんぎから生れ出てくるのを見させることが必要である。

情熱においてもさうであつて互ひに反する二つのものが衝突しあふの見るのはたのしいが一方が他方を支配するやうになるともう野獸性があるばかりだ。

我々は事物そのものを追求せず、事物を追求することを追求する。

されば劇においても、恐怖の情緒を觀客にあたへずに、*すますところの場面は何の値打ちも持たない。希望を持たせられないところの極度の不幸も、それから野獸的愛欲も、苛酷の行爲も、何の値打ちも持たない。

一三六 わづかのことが我々をなくさめる。わづかのことが我々を苦しめるから。(一)

(一)「わづかのことが我々(の心)をまぎらせ外^そらせる、なぜならわづかのことが我々の氣がかりになるから」(モンテーニュ三ノ四)

一三七 人間のするあらゆることを一々かぞへ立てなくともそれらを慰^{なぐさ}め *divertissement* といふ名前^(二)に包括すれば足る。

慰 戯

一三八 人間はおのづから屋根ふきである。またあらゆる仕事に従ひうるものである、ただし自分の部屋のうちにあることを除いては。(二)

(二) 部屋のうちにじつとしてゐるといふこの仕事については次の斷章のはじめにその説明がある。

慰 戯

一三九 私は人間のもつさまざまの動きをまた人間が宮廷において戦争において出會ふかすかすの危険や*苦痛*を*そこからあのやうにも多くの争ひや欲情や大膽でさうして往々邪惡なくわだては生れるのであるが*さういふものををりをり眺めはじめたとき、人間のさういふ不幸はいづれも*たつた一つの事か

ら由來すること、その一つの事といふのは*部屋のうちに休んでゐることができないといふことであることとを發見した^B。暮してゆくのに十分の富を持つ一人の男はもし自分の家にたのしく住んでゐることができるとしたら、そこをすてて航海に出たり要塞の包圍に行つたりしないであらう。もし町にくすぶつてゐるのを堪へがたいものにならないとしたらあんなにも高價な職を軍隊に求めはしないであらう。もし自分のうちにたのしくじつとしてをられるとしたら談話を求めたり氣晴らしの遊びを求めたりしないであらう。

しかし私はさらにふかく考へた、さうして我々のあらゆる不幸の原因を見つけたのちにさういふ原因がなぜあるのかその理由をさぐりとりたいたいとおもつた、さうして*大そう*現實的な一つの理由があることその理由といふのは我々の存在の仕方のもつ*本來的な*不幸において成り立つてゐるといふこと、この我々の存在の仕方は弱いものでありまたほろびゆくべきものであり、また立ち入つて考へをめぐらすならそのとき何ものも我々を慰めうるものはないほどにみじめなものであるといふことを知つた。

いかなる身分を想像するにしても、もし我々の持ちうるかぎりのあらゆる富を集めるとするなら、王たることはこの世の最もすばらしい地位である、しかしながらこの王が彼のあぢはひうるあらゆる満足にひたつてゐるのを想像しても、もし彼が慰戯を持たないならばさうして彼のじつさいにあるところの状態を眺めさせられ反省させられるならば*彼の幸福はうちしをれて、彼を力づけなからう*彼は油斷ならぬ反逆、つひには、さけがたい死と病ひ、さういふものの思ひに必ず沈んでおびえるであらう。従つて慰戯とよばれるものを持たぬならば彼はすなはち不幸である。遊びたのしむことのできる家來たちのうち最も身分の卑しい者よりもさらに不幸である。

さういふわけで賭け事や女たちの會話や戦争や高い位はあのやうにも追ひ求められるのである。そこにじつさい幸福があるのではない、また賭け事でもうけるお金のうちにあるひは追ひかける鬼のうちに眞の幸福があるとおもつてゐるのでもない。お金や鬼はくれてやるといはれたら人はほしがらないであらう。人の追ひ求めるものは、我々をして我々の不幸な在り方を考へさせるところのあのだらけた平穩なきたりではなく、またあの戦争の危険でもなく、職務の苦勞でもなくて、我々をしてさういふものから思ひを外らしめ氣をまぎらしめるあのさわぎである。

獲物よりも狩の好まれる理由

さういふわけで人間はさわぎや動きを好み、さういふわけで牢はじつにおそろしい刑であり、さういふわけで孤獨のよろこびは理解しがたい。最後にまたそれが王の身分の幸福の最大の理由であり、また王の氣をまぎらせよう、たのしみといふたのしみを王にあたへようと絶えず人々のところみる最大の理由である。

*王は、ただもう王の氣をまぎらせ王をして王自身のことを考へさせまいとのみおもふ人々にとりまかれ
てゐる。なぜなら王はいかに王であらうとももし自分のことを考へるなら不幸である*

人間が自分を幸福にしようとしてくふうすることのできたすべてのものはこれである。そこでもし人々がこれについて哲學者ふうの思辨をして、人間が、買ふのであるならばほしいとおもはないといふであらうところの一匹の鬼のあとを追つて一日をくらすのは一向理窟に合はないことであるとおもふなら、さうおもふ人々は、人間の本性をほとんど知らぬものである。鬼そのものは死と悲慘とを見せないやうにし

てくれはしない、が狩は——眼をそらさせ^B——それらを見せないやうにしてくれる。従つて……

人はビュロス王に向ひ王がさまざまの労苦を経てからとるつもりであるといふ休息を今からおとりになつてはどうですかとすすめたが、^(三)このすすめはすくなく困難に出會つた。

〔人に對して休息のうちに暮すやうにといふことは幸福に暮すやうにといふことである。それは全く仕合せな境遇を持つやうにとすすめ悩みのたねを見出すことなくその境遇を*ゆつくり*眺めよといふことである。従つてそれは本性を知らないものである。〕

〔さうであるから自己の在り方をおのづから知る人々は何よりも休息をさける、さうして、動搖を求めたためにはどんなことでもしないことがない。眞の幸福が……といふことをさとらしめるところの一つの本能をこの人々が持たないといふのではない〕

それを他人に示さうとする虚榮、示すよろこび

〔従つてこの人々をひなんするのはよくない。人々が動搖を一つの慰戯としてのみ追求するのにはかならないのであるならば動搖を追求するのは彼らの誤りではない。彼らはあたかも彼らの追求するところの事物を所有すればそれでまちがひなく眞に幸福になれるかのやうにして動搖を追求する、それがいけないのであり、彼らのなす追求をむなしものとひなんするのも、さういふ點に立つてこそ理にかなふのである。さういふわけであるからおほよそひなんする者もされる者も、人間の眞の本性が分つてゐない、なぜなら^T〕

*従つて*ひとが彼らをひなんして彼らがさやうにも熱心に追求してもその追求するところのものは彼らを満足せしめることはできないであらうといふとき、彼らがこれに答へて——もし彼らがよくことがらを考へたとしたら當然かういふ答をするにちがひないとおもふが——かういつたとしよう、そこに彼らの追求するものはただもうあららしい激しい一つの仕事だけであり、これのおかげで自己のことを考へずにあることができるのだ、またそのためにこそ、彼らは彼らの心をうばひ彼らを激しくいざなふ一つの魅力にみちたことがらをえらぶのだと、さうしたらそのとき相手は答へることができないであらう。が彼らはじつさいはさういふ答をすることがない、なぜといふのに彼らは彼ら自身を知らないからである。彼らは彼らの追求するものが獲物ではなく狩そのものにほかならぬことを知らないのである。

ダンス。足をどうふむかをよく考へる必要がある

貴族は狩を一つの高貴なそしてりつばな楽しみであるともじめにおもつてゐる、が獵犬係りはさうはおもつてゐない

彼らはあの職につくことができたらさうしたら楽しく休息をするのだがとおもふ、さうして欲心のもつ飽くことを知らぬ本性のことは気づかない。彼らは休息をまじめに追求してゐると考へてゐる、がそのじつ動搖を求めてゐるのにはかならない

彼らは一つのひそやかなる本能をもつてゐる、この本能は彼らがつねに不幸のうちにあるといふ彼らの

意識から由来し、彼らをいざなつて慰戯や自己の外なる仕事を求めしめる。彼らはもう一つのひそやかなる本能をもつてゐる、この本能は我々の最初の*本性の*もつてゐた偉大さの名残りであり、彼らをして幸福は*實に*休息のうちのみあつて動搖のうちにはないことを知らしめる。これら二つの相反する本能から彼らのうちには一つの混らんした考へが生れる、この考へは*彼らの心の奥底にあつて彼らの眼をのがれてゐるが*彼らをいざなつて動搖をとほして休息へとおもむかしめる、また彼らのすこしもあぢはつてゐない満足もやがてこの當面の幾つかの困難を征服しそこに休息への扉をうちひらくことができるならばあぢはひうるであらうと彼らをしてつねに想像せしめる。

人生はすべてさやうにして流れる。人は何らかの障碍とたたかふことを經て休息を求め、ところがそれらの障碍をのりこえたならば休息は堪へがたいものとなる。退屈が生ずるからである。退屈をのがれて動搖を乞ひ求めなければならない。

人は現在の不幸をおもふかそれともこれからやつて來さうな不幸をおもふかする。さうしてどんな方面から來られても守備は十分だといふやうなときでも、やはりこの退屈がそれに固有の權威をもつて、その自然的なる根をおろしてゐるところの心の奥底から出てくるのである、さうしてその毒で心を一ぱいにする

かうして人間はじつに不幸である。いつかうに退屈の原因はなくても*彼の性質の固有のあり方のゆゑに*退屈しないわけにゆかない、それほどに不幸である。また人間はじつにむなししい。退屈をするさまざま

まに多くの原因に満たされてゐてもたとへば*玉を突くとか*ボールを*打つ*とかさういふ世にも小さなことがらでも十分に氣はまぎれてしまふ、それほどにむなししい。

しかし人間はおほよそさういふことにどんな目的をもつてゐるのであるかと君はとふかもしれない。自分が人よりも上手に演じたことを翌日友人たちのあひだで誇らうといふ目的をもつてゐるのだ。かうしてある人々は、これまで誰も解くことのできなかつた代數の問題を*解いたことを*學者たちに示さうとして書齋の中で汗を流し、ある多くの人々は、おもへばこれもまたおろかなことに、自分が要塞をおとしいたことを誇らうとして危険きはまることに身をさらし、最後に、ある人々は、一そう賢くならうとしてではなくただ單に知識を示さうとしてあらゆる事物を手がけて生命をちぢめる、この人々はこの仲間のうち最もおろかなる人々である、なぜといふのにこの人々は知識を持つてゐながらおろかであるからであり、さういふ知識をもつてゐたらおろかでないであらうやうな人々を、我々は別に考へることができからである。

ある人が毎日小さな賭け事をして退屈せずに日をすごしてゐる。毎朝この人にこの人が一日にもうけるだけの金をあたへそのかはり賭け事はしないと約束せしめるがよい。君はこの人を不幸にするであらう。ひとはいふかもしれない、この人は賭け事のためのしみを求めてゐるのであつて儲けを求めてゐるのではない。それではこの人をして金をかけないで勝負事をさせてみるがよい、この人は熱中しないであらうさうして退屈するであらう。だからこの人の求めるものはただたのしみだけではない、*熱のこもらぬだら

けたたのしみはこの人を退屈させるであらう* 必要なことはこの人がそこに熱中することであり、また、賭け事をしないといふ条件でならもらひたいとはおもはぬところのものをもし勝ち得たらさぞうれいであらうと想像してみづからをあざむくことである、さうしてそのときこの人の目ざすことは、情熱の對象を一つ拵へることであり、この拵へた對象に對し、彼の欲、彼の怒、彼の恐怖をかき立てることである。^(三)ちやうど子供たちが仲間の者の顔に自分で墨をぬつて、その顔に怖れを抱くやうに。

一人息子を失つて幾月もたたない人、訴訟や争ひごとで悩んで今朝方ひどくおちつかずにいる人が、どういふわけで今はもうそんなことを忘れてゐるのであらうか。すこしもあやしむことはない。その人は、犬どもに* 六時間も前から熱心に* 追跡せられてゐるところの猪がどこを通るかを見ようと一心になつてゐる。それ以上のことは要らない。人間はいかに悲しみに沈んでゐようとももし彼をなにかの慰戯へとひき入れることができるならば見よ彼はそのあひだ幸福である。人間はいかに幸福であらうとももし氣をまぎらされないならば、あるひはなにかの情熱か娛樂に心を占領されて退屈が顔を出すのをふせいでもらはないならば、やがて悲しみと不幸とにおちいるであらう。慰戯なくして喜びはなく慰戯あれば悲しみはない。また、氣をまぎらせてくれる多くの人々を持つこと、さういふ状態に身を保ちうることに、それが高い身分にある人々を幸福にする。

* よく注意していただきたい * 主計總監になり大法官になり總長になるといふことは朝からおぼせいの人々が* 方々からやつてきて* 一日のうち一時間も自己のことをおもふよゆうをあたへてくれない* 身分

になるといふことでなくて何であらうか*。ところでさういふ身分の人々も、うとまれて田舎の邸に戻るなら、財産はあつてもまた用を足してくれる召使ひはるても、みじめなさびしい身とならざるをえない、なぜならさういふ人々が自己をおもふのを誰一人さまたけてやる者はないのであるから。

(一) モンテーニュ二ノ一二「獲物に絶望してゐるのに狩をやりたのしんでゐる人々を見てもふしぎにおもつてはならない」同三ノ八「さわぎと狩とが實をいへば我々の獲物なのである」(二) モンテーニュ一ノ四二にこのやうな話がある。ピュロス王がイタリアに侵入しようとしたとき賢明なる忠告者であつたキネアスは王の野心の空なることをさとらしめようとして王に問うた「陛下は何のためにこの大事を企てたまふか」イタリアに主となるために」と王は言下に答へた。キネアスはつづいて「それから?」「ゴールとイスパニアに打ち入る」「それから?」「アフリカを従へにゆく。さうして最後に世界をわが支配下においたらそこで休息し、樂しく暮さうとおもふ」とキネアスは問ひ返した。「さやうな勞苦と危険とを経ることなくなにゆゑ今からすぐにそのたのしい休息に入りたまはぬか」(三) モンテーニュ二ノ一二「ちやうど子供たちが仲間の者の顔を自分で塗りたくつて黒くしたのにその顔をこはがるが、それと同じやうに我々は自分でする眞似事や作り事にあざむかれる、なさないことだ」

一四〇「妻と一人息子とを亡くして大そう悲しんでゐる人、大きな争ひ事に悩んでゐる人が、どういふわけで今は悲しんでゐないのか、どういふわけでその苦しい不安な思ひをすこしもいだかずにゐるのか。あやしむことは要らない。彼はボールを相手から打ちこまれたところであり彼はそれを打ち返さなければならぬのだ、彼はシャッスに勝たうとしてボールが屋根からおちてくるのをとらへようと一心になつてゐる

るのだ。^(二) どうして苦勞のことを考へてゐられよう、この別のことをしなければならぬのに。見よこの心づかひはこの大なる魂を占領するに値ひしこの魂からほかのあらゆる思ひを取り除いてしまふに値ひしてゐる！ 宇宙を知るためあらゆる事物を判断するため一國を治めるために生れたこの人が、見よ一匹の兎をつかまへようといふ心づかひにとらへられ満たされてゐる！

* もし彼がそこへ身を低めずして張り切つたままでるようにつねにねがふなら彼はさらにおろかなものとなるにすぎない、なぜなら彼は人間性を越えて高く上らうとのぞむことになるであらうから。要するに彼は人間であるにすぎない、つまりその能力が小であり多であり、全であり無であるところの人間であるにすぎない。彼は天使でもなく動物でもなく、人間である*」

(一) シャッス chase——テニスの用語。なほここにははれてゐるテニスはクワルト・ボーム courtte paume
といひふつうのテニスとちがつて兩壁および天井のある中で球をうちあふ。

一四一 人々は一つのボール一匹の兎を追ふことに専念する。これはまた王のよろこびでもある。

慰 戯

一四二 王位はただそれだけでもう王位に在る者にとり十分にすばらしいものであつて、王は自分のこの身分をながめただけで幸福になりうるのではなからうか。一般民衆のやうに、さういふ自己省察から心を外らしめることは要らないのではなからうか。人を幸福にするためには彼の眼を彼の家庭のかずかずの不

幸から外らしめて彼のあらゆる思ひをどうか上手に踊りたいといふ心づかひで満たせばよいといふことを私はよく知つてゐる。しかし王についても同じであらうか、王だとして彼自身の威容を見るよりさやうなむなしいたのしみに熱中するはうが一そう幸福であるのだらうか。それでは王の心に一そう満足のゆくやうなどんなものをあたへうるといふのか。王をして、その身をつつむ堂々たる榮光を*ゆつくり*ながめ樂しむことをさせず、反つて王の心をしてどうか歌曲の拍子に足どりをよく合はせたい細棒^{BT}を巧みに投げたいと専念せしめるはうが、王のたのしみを殺ぐことになりはしないであらうか。それはためしてみられるとよい。すなはち王をして感覺のなからの満足もなくなからの心づかひもなく友もなくただ一人おかれてゆつくりと自己のことをおもはせてみるとよい。慰戯をもたぬ王は不幸に満ちた人間となるといふことが分るであらう。ゆるにひとは注意してさういふことをさける、さうして必ず王の身邊にはおほぜいの人々があつて、仕事のあとには娛樂がつづくやう氣をつけ、ひまがあれば絶えず心がけてたのしみと遊びとをもうけてそこにすこしも空虚のできないやうにとりはからふ、すなはち王は、いかに王であらうとも自己のことをおもふならばみじめになるであらうことをよく知つてゐるがゆるに決して王をひとりにし自己のことをおもふ状態におくことのないやうにとすばらしく心をつかふところの人々にとりまかれてゐる。すべて上のべたところにおいて私はキリスト教徒である王をただ單に王として語つてゐるのであつてキリスト教徒として語つてゐるのではない。

一四三 人々は幼い時からすでに自分の名譽や富や友人や、さらにすすんでは友人の富や名譽やさういふものに對する心づかひをさせられる。人々は仕事や國語の修得や鍛錬をいよといふほどやらされる、さうして自分の健康や名譽や財産やまた友人のさういふものがりつばな状態になれば幸福にはなれないこと*また*一つでも缺けるならば不幸になることををしへられる。そこで人々はいろいろの責任や用事ができてもう夜明けから心をつかふ。——君はいふかもしれぬ「そんな仕方が彼らを幸福にするとは妙なことだ！ むしろ彼らを不幸にするのにそれほどよい仕方がほかにあらうか」——何？ よい仕方がほかに？ あるとも。さういふ心づかひをすこしも彼らにさせないやうにしさへすればそれでよい。なぜといふのにさうすれば、彼らは彼ら自身に眼をむけることであらう、さうして自分の今の在り方をおもひ、また自分がどこから來たのかどこへ去るのかをおもふであらうからである。さういふわけでひとは彼らの心をくぐらひそがしい目にあはせてもあはせすぎることなくくらまぎらせてもまぎらせすぎることはない。そのゆるぎにひとは彼のために仕事をたくさん用意した上で、もし彼らにしばらくくつろぐひまができるならば彼らにすすめて、氣ばらしのために、遊ぶために、また*絶えず*十分にいそがしくしてゐるために、そのひまをつひやすやうにとのべるのである。

何と人間の心はくほんでゐて、汚れに満ちてゐることであらう！

一四四 私は長いあひだ抽象的學問の研究に時をすごした。さうしてこの研究においてはわづかの人の

交際しかえられないといふことが私をしてこの研究に嫌惡の心をいだかしめた。人間の研究をはじめたとき、私はそれらの抽象的學問が人間にふさはしくないこと、さうしてそれをふかく突込んで知つてゐながら私はそれを知つてゐないところのほかの人々よりも一そうひどく私の状態について迷つてゐることを見た。私はほかの人々がかの學問についてわづかしか知らないのをゆるした。しかし私は人間の研究においては少くともおほぜいの友達を見出すであらうとおもひ、これこそ人間にふさはしい眞の研究であるとおもつてゐた。^(二)私はあざむかれてゐた。人間を研究する者は幾何學を研究する者よりもさらにすくない。人間を研究することを知らないがゆるぎにこそひとはほかのことを追求するのにはかならないのだ。がしかし人間のしなければならぬ學問はさういふところにもあるのではない、といふことになるのではなからうか、さうして、幸福になるためにはむしろみづから知らないのが人間にとり一そうよいことになるのではなからうか。

(一) シャロンはその著『ちる』La sage の序文において「人間の眞の學問、眞の研究、それは人間である」といふことをくりかへしのべてゐる。人間研究はフランスにおいて深いかやかしい傳統をもつてゐる。

一四五 「たつた一つの考へだけで我々は一ぱいになる。我々は、二つのことを同時に考へることはできない。我々が神に従つてでなく世俗に従つて考へるのは尤もなことである」

一四六 明らかに人間は考へるために作られてゐる、これが彼の品位の一切であり價値の一切である。彼 95

のなすべきすべてのことは、正しく考へるといふことである。さて考へる順序は彼自身からはじめ、彼の創造主と彼の目的からはじめる。

ところで世人はどういふことを考へてゐるであらうか。まるでさうは考へてゐない、ただ踊ることリュットを奏でること歌ふこと詩を作ること輪を追ふこと等々*また争ふこと王となることを考へ、王とはどういふものか人間とはどういふものかといふことは考へない*

一四七 我々は、我々のうちにさうして我々の固有の存在のうちに持つところの生に満足しない。我々は他の人々の頭の中で一つの想像的生をいとなみたゆとおもひ、さういふ生をいとなむにふさはしく自分を見せようとつとめる。我々は絶えずつとめて我々の想像的存在を美しくしよう保持しようとし、眞の存在をおろそかにしてしまふ。平静を持てば、寛容を持てば、忠實を持てば、いそいでそのことを知らしめようとし、それらの徳を我々のもう一つの存在につながるやとする、むしろそれらの徳を我々からひき離してまでもう一つの存在にむすびつけようとしかねない。そこで勇敢だといふ名聲をうるためにはよろこんで卑怯者になる。かのものなしにはこのものに満足してゐることができないといふのは、また往々にしてかものとのひき換へにこのものを渡すといふのは、我々の固有の存在のいかにむなしきものであるかをしめす大きな證據である！なぜといふのにもしここに自分の名譽を保つために死をえらぶといふことをしない人があるならば、その人は恥ぢしらずになるのだ。

一四八 我々は全世界に知られたいとおもひ自分の死後にこの世にくるであらう人々に知られたいとさへおもふ、我々はそれほどにもつうづうしい。我々は身邊の五六人の者にほめられるならばうれしがり満足する、それほどにもむなしき。

一四九 通りすぎる町であるならば人はそこにおいて尊敬されたいとおもはない。がしばらくそこにとどまらなければならぬときは、それをのぞむ。どのくらゐのあひだ？むなしき貧しい我々の人生につりあつた一と時のあひだ。

一五〇 うぬほれの心は人間のうちにじつにふかく根ざしてゐて、兵士も従卒も料理人も人足も自分のことを誇る、さうして自分を稱讚してくれる人々を得ようとする。哲學者でさへそれをのぞむ。名譽をけなして書く人々だとして巧みに書いたといふ名譽を得ようとおもふ。それをよむ人々はそれをよんだといふ名譽を得ようとおもふ。こんなことを書く私だとしておそらくさういふ希望を持つてゐるのだらう、さうしてたぶんこれをよむであらう人々も……

名譽

一五一 讚辭が幼時から一切のものをそこなふ。まあ！上手にいへたこと！まあ！あの子の上手に

すること！ 賢いこと！ 等々。

〔靴の踵〕。ポール・ロワイヤルの子供たちはそんな羨望と名譽とに對する刺戟をあたへられないので、
無頓著になる。^(二)

(一) 「誰かオリンピック競技にたつた一人で走らうとするものがあるだらうか。競争心をなくしてみよ、名譽はなくなり徳に對する拍車もなくなる」 Du Vair, La philosophie morale des Stoïques, 1603, p. 30.
(二) ポール・ロワイヤル修道院の指導者サーシはフォンテーヌに向つて、修道院の子供たちの誰かに善行があつても——それが神によるものであるならば黙つて心中に感謝してをればよいのであるとして——善行のことは誰にも語らぬやうにしひそかに打ち消してしまふやうにいつも忠告したといふ。

高 慢

一五二 好奇心は虚榮にすぎない。ひとは大抵のばあひ話のたねにしようとしてのみ知りたがる。さうでないならばひとは海の旅などに出ることはないであらう、そのことを決して話さないといふのであるならば、またそのことをつたへる希望はなくなただ見るよろこびだけのためにといふのであるならば。

一しよにある人々から尊敬されたいといふ欲望について

一五三 自負心是我々の不幸我々の誤謬のまん中で我々をきはめて自然的なる仕方できりこにしてゐる。我々はよろこんで生命をさへする、もし人々が語りぐさにしてくれるならば。

虚榮、すなはち、賭けごと、狩、訪問、劇、名聲のうつろなる永續性。^(二)

(一) シャロン『ちあ』一ノ三六 (vanité に関する章) の回想。その第三・五・六節に——我々は生命をすてるかもしれぬが虚榮をすてない。我々は死後にもほめられることをねがふ、何といふ虚榮！ 訪問やあいさつや接待や會話における何といふ見榮、ひまつぶし！——などのことばが見られる。なほニコルの Pensées diverses, XXX である警句に「虚榮すなはち大抵のものにそへられる薬味」

一五四 君はなぜ私を殺すのか。^T〔君のはうが有利であるのに〕〔私は武器をもたない〕

一五五 眞の友人といふものは、きはめて高い貴族にとつても、大そう有益なものである。友人は彼らのことをよく言つてくれ、彼らのゐないところでも彼らを支持してくれるからである。さうであるから眞の友人を得るためにはあらゆる力をつくさなければならぬ。しかしよくえらぶことが必要である、なぜならおろかなる人々をえらぶためにあらゆる努力をするとしたら、それは彼らにとりむだほねである、どんなにその人々が彼らのことをよく言つてくれようとも。むしろその人々は弱いがはに立つやうなことにでもなつたら彼らのことをよく言つてはくれまい、だつてその人々は權威を持たないのであるから、かくてその人々は共に彼らのことを悪くいふであらう。

一五六 Ferrox gens, nullam esse vitam sine armis rati.^(一) 彼らは平和よりも死を好む。ほかの者は戦

争よりも死を好む。

おほよそ意見といふものは生命よりも大切にせられることがありうる、意見に対する愛はじつに強くじつに自然的なるもののやうである。

(一)「猛き人々武器を失ふや否や生存を失ふ」テイトゥス・リヴィウス三四ノ一七。なほモンテーニュノ四〇によれば「執政官カトンがイスパニアの或る町を確保する目的で町民に武器携行を禁じたところたゞそれだけでおぼせいの住民は自殺した」といふ。

一五七 矛盾——我々の存在に對するけいべつ。つまりぬことのために死ぬこと。我々の存在に對する嫌悪。

職業

一五八 名譽の甘みはじつにつよい、それをどんなものにもむすびつけても、死にむすびつけてさへも、ひとはそれを愛する、それほどにつよい。

一五九 美しい行爲にして匿されたるものこそ最も尊敬せらるべきものである。さういふものを幾つか歴史の中(たとへば一八四頁^(二))に見るときそれらは私を大そうよろこばせる。しかし結局のところそれらは全然匿されてゐたといふことはできない、だつてそれらは現に知られてゐるのであるから。それらを匿

さうとしてひとが能ふかぎりのことをしたにせよ、ちよつとでもそれらを洩らしたそのことで一切はだめになつてしまつてゐる。なぜといふのにそこで何よりも美しいことは、それらを匿したいとおもつたそのことなのである。

(一) モンテーニュ『エッセー』一六五二年版のこの頁に色々美しい行爲についてのなしがある。

一六〇 嘘は心のあらゆる機能をすひつくしてしまふ。營みもまたさうである。しかしひとはこれら二つの場合から、人間の偉大さを反駁するところの同じ結論をひき出しはしない、なぜなら嘘はしまいとおもつてもついでするものである。自分でするのにはちがひないがしかし自分の意志するわけではない。しようとしてするのではなく目的は別にある。*だからそれは人間の弱點のしるしではない、またこの仕草のもとに人間が屈從してゐるしるしでもない*

人間にとつて苦痛に屈することは恥ぢではない。快樂に屈することは恥ぢである。そのわけは苦痛はほかから我々にやつてくるものであり快樂は我々自身の追ひ求めるものであるがゆゑにといふのではない、なぜなら人は苦痛だとてこれを追ひ求めることはできるし*わざと*それに屈してもさういふふうな恥ぢを得ずにあることはできるからである。*それならば一たい理性にとつて苦痛の急襲のもとに屈するのは名譽であるが快樂の急襲のもとに屈するのは恥ぢになるわけはどこからくるのか*それはかうだ、苦痛は我々を誘惑しないし我々をひきよせはしない、我々自身のはうがすすんでこれをえらびこれをして我々を

支配せしめようとのぞむ、従つて我々が事物の支配者である、だからそこでは人間が人間自身に屈するの
である、しかし快樂においては人間が快樂に屈する。さて支配力と主權のみが名譽をもたらし屈從のみが
恥ぢをもたらす。

(一) モンテニユ三ノ五「眠りは心の機能をちつくせしめ閉止せしめる。營み(生殖行爲)もまた同様に
心の機能を吸収し霧散せしめる。たしかにこれは我々の根本的墮落を示すのみならず我々のむなしさと不器量
とを示すものである」

むなしさ

一六一 世の人々のむなしさといふやうなこれほどに明らかなきことがすこしも知られてゐないので、偉大
さを追ひ求めるのはおろかなことであるなどといふと妙な思ひがけないものにきこえるほどだ、このこと
は驚くべきことである！

一六二 *人間のむなしさを十分に知らうとするならば*、愛の原因と結果と*を考へてみさへすればよ

い*。その原因は「何だか私には分らないもの」(コルネイユ)^(二)でありまた*その*結果はおおるべきもので
ある。人の知ることでもできないほどに小さなこの「何だか私には分らないもの」が、全地を、王たちを、
軍隊を、全世界を動かすのである。

クレオパトラの鼻、もしこれが低かつたら地上の全表面は變つてゐたことであらう。

(一) コルネイユの悲劇 *Made* 二ノ六「表現することのできぬ何だか私には分らないものがしばしば、我々
をおそひ我々をつれ去り、我々をしてむりに愛せしめる。何だか私には分らないもの——こんな言ひ方はた
ぶんイタリア人たちが流行させたのであらう、ちやうど古代ラテン人たちが同じ意味の *nescio quid* をよく
口ぐせにしたやうに。

一六三 むなしさ。——愛の原因と結果。クレオパトラ。

一六三ノ二 「愛の原因がいかなるものであるか、またその結果がいかなるものであるかを考へることほど
人間のむなしさをよく示してくれるものはない。なぜなら全世界が愛のゆゑに變つてしまふ。クレオパト
ラの鼻」

一六四 この世のむなしさが眼に入らない人はその人自身が十分にむなしいのである。だから誰がこの世
のむなしさを覺らぬことがあらうか、さわぎと慰戯と未來の思ひとのうちにゐる若い人々を別として。だ
がこの人々から慰戯をとりのぞくがよい、この人々は退屈のゆゑに干からびるであらう、この人々はその
とき彼らの空虚を——何であるか知らぬままに——感ずるであらう、なぜなら自己を眺めさせられ*そこ
から氣をまぎらせることをすこしもゆるしてもらへなく*なるや否や堪へがたい悲しみのうちにひたりゆ
くことは、十分に不幸なことである。

一六五。In omnibus requiem quaesivi。(1) もし我々の在り方がほんたうに幸福であるのなら、その在り方を考へまいとして氣をほかへそらせて我々を幸福にしようと計る必要はないであらうが。

(1) 「われあらゆるものうちに憩ひを求めたり」(舊約外典ベン・シラのちゑ二四ノ一一)

慰 戯

一六六 死のことを考へないで死ぬはうが、危険なしに死のことを考へるよりも堪へやすい。(2)

(1) 同じ思想はシュヴァリエ・ドゥ・メレの格言七六に見られる「死そのものよりも死を恐怖する心のはうがずつと身にこたへる」。またモンテーニュ三ノ四に「私は頭を下げてばかりのやうになつて死のなかに沈む。死を眺めることもなくまた見分けることもなく」。ラロシュフコーの格言二一に「死刑に處せられる者にしをりをり平然たる態度と死へのけいべつとをよそほふ者があるがそれはじつは死を見つめることがこはいからであるにすぎない、だからその態度とけいべつとは、いはば、彼らの心に對する眼かくしのやうなものだ」ラブリユイエールは『人間について』の中で「死は、やつてくるのはたつた一度だが人生のあらゆる時にその影を見せる。死ぬよりも、こはいはうがずつとつらい」

一六七 人間の生のみじめさがすべてこれらのことを創設した。(2) 彼らはそれを見て慰戯といふものをえらんだ。

(1) これらのこと——おそろく人間の不正のこと (2) 彼ら——たぶん一般の人々のこと (斷章一六八を参照)

慰 戯

一六八 人々は死を*みじめさを無知を*いやすことができないので*自己を幸福にするために*さういふものを考へずにはゐるやうとした。

一六九 *さやうにみじめであるにもかかはらず人間は、幸福でありたいとおもひ、幸福でのみありたいとおもひ、また幸福でありたいとのぞますにゐることはできない。しかしどうすればよいのであらうか。自己を不死のものとしたらよかつたかも知れぬ、がそれはできないものだから死のことを考へずにはゐるやうとした*

慰 戯

一七〇 もし人間が幸福なものであるとしたら、ちやうど聖者や神のやうに、慰戯にふけることがすくなくればすくないほどいよいよ幸福になれるであらうが。——さやう、しかし慰戯によつてよろこばせられるといふことは幸福なことではないのか。——幸福なことではない、なぜといふのに慰戯はよそからさうして外部からやつて来る、従つて慰戯は依存的であり、それゆゑ、さげがたい悲しみをもたらす百千の出

來事によつてかきみだされるといふ性質を擔つてゐる。

みじめさ

一七一 我々を我々のみじめさから慰めてくれるただ一つのは、慰戯である、しかし慰戯は我々の持つみじめさのうち最も大きなものである。なぜならこのものは、何よりも、我々が我々のことを考へるのをさまたげ、我々を知らずしらすのうちに亡びさせるからである。慰戯がないならば我々は退屈するであらう、さうしてこの退屈は我々をしてそこからのがれうるもつと確實な方法を求めさせるであらう。しかし慰戯は我々をたのしませる、さうして我々を知らずしらすのうちに死にいたらしめる。

一七二 我々はすこしも現在の時におちつかない。我々は未來を*來るのがあまりにおそすぎるかのやうにして、歩みをせきたてるためであるかのやうにして*待ちのぞむ。*また過去を、去るのがあまり早すぎるので足をひきとめるためであるかのやうにして想ひ返へす*。ちゑの浅い我々は我々の所有でないところの時のなかを迷ひ、我々のただ一つの所有であるところの時のことをおもはない*。むなししい我々は*もはやない時のことをおもひ、現存するただ一つの時を無反省に見のがしてしまふ。それは現在がふつう苦しいものであるからだ。我々は現在を眼につかぬところへ押し匿してしまふ、それは現在がふつうのであるからだ。もし現在がたのしいものであるときにはそれがれ去るのを見て心残りをおほえる。我々はそれを將來において失ふまいと努力する、さうして、我々が到達できるかどうかすこしも確かではないところの一つの時を自みてにし、我々の能力のおよぶはんゑにはないところのことがらを按排しよう

と考へる。

各人が各人の考へをよくしらべてみたまへ、自分の考へはすべて過去のことか未來のことかで一ぱいになつてゐるのに氣づくであらう。我々はほとんどすこしも現在のことを考へない。もし現在のことを考へるとするなら、それはただ未來を處置するための光をそこから借るためにすぎない。現在はすこしも我々の目的ではない。過去と現在とは我々の手段である。ただ未來一つが我々の目的である。それゆゑに我々はすこしも生きはしめない、ただ生きたいとねがふ。我々は幸福にならうとつねに心がけながら、どうしても幸福になることがない。

一七三 蝕は不幸の前兆であると彼らはいふ、そのわけは不幸といふものはありふれたもので従つて悪い事はきはめてしばしば起り豫言はしばしば當るからである。もしこれを蝕は幸福の前兆であるといつたとしたら彼らはしばしば嘘をいふことになるであらうが。彼らは幸福を天體同士のきはめて數すくない邂逅にしかむすびつけないから従つて豫言のはづれることもまたひじやうにすくないことになる。

みじめさ

一七四 ソロモンとヨブとは人間のみじめさを最もよく知り最もよく語つた。一は最も幸福であつたし、他は最も不幸であつた。一は經驗によつて快樂のむなしさを知つてゐる、他は災厄の實體を知つてゐる。

(一) ソロモンとヨブについては舊約聖書中の『傳道書』及び『ヨブ記』を参照。

みじめさ

一七四ノ二 ヨブとソロモン。

一七五 人間は自分を一向に知らないものだから、多くの人々は、健康であるのに死んでゆくやうにおもひ、また多くの人々は、死にかけてゐるのに健康であるやうにおもふ、發熱の近いのをまたは膿瘍が出來ようとしてゐるのを知らないで。

一七六 クロンウエルは全キリスト教國を劫掠しようとしてゐた。王家は亡びた、そして彼の家は永遠に強大となつたかも知れない、一つの小さな砂つぶがもし彼の輸尿管ゆねうくわんの中に出來なかつたとしたなら。ローマ*さへ*彼のもとにをのいてゐた。がこの小さな砂つぶがそこに出來たから、クロンウエルは死んださうしてその家はおとろへ、すべては平和となり*王家は復興した*

一七七 「三人の人物」^T 英國の王、ポーランドの王、スウェーデンの女王、これらから愛顧をうけてゐた人は、いつか自分はこの世における隠れ場と逃げ場とを失ふかも知れないなどとおもつたであらうか。^(二)

(一) チャールス一世は一六四九年に斷頭臺にのぼつたしクリスチナ女王は一六五四年に退位した。またポーランドの王ジアン・カシミールは一六五六年に廢せられた。(しかしこれは同年に復位してゐる、従つてこの斷章の書かれたのはこの一六五六年であつたらう)

一七八 マクロビウス。ヘロデに殺された幼な兒たちについて。

一七九 ヘロデが殺させたところの二歳以下の子供たちの中にヘロデ自身の子供もゐたことをアウグストスは知つたときかういつた、ヘロデの息子になるよりヘロデの豚になるはうがましだ。マクロビウス *turnales* 第二卷第四章。

一八〇 偉大な人々も小さな人々も同じ出來事を持ち同じ不満を持ち同じ欲望を持つてゐる、が一は輪わのふちのはうにゐる、さうして他は輪わの中心に近ゐるから従つてこのはうは同じ運動においても動くことがすくない。

一八一 ひとつのことを楽しむのにもそれが悪くゆくやうだつたらと心配せずには楽しむことができなほほどに人間といふものは不幸である。*大そう多くのことが悪くゆくことはありうるしまつづけさまに悪くゆくものなのだ*。裏面にある災ひを心配することなしに幸福を楽しむ秘訣を發見することがで

きたといふ人があつたら、その人は鍵をつかんだ人といひえよう、がさういふことは永久運動だ。^(二)

(一) さういふことは本來的に不可能なことだ、さういふ理想は人間活動の諸条件と相容れないものだ、ちやうどあの發明狂たちを熱中させてゐるところの永久運動といふものが物理學的法則と相容れないものであるのと同じやうに。

一八二 厄介なことがらに善處してつねに希望をいだき幸運の來るのをたのしみにするところの人々が、悪運に出會つてやはり苦慮しないのはどういふわけかと考へるのに、どうもその人々はことがらが悪くなつたことをじつはよろこんでゐるのではあるまいかと疑はれるのである、さうして自分は希望を失はないなどといふことを口實にとつて大いによろこんでゐるが、そのことからかういふことが明らかになる、彼らはじつはことがらの悪くなつたことに心をよせてゐるのだといふこと、それからまた、彼らはよろこびをいだくやうなふりをしてその眞似のよろこびをもつてことがらの悪くなつたのを見るよろこびをつつみかくしてゐるのだといふことが。

一八三 我々は災厄が眼に入らぬやう自分の前に何か物をおいたのち、氣らくに災厄の中を走つてゆく。

〔第三類 不信仰の人々に對して〕

一八四 神を求めることをすすめる手紙。

それから神を求める者を不安ならしめるところの哲學者やピュロンの徒や獨斷論者のうちに、人々をして神をさがし求めしめること。

一八五 * あらゆることを柔和をもつて治めたまふ * 神のみわざは、宗教を、理性によつて精神のうちに、恩寵によつて心情のうちに置くことにある。しかし宗教を、力によつて精神のうちに、脅迫によつて心情のうちに置くとするならば、それは宗教をおくことではなく恐怖をおくことである。 *Terrorem potius quam religionem.*^(一)

(一) 「宗教よりもむしろ恐怖を」。パスカルがこのことばをどこから引用したのか分らない。宗教を力と脅迫とによつてふきこまうとするマホメット教徒を反駁したグロテイスの『キリスト教の眞理について』六ノ二の文言を要約しパスカル自身でこしらへたことばのやうにおもはれる。

一八六 *Ne, si terrerentur et non docerentur, improba quasi dominatio videretur.* (Aug. Ep.)^(一)

(一)「異教徒を」教へさす脅迫して壓政と見られるな「アウグスティヌス書翰四八或は四九。Bale 版
(一五二八年)第二卷 (二)同上第四卷所收の論の標題にこれらのことばがある。「虚言を排斥する書——
コンセンティウスに」。すなはち異端を斥けるために虚言を用ひてもよいかといふコンセンティウスの問ひに
對しここにアウグスティヌスは答へて虚言はいかなるばあひにも用ひてはならぬことを論じてゐる。

秩 序

一八七 人々は宗教をかりんじてゐる。人々は宗教をきらひ宗教が眞理でなければよいのにとおもつてゐる。これを直すには先づ宗教がすこしも理性に反するものでないことを明らかにし、また尙ぶべきものであることをのべて宗教を重んぜしめ、次ぎに愛すべきものであることををしへて善良なる人々をして宗教が眞理であるやうにと願はしめなければならない、さうしてそれから宗教が眞理であることを明らかにしなければならない。

この宗教は、人間をよく知つてくれるがゆゑに尙ぶべきであり、眞の善を約束してくれるがゆゑに愛すべきである。⁽¹²⁾

(一)「我々の宗教のもろもろの眞理の中には二つのものがある。一つは崇高なる美であつてこれはそれらの眞理を愛すべきものにし、もう一つは神聖なる威厳であつてこれはそれらの眞理をたふすべきものにする」『田舎人への手紙』第十一)

一八八 あらゆる對話においておよび演説において、人は、腹を立てる人々に向つてかういふことができなければならない「君は何が不満であるのか」

一八九 不信仰の人々をあはれむことからまづ始めること。彼らは彼らの在り方について見るならば十分に不幸である。役立つ場合のほかは彼らをのしつてはならない、それは彼らに害ふ。

一九〇 さがし求めるところの無神論者たちをあはれむこと、なぜならこの人たちは十分に不幸ではないであらうか。無神論者であることを誇りとする人々をのしること。

一九一 かの者は他を笑ふであらう。が笑つてよいものであらうか。この者はしかし他を笑はない、反つてあはれむ。

一九二 ミトンをその動かうとしないことをもつて咎めること、なぜなら神は近よ^Tりたまふ。

一九三 Quid fiet hominibus qui minima contemnunt, majora non credunt. ⁽¹³⁾

(一) 最も小さい事物をけいべつし最も大きな事物を信じないやうなさういふ人間から何が得られようか。

一九四 彼らはこの宗教を攻撃するまへにすくなくとも彼らの攻撃するこの宗教はいかなるものであるかを知るべきだとおもふ。もしその宗教が、神を明らかに見てゐるといひ神のすがたを遮るものなくあらはに眼のうちにとらへてゐるといつて誇つたと假定するならば、さやうにも明らかに神のすがたを示すものなどはこの世に何もありませんと言ひ返すことによつて、ひとはその宗教を攻撃することができてもあらう。がしかしこの宗教はさやうなことをいはないどころか反つて、人間は神を遠ざかつてをり暗黒のうちにある、また神は人間から知られぬやう身を匿してゐたまふ、さうして *Deus absconditus* アブスコンディトゥス これが神の神みづからをよびたまふ名前であるといふのであり、最後にまた、ひとしく二つの事柄をうち樹てよと努めて、神は神をまじめに求める人々のために身を知らしめようとして教會のうちに明らかなるものもろのしるしを設けたまうたといひ、神はしかしながらそれらもろのしるしを、心から神を求める人のほかを見ることのできぬやうにおほひ隠してゐたまふ、といふのであつてみれば、一たい彼らが、真理の追求をおこたつてゐることをあきらかに表明しながら、何事も一向に眞理を見せてはくれぬと叫んだとて、それが彼らに何の得になるといふのか、なぜといふのに彼らをつつむところのさうして彼らが教會攻撃のために引證するところの暗黒は、教會のとなへるところの二つの事のうちの一つを——他の一つとは關係なく——ただもううちかためるばかりであり、教會のこの教説を破壊するどころか反つてそれをうちするるのであるから。

宗教を攻撃しようとおもふならば彼らはあらゆる努力をしていたるところをたづね、教會が示して研究せよとすすめるところのものをさへたづねたが何も満足を得ることがなかつたと叫ぶべきであらう。もし

彼らがさうつけるのであるとしたら、彼らはじつさい教會の主張の一つを反駁することになるかも知れない。が理性を持った人でさやうなことをいひうる人はゐないことを私はここに明らかにしたい、さやうなことをいつた人はかつて一人もないとさへ私は敢へていはう。そのやうな心の人々がいかにふるまふかを我々はよく知つてゐる。彼らは聖書の中的一篇をよむのに數時間をつひやし信仰の眞理について或る聖職者に質問すればもうそれでひじやうな努力をして研究したとおもひ、それからのちは、書物と人とをたづねたが成功しなかつたといつて誇るのである。しかし私はまことに彼らにいひたい、たびたびいふことであるが、かかる怠慢はたへがたいと。さういふ仕方してもよいやうな誰か見知らぬ人についての小さなことをここに話してゐるのではない、ここに話してゐるのは我々のことである。我々の全存在のことである。

魂の不滅といふことは我々にとつてきはめて大切なことであり我々にふかく關係したことであつて、そのことからどういふことになるかを知るのに無關心であるやうとするならば意識といふ意識をすべて失つてしまふ必要があらう。永遠の幸福を希望しうるのか否かに従つてあらゆる行ひあらゆる思ひはじつにちがつた道をたどらなければならぬのであるから、我々の窮極の目的となるべきこの點を見とほすことによつて規制するのでないならば思慮あり判断ある歩みをすることは不可能である。

されば第一の關心事、第一のつとめは、我々の全行動の依存してゐるところのこの魂の問題を明らかにすることである、さういふわけで私は、魂の不滅といふことを納得しない人々のあひだでも、全力をつくしてこれを究めようと努める人々と、さういふ骨折りをせずさういふことを考へずに生きる人々とを、き

よくよく區別するのである。

疑ひのうちにあつてまじめに苦しみ、疑ひをまろろの不幸のうち一ばん大きな不幸と見、その不幸をまぬがれるためにはどんなことにも骨ををしますこの問題の探究を自分の何よりもまづなすべき最も眞剣なるつとめとする人々に對しては、私は同情するばかりである。

しかしこの人生窮極の目的のことを考へずに日をすごし、納得のゆく光を自分で見出さなさいといふだけの理由でその光を他に求めることをおこたり、この意見が果して單なる輕信によつて人々のうけいれたものであるかそれともそれ自身では分りにくいけれどもじつに固くさうして動かない基礎をもつものであるかを根本的にしらべることをおこたる人々を、私は全くちがつた仕方で見つめる。

彼ら自身のこと彼らの永遠性のこと彼らの全存在のことが問題とされてゐることがらに對してのこの無關心は、私をして彼らをあはれましめるよりはむしろ私をしていら立たしめる。この無關心は私をおどろかしめおそれしめる、それは私にとつてひとつの奇怪事である。私はなにも精神的獻身の信心ぶかい熱狂からしてさういふことをいふのではない、それどころか反つて、人間的利害關係の一原則からまた自愛心の關係したことがらからしてさやうな考へを持つべきであるといはうとしてゐるのである。それについては、ちゑの光を持つことの最もすくない人々の見ることを見さへすればよい。

さほどに高い精神を持つてゐなくても、この世にまことのさうした永續的な満足はないこと、あらゆる快樂はむなししいこと、不幸は無限であること、最後に、絶えずひとをおびやかすところの死は幾年もたたぬうちに我々を永遠に亡びるかそれとも不幸になるかといふ恐るべき必然の中へまちがひなく投ずるにち

がひないことを理解することはできる。

これほど眞實のことはない、またこれほどおそろしいことはない。我々は好きなだけ強がりはいはう。が世のいかなる美しい人生をも待ちうけてゐるところの最後がある。そのことをよく考へてみるがよい、さうしてそれからのちに、この世には來世の希望においてしか幸福はないこと、ひとはそれに近づくにおうじてしか仕合せではないこと、また永生を全く確信した人々にはもう不幸はないであらうと同じやうに永生の光をすこしも持たぬ人々には幸福はないこと、さういふことが疑ふよちのないことでないかどうかを語るべきである。

それゆゑ疑ひのうちにあることは確かに大きな不幸である、が疑ひのうちにあるときにたづね求めるのはすくなくとも缺くべからざるつとめである、されば疑ひのうちにあつてたづね求めることをしない者は不幸でもありまた不正でもある。もしこの者がさうであるのにおちつき満足してゐるならば、またそのことを公言し、最後にそのことを誇りとし、ほかでもないさういふ状態を彼のよろこびと虚榮とのたねにするならば、私はさやうにも途方もない人間を形容することばを持たない。

さやうな考へを彼らはどういふところからいさぐたのであらうか。もはやどうしようもない不幸を待つばかりだといふことに彼らはどんなよろこびのたねを見出すのであらうか。どこまでつづいてゐるか分らぬ暗黒のうちにあることにどんな誇りのたねを見出すのであらうか、また次ぎのやうなりくつが理性的なる人間のうちにどういふわけがあればとて考へ出されるのであらうか。

「誰が私をこの世界に置いたかを私は知らない、また世界とは何であるか、私とは何であるかを私は知

らない。私は、萬事についてのおそるべき無知のうちにある。私の身體とはどういふものであるかを私は知らない、また私の感覺とは、また私の魂とはどういふものであるか、それからまた私の語ることから考へるところの、さうしてあらゆることを反省し自分自身をも反省するところのしかしほかのものを同じく自分自身を知らないところのさういふ私の一部分とはどういふものであるかを私は知らない。私は宇宙のおそるべき空間が私をとりかこむのを見る。私はこの廣大なるひろがりのなかの一片隅につながれてゐる自分を見出す、さうして何がゆるぎに、自分がこの場所に置かれ他の或る場所に置かれぬのかを知らない。また私の生きるべきものとして與へられたこのわづかの時間が、何がゆるぎに、過去から私へとつづいた全永遠と私から未來へとつづきゆくであらう全永遠とのうち、この點に指定せられ他の或る點に指定せられなかつたのかを知らない。私の見るものはただ、どこを見ても、ふたたび復ることなく一瞬のあひだ生きるにすぎない一つの微粒子、一つの影のやうなものとして私をどぎこめてゐるところの無限だけである。私の知つてゐることはただ私がやがて死ななければならぬといふことである、しかし私にとつて何が分らないといつて、私のさけることのできないこの死ほど私に分らないものはない。

「私はどこから來たかを知らないしまたどこへ行くかをも知らない、ただ知つてゐることはこの世ををはるとき永遠に虚無のうちにおちいるかあるひは怒れる神の手のうちにおちいるかといふことである、がこの二つの状態のうちのどちらに私は永遠に身をおかなければならないかといふことは知らない。

「さういふことが缺陷と不確實とに満ちた私の存在の仕方なのである、そこですべて上のことから私は結論してはいはう、私は私のところへやつてくるべきものが何であるかを尋ねようなどと考へることなく人

生のすべての日々をすすべきである。私だとして私の疑ひのうちに何らかの光明を見出すことがあるかも知れない、しかし私はさやうな骨折りをしたくない、またそれを求めて一步をふみ出さうとしたくもない、たださういふ心がけをもつて努める人々にけいべつをむくいたのち、私は見とほしもなく恐れもなく一大事をこころみることのり出したい、さうして未來の私の在り方の永遠であるかどうかについては不確かなまま、しまりなく死へとみちびかれてゆきたい」

* いかなる確實性を彼らが持つてゐようともそれは誇りのたねといふよりむしろ絶望のたねである*

誰か右のやうに語る人を友としてもちたいとおもふであらうか。誰かこのやうな人を、自分のことをうちあける相手としてえらぶであらうか。誰かこのやうな人に悲しみのとき助けを求めらるであらうか。最後に、このやうな人を人生のいかなることに我々は役立てるのであらうか。

宗教にとつてかくも没理性的なる人間を敵とするのはまことに光榮である。彼らの反駁は宗教にとつて一向に手痛くはなく反つて宗教ののべる真理の確立に役立つのである、なぜならキリスト教の信仰は、本性の墮落とイエス・キリストの贖あがなひとおほよそこの二つのことを確立しようとするのにほかならぬのである、ところで私は主張しよう、彼らは彼らの行ひのきよらかさをもつて贖ひの真理を證據だてるといふことには役立たぬにしても、彼らのきはめてゆがめられたる考へをもつて本性の墮落を證據だてるといふことにはすくなくともすばらしく役立つのである。

人間にとつて人間の在り方ほど重要なものはない。人間にとつて永遠ほどおそろしいものはない。されば自己の存在の破滅にも永遠の不幸といふおそれにも無關心なる人々があるといふことは自然的なること

ではない。彼らはほかのことになるとどんなことについてもまったく別人である。彼らはじつにつまらぬことを心配しそれを豫見しそれを感知する、ところが職を失つたといひあるひは自己の幸福を何かそこなはれるやうな気がするといつて幾日も幾夜も怒りと絶望とのうちにすすこの同じ人間が、死によつて一切のものを失はうとしてゐることを不安もなく感動もなく承知してゐるところの人間にほかならないのである。同じ一つの心の中にじつに小さなことがらに對するこの氣づかひと世にも大きなことがらに對するこの無頓著とを同時に見るとは奇怪なことである。これは不可解なる魔法であり超自然的なる假睡である、さうしてそれらのものはそれらのものの原因が一つの全能の力であることをしめしてゐる。

さういふ状態の中にはただの一人さへもゐることができないとおもはれるのにこの状態の中にあることをもつて光榮とするなどといふのは人間の本性のうちの一つの奇妙な顛倒があるからにちがひない。しかし私の經驗によるとさういふ人々の數はひじやうに多いので、もし我々がさういふ状態を大いに光榮とする人々の大多數はいつはりよそほうてゐるのであつてじつさいは彼らのいふやうなものでないといふことを知らないとしたら、おどろくべきものにするかも知れないところだが。この人々は、さやうに矯激なことをするのがこの世のすてきな行き方だとひとにきかされてきてゐるのである。さうしてさういふ行き方を彼らは、軛をふりおとしてしまふと呼び、この行き方を眞似ようところみるわけである。がしかしそんな仕方では尊敬を求めることがいかにあやまりであるかを彼らに分らせるのはむづかしいことではないであらう。そんな仕方では尊敬をかちうることはできない。私は敢へていふが、物事を正しく判断するところの、さうして尊敬をかちうるただ一つの道は自分を正直な忠實な正しい人間に見せかけることであると

心得また——人間といふものはただ自分に利益をあたへるものだけを自然的に愛するものであるがゆゑに

——自分を友達に役立つ人間に見せかけることであると心得てゐるところの、世慣れた人々のあひだにおいてさへ、そんな仕方では尊敬をうることはできない。一たい、自分は軛をふりおとしたとか、神があつて自分の行爲を見てゐるなどとは信じられないとか、自分を自分の行爲のただ一人の主人と見なすとか、自分自身に對してのみ自分の行爲の釋明をしようとおもふとかそんなことを人がいふのをきいたとて、それが我々にとつてどんな利益になるのか。その人はさういふことをいへばそれによつて我々から信頼されるやうになり、人生のあらゆる必要におうじて我々から慰めや忠告や助力をあふぐことができるやうになるとおもふのであらうか。彼らは我々に向つて主張して、魂はただわづかばかりの風とけむりにすぎないといひ、さらにまたそれを得意さうな満ち足りたこゑでいふが、彼らはそれで我々を大いによろこばせたつもりであるのだらうか。それはたのしげにいふべきことであらうか。それはむしろ反對にこの世の最も悲しいこととして悲しげにいふべきことではなからうか。

もしまじめに考へてくれるなら彼らは、さういふ態度がひじやうに誤解せられたものであり大そう常識に反するものでありまた大そう誠實にもとるものであり彼らの求めるいきなやうすにはどう見ても大そう遠いものであつて、むしろ、彼らに従はうといふ傾向を持つ人々を墮落にみちびくより反つて矯め直すちからを持つてゐるほどだ、といふことをさとるでもあらう。じつさい彼らをして彼らの宗教を疑ふ氣持とその理由とをせつめいせしめるがよい、彼らのいふことがらはじつにたよりないじつに低級なものであるものだから反つて諸君は反對のはうを尤もなものとして納得してしまふであらう。さういふ人々に向つて

或る人はいつかきはめて適切にも次ぎのやうにいつた、——もし君たちがいつまでもそんなことをいつづけるなら、反つて私を信仰にひき入れてしまふだらう。——このことは正しい、なぜならさやうにもけいべつすべき人々を自分の友人として持つことになるやうなさういふ思想をいただくのを誰かいとはないものがあらうか。

それゆゑに、さういふ考へをただ持つてゐるやうによそほつてゐるだけの人々ならば、その本来の心をおさへつけて世にも高ぶれる人間にならうとするなどといふことは、するぶん不幸なことといはなければならぬ。もし心の奥底に光を持たぬことを苦しんでゐるのならばそれを匿すべきではない。公言したて恥づかしいことではない。公言しないことのみが恥づべきことである。神を持たぬ人間の不幸がいかばかりのものであるかを見とめぬことほどに精神の極度の缺陷を明示するものはない。永遠の約束の眞理であることをねがはぬことほどに心の悪い性質をしめすものはない。神に對して強がることほどに卑怯なことはない。彼らはよろしくさういふ不信仰の心を、それをしんからいだきうるほど十分邪惡に生れついたり人々にゆづつてしまふがよい。彼らはもしキリスト教徒になりえないならすくなくともまことの人間となるべきである、さうして最後に彼らは、正しいと人のよぶことのできる人間は次ぎの二種類しかないことをさとるべきである、すなはち神を知れるがゆゑに心から神につかへる人々、それから、神を知らぬがゆゑに心から神をさがしとめる人々。

しかし神を知らずまた神を求めずして暮す人々はいへばこの人々は自分を自分の配慮に値ひせぬものと考へてゐるのであるから他人の配慮にも値ひせぬものである、が彼らを彼らの狂氣のままにうちすてて

しまふまでにけいべつするといふことはさけるべきでありそのためには彼らのけいべつするところの我々の宗教のあらゆる慈愛が必要となる。だつて我々の宗教は我々に向つて、彼らはこの世にあるかぎり恩寵の光に照らされうる資格を持つものであるからつねにさういふものとして彼らを見なすべきであることを命じ、また彼らは幾ばくもなくして我々よりもつと信仰に満たされるかもしれないものと考へるべきであり、我々こそ反對に彼らのおちいつてゐるところの盲目におちいるかもしれないと考へるべきであることを命ずるがゆゑに、我々としては、もし彼らの立場にゐるとしたらしてもらひたいとおもふであらうことを彼らのためにしてやる必要がある、また彼らにすすめて彼ら自身をあはれましめ、また光を見出さえないかどうかためしにすくなくとも二三歩ほど歩かせることが必要である。彼らは彼らがほかのやがらにじつに無益につひやすところの時間のうちの幾らかをあててこれをよむべきである、どんなにいやでもなにかしら得るところがあるであらう、すくなくとも大きな損はしないであらう。しかしそこにまつたき誠意とまことの意欲とをそいで眞理を見出さうとする人々については、私はその人々が満足を得られ聖なる宗教のもろもろのあかしに納得せられることをのぞむ、私はそれらのあかしをここに集めた、さうしておほよそ次のやうな順序でそれらをのべることにした……

(一) Deus absconditus.——隠れておます神。イザヤ四五ノ一五「救ひをほどこしたまふイスラエルの神よまことに汝は隠れておます神なり」断章二四二を参照。

一九四ノ二 (二) 「*いづれの者にもあはれみを持たなければならぬ、がこの者に對しては愛情か

ら生れるあはれみをもち、かの者に對してはけいべつから生まれるあはれみをもたなければならぬ*」

(二) 「*私がさう考へるのは、偏狹^Tによつてではなく、人間の心のつくられ方に従つてであり* * 献身と解脱との熱情によつてではなく* * まつたく人間的なる原理に従つてであり利害關係と自愛心とのうごきに従つてである*、またさう考へるわけは——これは我々の心をゆりうごかすほど十分に我々に關聯してゐることがらだが——人生のあらゆる不幸のあけくには確實に、我々を絶えずおびやかすところのあの避けがたい死がまぢがひなく幾年もたたぬうちに……恐るべき必然性をもつて……」

(三) 「確かに、神を知ることなくして幸福はない、また* 神に近づくにおうじて* 幸福になる、また窮極の幸福は神を確實に知ることである、また神から遠ざかるにおうじて不幸になる、また窮極の不幸はこの上にのべたことが確實であるといふことである。

「だから疑ふといふことは不幸なことである、が疑ひのうちにて求めることはおこたるべからざるつとめである、従つて疑ひのうちにて求めることをしない者は、不幸でもあり、不正でもある。もしこの者が、さうでありながら、たのしけであり高慢であるならば、私はさやうにも途方もない人間を形容することばを持たない」

(四) 「*救ひのない不幸をしか待ちのぞむものを持たないといふことがいかなるよろこびのたねになるといふのだ！ 慰め手を見つけるのに絶望してゐて^Tいかなる慰めがえられるのだ！ *」

(五) しかし宗教の榮光に對してこの上なく反抗してゐるやうに見える人々も、ほかの人々にとつては無益な存在ではないであらう。

我々はそのことについてそこに何か超自然的なるものがあるといふ最初の論證をしよう、なぜならさういふ種類の盲目は自然的なるものではないからである、そこでもし彼らの狂氣が彼らを彼ら自身の幸福とはきはめて反するものにするならば、彼らの狂氣は、さやうにも悲しむべき實例のおそろしさ、さやうにも哀れむべき狂氣のおそろしさを見せることによつて、ほかの人々をさういふ狂氣におち入らぬやうに守つてやることに役立つであらう。

(六) * 彼らは彼らに關係してゐる一切のことから無感覺でゐられるほど確乎たるものであらうか。財産か名譽かを失はしめることによつてそれをためしてみられるがよい。ほう！ なるほどこれは魔法だ*

(七) しかし確かに人間の性質はひどくひねくれてゐる。じつにそれをよろこぶ氣持を心の中に孕んでゐるほどに。

(八) 「*この種の人々といふのはアカデミストでありエコリエである、^(二)これは、私の知つてゐる人間の最も邪悪な性格である*」

(一) アカデミストすなはち斷案を持つた懷疑論者。エコリエすなはち人の振舞ひをすぐ模倣する人々。

(九) *いきなやうすは人々の歡びを求めようとしないうやうになつてゆく。よい信仰は人々の歡ぶことをしようとするやうになつてゆく*

(一〇) 「このことは、人々が悦に入り、こんなふう^{かうぜん}に昂然として誇つていふのに、すてきな理由なのである……。だからたのしまうではないか!」。私はその結果を見ないのだ。「おそれなく不安なく生きようではないか、さうして死を待つことにしようではないか、なぜなら死は不確かなものなのであるから。^Tさうしたら我々がどういふことになるかそのとき分るだらう」^(二)

(一) 原文はよほど氣分の悪い時の筆になるためか判讀困難であり再現の仕方諸版區々^{まちまち}である。

(二) *うれしさうにいふべきことであらうか。悲しさうにいふべきことである*

(三) それはすこしもいきなやうすではない。

(一三) 「君は私を信仰に入れてしまふだらう」

(一四) 「*それを悲しまずまたそれを好まず、じつに心の缺陷と意志の邪惡とを示してゐる*」^T

(一五) 「ひとが*死にのぞみ*その衰弱と苦悶のうちで全能にして永遠なる神をかるんするのは勇氣であらうか」

(一六) 「このことから明らかなやうに彼らにいふべきことは何も無い、けいべつするからではない、彼らに良識がないからである。神が彼らをうごかしたまふことが必要である」

(一七) 「彼らをけいべつしないやうにするためには、我々は、彼らのけいべつする宗教のうち^(一)に身をおくことが必要である」

(一八) 「もし私がその状態にゐるとしたらさうしてもしひとが私のおろかをあはれんで——いやでもおらでも——そこから私を引出してくれたら、どんなに私は幸福であらう!」

(二九) 「* 一つの場所がかすかすの奇蹟がおこなはれること、一つの民族の上に攝理があらはれること、それで十分ではないか*」

一九四ノ三 (一) 私は彼らに尋ねたい、彼らは、人間の本性は墮落のうちにあるといふこの彼らの攻撃する信仰の根本義を、じつは彼ら自身で立證してゐるのではなからうか。

(二) これほど大切なことはない。これほどおろそかにされてゐることもない。

(三) それがこの話のいつはりなることを確信せしめられた一人間のなしうるすべてのことである、がなほ彼はよろこびのうちにでなく失望のうちにゐなければならぬ。

(四) それを理性のしるしだといつてはならない。

(五) 三つの状態。

(一) 斷章二五七を参照。

一九五 人々が、その人々にとつてひじやうに大切でありその人々にひじやうに密接に關係してゐる一つのことからについて、その眞理性を追求することに無關心で暮してゐるのはまちがつたことであり、私はキリスト教の證明に立入るまへに、まづそのことを提示する必要があるとおもふ。

彼らのあらゆるあやまちのうち、彼らが狂的であり盲目的であるといふことを彼らに最もよく納得せしめうるのは確かにこのあやまちであり、また常識によるひととほりの觀察と自然的なる感覺とをもつて彼らを最も容易に恥ぢ入らしめることもまたこのあやまちについてである。なぜといふのに疑ふよちのないことであるが、人生の時は一瞬にすぎない、また死の在り方はそれがいかなる性質のものであるにせよ永遠である、また、従つて我々のあらゆる行動と思想とはこの永遠の在り方の如何におうじてきはめてちがつた道をとらなければならぬ、また我々の窮極の目的であるべきこの點の眞理性をもつて規制しないかぎり、意味あり判斷ある歩みをとることはできないからである。

これほど明白なことはない、さうであるからまた、理性の原理に従ふならば、この人々がほかの一つの道をとらないかぎりこの人々の行動は全然非理性的である、といふこともきはめて明白なことである。

されば人生のこの窮極の目的のことを考へずに日をおくり、反省もなく不安もなく、自分の好みと楽しみとにみちびかれるままになり、永遠のことを考へないやうにすれば永遠をうちほろぼすことができるかのごとくに、ただこの一時においてのみ幸福であらうとしか考へない人々を、どうか右の點において批判していただきたい。

しかしこの永遠は存在するのである、さうしてこの永遠への入口となるにちがひないところのさうして

彼らを絶えずおびやかすところの死は、つかのまにやつてきて、永遠に亡びてしまふか永遠に不幸に沈むかといふおそれるべき必然性のうちに——それら二つの永遠のうちどちらが彼らを永久に待ちうけてゐるか彼らには分らぬままに——まちがひなく彼らを投ずるにちがひない。

ところがそのことに疑ひがいだかれておそろしい結果を生むこととなる。彼らは永遠の悲惨といふ危険にのぞんでゐる、さうでありながら彼らは、あたかもことがらさういふ骨折りに値ひしないかのやうに、果してこの意見は一般民衆がひどく信じやすいためにすぐに受け入れたさういふ意見の一つであるか、それとも、それ自身晦冥なものではあるが、匿されてはゐてもひじやうにしつかりした根柢を持つてゐるさういふ意見であるかをおこたつて吟味しようとしないのである。従つて彼らはこのことがらのうちに眞があるのか偽があるのかを知らない。またもろもろのあかしのうちに力があるのか弱みがあるのかを知らない。彼らはもろもろのあかしの眼前にしてゐる、しかもそれらを眺めることを拒む、さうしてこの無知のうちにて彼らは、もし不幸があるとすると、この不幸におちいるのに必要なあらゆることをしようとする、また不幸とはどういふものか死ぬときのためにためしてみようとしてこれを待ち、しかもその状態にひどく満足してをり、そのことを公言し、最後にそのことを誇りとするのである。このことがらの重要性をまじめに考へるひとはさやうにも途方もない行爲をおそろしくおもはないでゐることができようか。

さういふ無知のうちに憩ふことは一つの奇怪事である。さういふ生活をおくる人々自身にそれを見せて無法でありおろかであることを感ぜしめ、狂氣のさまに眼を向けさせてこの人々を恥ぢ入らしめることは必要である。なぜならこの人々は、自分がいかなる者であるかを知ることなくまた光を求めることなく生

きることをえらぶとき次ぎのやうに推論する^T。

一九五ノ二 「我々の想像は、現在の時に對して絶えず反省を向けるものだから現在の時をひどく大きなものにしてしまひ、また永遠に對しては反省をしないものだから、永遠をじつに小さなものにしてしまひ、かうして永遠を虚無にし虚無を永遠にしてゐる。この事實はその根をきはめて生きいきと我々のうちに張つてゐるから、いかなる理性も我々をしてそれをやめさせることはできない、さうしてまた……」

一九六 人々は心情を缺いてゐる。この人々を友人にすることはできない。

一九七 大そう利害関係のあることがらをけいべつするほどに無關心であること、また我々に最もふかく關係してゐる點に無關心になること。

一九八 人間の小さなことがらに對する敏感さと大きなことがらに對する無感覺とは、奇妙な入れ替りをしめしてゐる。

一九九 ある人数の人々が鎖につながれみんな死の宣告をうけてをりそのうち幾人かづつが毎日眼のまへでしめころされてゆき残りの人々は自分自身の身の上を友の身の上のうちに見て苦痛と絶望をもつてた

がひに眺めあひながら自分の順番を待つてゐるさまを想像せられよ。人間の存在の仕方を忍がいてみればさういふものである。

二〇〇 一人の男が牢にゐて、宣告が下されたかどうか知らないでゐる、またそれを知るのにはもはや一時間しか残つてゐない、しかしもしそれを知つたらその宣告を取消してもらふのにこの一時間あればたくさんである、そんなときにこの男がこの一時間を、宣告が下されたかどうかを問ひ合はすためにでなくピケをして遊ぶためにつひやすなら、それは自然に反したことである。

従つて人間が……するの自然を越えたことである。⁽¹⁾ *それは神の裁きを重からしめることである。^{*}かくして神を求める人々の熱が神を證するのみならず、神を求めない人々の盲目もまた神を證する。

(1) 従つて人間が「最後の裁きの近きをおもはず遊び楽しんで生を送るのも」と補はう。

二〇一 いづれのがはの人々の反駁もすべてその人々自身に向つて舞ひ戻りだけのことである。宗教には向つてこない。——不信仰者のいふことはすべて……

二〇二 「信仰を持たぬ自己に飽きたらずにゐる人々を見れば、神が彼らを照らさずにもたまふことが分る。ほかの人々についていへば、この人々を盲目ならしめてゐるたまふ神のあることが分る」

二〇三 Fascinatio nugaritatis. ⁽¹⁾ 欲情にそこなはれないために……に一週間の生命しかないやうにして行動しよう。

(1) 「とるにたらぬものの魅惑」。舊約外典『ソロモンのちゑ』四ノ一二「とるにたらぬものの魅惑はよきものを曇らしめ欲情のみだれはよこしまならざるものをあやまらしむ」

二〇四 生涯として一週間を充つべきであるなら百年を充つべきである。

二〇四ノ二 一週間を充つべきであるなら全生涯を充つべきである。

二〇五 私は私の生命のみじかい期間がこれまでのさうしてこれからさきの永遠のうちに吸ひこまれて失せるのを眺めるとき、また私の占めてゐるさうして私の眼にうつりさへもする小さな空間が、私の知らないさうして私を知つてくれぬところのもろもろの空間の無限のひろがりのうちに沈み入るのを眺めるとき、自分はどういふわけでこのところにあるてあのところにあるのか、それをおそれ、それをいぶかしくおもふ、なぜなら私になにゆゑにここにあるてあそこにあるのか、なにゆゑに今あるてあの時にあるのか、その理由といつてはすこしもないからである。誰が私をここにおいたのか。いかなる者の命令と處置とによつてこのところとあの時とは私にありあてられたのか。 Memoria hospitius unius diei praeteruntis. ⁽¹⁾

(1) 『ソロモンのちゑ』五ノ一五「不信仰者の望みは風にはこぼるるもみがらのごとくまた嵐の前に消えゆく泡

のごとくまた風にあふけむりのごとくちらされまたただ一日留まれる客の思ひ出のごとくすぎさる」

二〇六 これらの無限の空間の永遠の沈黙は私をおそれしめる。

二〇七 いくばくの王國が我々を知らずにあることであらう！

二〇八 なにゆゑに私の知識はかぎられ、私の背丈はかぎられてゐるのか、なにゆゑに私の生命は千でなく百にかぎられてゐるのか。いかなるわけで自然は壽命をさういふものとして私にあたへたのか、またいかなるわけでこの數をえらんでほかの數をえらばなかつたのか、無限の數のうちからこれをえらんで、他をえらばない理由はない、いづれのものも何をこころみようともしてゐないのであるから。

二〇九 おまへはおまへの主人に愛せられほめられるがゆゑに、奴隸であることがよりすくなくなるであらうか。奴隸よ、おまへはほんたうに仕合せ者だ、おまへの主人はおまへをほめる、そのうちにおまへをなぐるだらう。^(一)

(一) 快樂の奴隸となつてゐる自由思想家への皮肉なよびかけであらう。

二一〇 この劇は、ほかの場面はごとく美しいものであらうとも、最後の場面は陰慘である。つひに土が頭の上にかけられる、これで永遠におしまひ。

二一一 我々是我々と同じやうにみじめで我々と同じやうに無力な仲間とのまじはりのうちに憩うてよこんである。この人々は我々を助けてはくれまい。ひとは一人で死んでゆく。だからひとは一人であるかのやうにして行動しなければならぬ。*さういふときひとは宏莊なる邸宅を立てたりなどすべきであらうか。ためらふことなく眞理を求めべきであらう*もしそれを拒むひとがあるならばそのひとは眞理の追求をよりも人々の尊敬を大切にすることを示すものである。

流 轉

二一二 人間の持つあらゆるものの流轉するのを感じるのをおそろしい。

二一三 我々と地獄或は我々と天國とのあひだには、ただこの上もなくもろい生命が介在してゐるばかりである。

不 正

二一四 自負心がみじめさと結びついてゐるといふことはこの上もない不正である。

二二五 災ひにのぞむときにはなくて災ひをとまはないときに死をおそれること、なぜなら人間でなければならぬ。^(一)

(一) 災ひにのぞむとき人間として人間のつとめを果すべく勇敢にならなければならない。しかし神の裁きにみちびくものとして死はキリスト教徒にとりおそろしいものでなければならぬ。斷章八〇〇におけるパスカルルのイエスに關する注釋と比較せられよ。

二二六 急死(これだけ)はおそろしい、さういふわけで聽罪司祭たちが高貴の人々のところにゐる。

二二七 ある相續人がその家の文書を見つける。その人はいふだらうか「これは贖物だらう」——さうしてそれを吟味せずにはうつておくだらうか。

牢

二二八 ひとがコペルニクスの意見を深く究めてゆかないのを私はかまはないとおもふ。しかしながらこのことは。

魂が不滅であるかを知るといふことは、これは全生命にかかつて大切なことである。

二二九 魂が不滅であるかといふことで道徳はまったく相違してしまふ。これには疑ひがない。と

ところが哲學者たちはこれと無關係に彼らの道徳を取扱つた。* 彼らは一時をすらすらするために討議する*
プラトン^(二)をキリスト教に向はせること。

(一) グロテウス『キリスト教の眞理』によればプラトンはイエスを豫見してゐるやうであり(四ノ一一)
死者の甦りを容認してゐるやうにみえる(二ノ二)といふ。

二二〇 魂の不滅をろんぎしない哲學者たちの誤り。モンテーニュにおける彼らのディレンマの誤り。

二二一 無神論者はまったく明瞭なことがらをいふべきである、ところが魂が物質的であるといふことはまったく明瞭なことがらであるとはいへない。

無神論者

二二二 いかなる理由で彼らはひとが復活しえないといふのか。生れることとよみがへることとどちらがむづかしいか。かつて無かつたものが存在しにくると、有つたものがふたたび存在しにくるとどちらがむづかしいか。存在しにやつてくるはうがふたたび存在しに返ることよりむづかしくはないか。習慣が一を容易にし習慣の缺乏が他をむづかしくしてゐるのだ。俗な考へ方!

なにゆゑに處女は子供を生むことができないのか、めん雞はをん雞がなくては卵を生まないであらう

か。誰がそれらのものを外見的にこれらのものと區別しうるか、さうして誰がめん雞はをん雞と同じやうに胎種をつくることはできないと我々にいつたらうか。

二二三 復活および處女降誕に反對して彼らは何をいふことがあらうか。人間をあるひは動物を生み出すこととこれを再び生み出すこととどちらがむづかしいであらうか。もし彼らがかつて一度も或る種の動物を見たことがなかつたとしたら、彼らは彼らがお互ひのあひだの交はりなしに生れてくるものかどうか見當がつくまい。

二二四 聖體を信じないなどといふあのおろかさを私はきらふ！ 福音が眞理であるなら、またイエス・キリストが神であるなら、そこにどんな困難があるといふのか。

二二五 無神論は精神の力をしめしてゐる、が或る程度までのことにすぎない。

二二六 * 不信仰者たちは公言して理性に自分たちは従ふと稱してをり、理性的であることに異狀にすぐれてゐるはずである*

* それならば彼らはどういふか*

「動物だつて人間と同じやうに生れ、死に、トルコ人だつてキリスト教徒と同じやうに生れ、死ぬのを、

我々は見ないであらうか。トルコ人だつてその儀式、その預言者、その博士、その聖者、その修道士、そのほかさういふものを我々と同じやうに持つてゐる」さう彼らはいふ。

* これは聖書に反對するものであらうか * 聖書はさういふことをすべてのべてゐないであらうか*

もし諸君に眞理を知らうとする気がないのであるならばそのへんのところでもうたくさんだから休息するがよい、しかし心から眞理を知らうとのぞむならばそれでは十分でない、くわしく見よ。^B 哲學の問題としてならそれで十分かもしれない、がこの場合には十分でない。全存在にかかはりがあるから！……^T

* しかしさういふふうなちよつとした反省をした後、人はたのしみを追ひに出る、等々……

この宗教をどうかしらべてもらひたい。^T もしこの宗教もこの暗さを説明してくれないとしたら一たい何がそれを説きあかしてくれようか*^T

(一) マタイ傳七ノ一五「偽預言者に心せよ、羊の装ひして來れども内はうばひかすむる豺狼なり」なほ同一
三ノ三〇傳道書三ノ一八一—二二などを参照。

對話による順序

二二七 「私はどうしたらよいのか。私はいたるところに暗いものをしか見ない。私は私を無だとおもはうか。私は私を神だとおもはうか」

「すべてのものは變る、さうして繼續してゆく。

——君はまちがつてゐる。そこに……」⁽¹⁾

(一) そこに——「それ自身によつて存続するところのさうしてつねに同じであるところの存在」とパスカルの定義する神がそこにあるはずだといはうとする。なほI版はこれに断章二四四をつないである。

二二八 無神論者の反駁。^{はんばく}「しかし我々は何らの光をも持たない」

二二九 ここに私の見るものがあり私を苦しめるものがある。私はあらゆる方面を眺める、さうしていたるところに暗黒をしか見ない。自然は私に疑ひと不安とのたねでないものは何もあたへない。もしそこに神性をしめすものを何一つ見ないとしたら私は否定のがはに心を決めるであらうが。またもしいたるところに造物主のしるしを見たら安らかに信仰のうちにいこふであらうが。しかし否定するにはあまりにも多くのものを見、安住するにはあまりにもすくないものを見るがゆゑに、私はあはれむべき境遇に在り、そこにゐて私は百度びも願つたことであつた、もし神があつて自然を支へてゐるのであるならばどうか自然は神を曖昧さなしにしめてほしい、またもし自然が神についてあたへるもろものしるしが迷はし多いものであるならばどうか自然はそれらを一つのこらす消し去つてほしい、どうか自然は一切をうちあけてくれるか、それともまつたく口をつぐむかしてほしい、私はどちらのがはにつくべきかを知りたいとおもふからと。ところが私は私のあるこの境遇においては私が何であるか私が何をなすべきであるかを知らないのであるから、私の身の上をも私のつとめをもわきまへることがない。私の心は全力をつくしてまことの善がどこにあるかをわきまへこれに従はうとしてゐる。永遠を得るためには私にとつていかなる

ことも高價にすぎるといふことはない。

信仰のうちにあつてあのやうにもなほざりのままに目をすこし、私ならするぶんちがつた用ひ方をするにちがひないとおもふ天與の性質をあのやうにもまつく用ひてゐる人々、私はさういふ人々を見てうらやましいとおもふ。

二三〇 神があるといふことは不可解である、神がないといふことも不可解である。魂が體とともにあるといふことは不可解である、我々が魂を持たぬといふことも不可解である。世界が造られたといふことは不可解である、世界が造られないといふことも不可解である、等々。原罪*がある*といふことは不可解である、原罪がないといふことも不可解である。

二三一 *神が無限であり部分を持たぬといふことを君は不可能だとおもふのか。——さうだ*。——それでは私は無限にして不可分なるものを君に見せよう。それは無限の速さをもつていたるところを運動する一つの點である。なぜといつてそれはあらゆる場所において*一つで*あり、いかなるところにおいても全體である。

さきに君にとつて不可能なものにおもはれたこの自然の事實から、君は君のまだ知らぬほかのさういふもののかずかすがありうることを知らなければならぬ。自分にはもう知らなければならぬ何事も残つてゐはしないといふやうな結論を君は君の勉強からひきだしてはならぬ、反つて知るべき事が無限に残つて

あると結論すべきである。

無限の運動

二三二 すべてを満たすところの一点、休息してゐる運動。量を持たぬ無限、不可分にして無限。

無限——無

二三三 我々の魂は身體のうちに投げこまれてそこに數と時と次元とを見出す、さうしてそこで推理し、それを自然、必然とよび、ほかのものを信ずることができない。

一を無限に加へても無限はすこしもふえない、また一尺を無限の長さに加へても同様である。有限は無
限のまへでは消滅し全き無となる。*我々の精神も神のまへではさうであり、我々の正義も神の正義のま
へではさうである*。*我々の正義と神の正義とのあひだには、一と無限とのあひだにあるほどに大きな
不均衡はない*。*神の正義は神の慈愛と同じく大きなものでなければならぬ、ところで、見すてられ
たる者に對する正義は、選ばれたる者に對する慈愛ほどには大きくなく、また理にさからふこともすくな
いはすである*

我々は無限といふものを知つてゐる、さうしてその性質を知らない。たとへば數が有限で
あるといふことはあやまりであることを我々は知つてゐる、従つて、數は無限であるといふことは眞であ
る。しかしそれがどういふものであるかを我々は知らない。それが奇數であるといふのはあやまりであり
偶數であるといふのもあやまりである、なぜなら一を加へてもその性質は變らない。しかしながらそれ
は數であり、すべての數は偶數か奇數かである。あらゆる有限の數についてそれは眞である。*それゆゑ
ひとは神がどういふものであるか知らなくとも神があるといふことを十分見とめることはできる*。*眞
理そのものではないがしかし眞であるといふ事物が、かやうにも多くあるのだから、さうしてみると、一
つの本質的な眞理といふものはないであらうか*

従つて我々は、有限なるもの存在と本性とを知つてゐる、なぜといふのに我々は有限なるものと同様
に有限でありまたひろがりを持つからである。

我々は無限なるもの存在を知りその本性を知らない、なぜならそれは我々と同じやうにひろがり
持つてゐるからであり、しかし我々たちがつて限界を持たないからである。しかし我々は神の存在を知ら
ずその本性を知らない、なぜなら神はひろがりを持たずまた限界を持たない。

*しかし*我々は信仰によつて神の存在を知り榮光によつてその本性を*知るであらう*。*ところで
すでにのべたやうに、ひとは或る事物の本性を知らなくともその存在を十分に知ることにはできる*
今は自然的なる光に従つて語らう。

もし神があるとすればそれは限りなく不可解である、なぜといつて神は部分もまたず限界もまたず我
我と何の關係ももたないからである。それゆゑ我々は神がどういふものであるかをまた神が在るかどう

かをも知ることにはできない。さうであるならば誰がこの問題を解決しようと敢へて企てるであらうか。神と何の關係をもたない我々には解決はできない。

それでは一たい誰が、信仰を説明することができないといふゆゑをもつてキリスト教徒をひなんすることができるか、説明をつけることのできない宗教を公然と奉じてゐるところのキリスト教徒を。キリスト教徒たちは彼らの宗教を世人に示すにあたりこれは一つの愚かさであるすなはち *stultitiam* (一) である。明言してゐるのである、しかも君たちは彼らがそれを證明しないのを不満にする！もし彼らがそれを證明するとしたら彼らは約束を守らぬことになるであらう。證明を缺くのは反つて思慮に缺けてゐないからである。——よろしい、しかしそれは宗教をさういふものとして示す人々にとつていひわけになるにせよまた宗教を理由なしに差出すといふひなんをふせいでくれるにせよ、宗教をうけいれる人々にとつてはいひわけにならない。——それではその點をよく吟味しようさうしていはう、神はある、或は神はない。しかしどちらのがはへ我々は傾かうか。理性はここでは何事も決定することはできない。我々をへだてて一つの無限の混沌がある。この無限の距離のはてにおいて賭がおこなはれてゐる、表が出るかそれとも裏が出る。*君はどちらにかけるか*。理性によれば君はどちらにもかけることはできない。理性によれば君は二つのうちどちらをすてる^Tといふことはできない。

それゆゑに、どちらか一つをえらんだ人々をまちがひだといつてひなんしてはならぬ、なぜといつて君は何も知らないのであるから。——それはさうだ、しかし私はどちらか一つをえらんだことをでなく、えらんだそのことをひなんしようとおもふ、といふのは表をえらぶ者も裏をえらぶ者もともにひとしくまち

がつてゐる。正しいのは賭をしないことである。——なるほど。だが賭はしなければならぬ。それは氣ままのことではない。君は船出をしてゐるのである。そこで君はどちらをえらぶか。考へてみよう、えらばなければならぬのであるからにはどちらが君に關係が少いかを考へてみよう。君は失ふべき二つのものすなはち眞と善を持つてをり、かけるべき二つのものすなはち君の理性と君の意志、君の知識と君の幸福とを持つてゐる、*また君の本性は避けるべき二つのものすなはち誤謬と悲惨とを持つてゐる*。君の理性はどれか一つをえらんだとて傷けられることにはならない、*なぜならどうしてもえらばなければならぬのであるから*。*そこで一つの點がすんだ*。しかし君の幸福は？ 神があるといふ表^{おきて}をとつてその得失を計つてみよう。二つの場合を見積つてみよう、もし君が勝つならば君は一切を得る、もし君が負けても君は何も失はない。それゆゑためらふことなく神があるといふはうに賭けたまへ。——それはすばらしい！なるほど賭けなければならぬ、しかし私はおそらくあまり多くをかけすぎる。(三)——考へてみよう。得をする機會と損をする機會とは同じであるのだからには君は一つの生命の代りに二つの生命をかちうるといふだけでも賭けることであらう、しかし三つの生命をかちうるといふのであつたら君は賭を必ずしなければならぬ(なぜといふのに君はどうしても賭をおこなふ必要があるのだから)、さうしても、どうしても賭をすることをよぎなくされてゐるのに、君が、得をする機會と損をする機會とが同じであるところの賭において三つの生命をかちうるために一つの生命をかけるといふことをしないとすれば、君は思慮のある者とはいはれないであらう。(三)ところが永遠の生命と幸福とがあるといふのである。(四)さうであるならば、無数の機會のうちその一つだけが君のものになるといふとき君が一つをかちうるために

一つをかけることは當然のことであらう、さうしてもし、かぎりなく仕合せな無限の生命がかけられるといふとき、さうしてどうしても賭はしなければならぬといふとき、無数の機会のうちその一つだけが君のものになるところの賭において三つの生命をかけるために一つの生命をかけることを君が拒むとするなら、君のその行爲は正しい思慮にもとづくものとはいふことができないであらう。^(五)ところがここにはかぎりなく仕合せな無限の生命があるのであり、損をする機会の有限の數に對して得をする機会が一つあるのであり、また君のかけるものは有限のものである。^(六)ためらふことなどはまるでない、すなはち無限なるものがかけられ、また、得をする機会に對して損をする機会が無限にあるといふわけではない、さういふときであるならばどんなときでも比較計量してみるなどといふことは要らない、一切をかけるべきである。^{*}かうして^{*}ひとは、どうしても賭はしなければならぬといふときには、全くの損と同じ確率で出ようとしてゐる無限の得のために生命を危険にさらすよりはむしろ、生命をまもるために理性をすてるべきである。

なぜならひとは、勝つかどうかは不確定であるなどといつても何の役にも立たないし、危険をかすことは確定であるなどといつても何の役にも立たない、また、危険にさらされることの確定さとかちうるかもしれないことの不確定さとのあひだにあるところの無限の距離は、確定に危険にさらされるところの有限の善と不確かであるところの無限とをひとしいものにしてしまふなどといつても何の役にも立たないからである。さうであるわけではない、だつてすべて賭をする人は不確定をもつて勝つために確定をもつて賭ける、しかるに彼は有限を不確定にかちうるために有限を確定にかけて^{*}理性にそむくことがない^{*}。危

険にさらされることの確定さと勝つことの不確定さとのあひだには無限の距離などありはしない。あるといふのはあやまりである。^{*}なるほど^{*}得ることの確定さと失ふことの不確定さとのあひだには、無限がある。しかし勝つことの不確定さは、勝ちと負けとのかすかすの機会におうじて、ひとの危険をかすことの不確定さに比例してゐる。従つてもし一方のがはにも他方のがはにも同じ機会があるとしたら勝負は對等でおこなはれることになる、さうしてそのときひとの危険に身をさらすことの不確定さは勝つことの不確定さにひとしい。無限に距つてゐるなどとはいへたものではない。さうであるから、得をする機会と損をする機会とが同じであるところの賭において有限をかけて無限をかちえようといふとき、我々ののべるところはかぎりないからをおびる。

^{*}これは證明しえられることである、さうしてもし人々にして何か真理といふものをつかみうるからをもつてゐるとするならばこの真理こそ人々のつかみうる真理である^{*}。——私はさう白狀しよう、さう認めよう、しかしなほその賭の内情をうかがふ方法はないものであらうか。——ある、聖書やそのほかのものなど……

——なるほど。しかし私は両手をしばられ口をふさがれてゐる。私は賭をすることをよぎなくせられてゐる、さうして自由でない。私は放してもらへない、さうして信ずることができないやうにされてゐる。君は私をどうしようといふのか。

——君のいふことはほんたうだ。しかし君はすくなくともさとるがよい、信ずる力が自分にはないのだといふことを、^{*}なぜといつて君は理性によつて信ずるやうにいざなはれながらしかも信ずることをしな

いのである*、「証明の缺けてゐるがゆゑにではなく」君の欲情のゆゑに^T。従つて君は神についてのものもろろの証明を増すことによつてではなく、自分の欲情をへらすことによつて、自分を得心させるやう努めるがよい。君は信仰に向つて歩きたいとおもつてゐる、さうしてその道を知らない^B。君は不信仰をいやされたいとおもつてゐる、さうしてその方法を求めてゐる^B。君は君と同じやうにしばられてゐたところのさうして今はあらゆる持ち物を賭に投げだすところの人々からまなぶがよい、その人々は君のたどりたいたいとおもふ道を知つてをり、君のいやしたいとおもふわづらひからいやされた人々である。この人々のまづおこなつたやり方を君もたどるがよい、すなはち、あたかも信仰にはひつたかのやうにしてあらゆることをするのだ、聖水をうけたりミサを唱へてもらつたりそのほかさういふことをするのだ。……このことはおのづから君をして信ぜしめ君をしておろかならしめるにちがひない。——しかしどうも私は氣おくれがする！

——なぜ？ *君は何か損をすることがあるのかしら*

しかしさうすることが君を信仰にみちびくのだといふことを君に明らかにするためにいはう、さうすることは君の大きな障碍^{ヒヤウバウ}であるところの欲情をへらすことになるであらう、等々……

——あゝ、私はこのぎろんに我を忘れる、心をうばはれる……

——もしこのぎろんが君の氣に入りまた力強いものにおもはれるならば、どうか、このぎろんをのべた人はそのぎろんの前と後とはひざまづいて、自分の持ち物の一切をゆだねてゐるところの無限にして自分を持たぬ存在者に向ひ、君自身の幸福のためおよび存在者の榮光のために、君の持ち物をもまたこの存在者にゆだねるよう祈つたこと、またさやうにして力は心のへりくだるほど湧くものであることを知つて

いただきたい^(七)。

この議論の結末

*さてこのがはにくみすることにおいてどんな災ひが君にやつてくるであらうか。君は忠實な、正直な、けんそんな、恩を忘れぬ、深切な、友情ある、まじめな、眞實にとむものとなるにちがひない。じつさい君は、喜びの有害なるものにも名譽にも逸樂にもおちいらぬであらう。がしかしほかのかずかずのものをも君は得ないであらうか。私は君にいふ、君はこの人生において勝つであらう、さうしてこの道を一步すすむごとに勝ちの確實さがいかに大きなものであるかを見、賭けに出すものがいかに無にひとしいものであるかを見て、つひには、何も投げ出しもしないでしかも確かにして限りないもの得られる賭をしたといふことを知るであらう。

(一) stultiam——コリント前書一ノ二一「世はおのれのちゑをもて神を知らずこれ神のちゑに適へるなり

このゆゑに神は宣教のおろかをもて (per stultiam predicacionis) 信する者を救ふをよしとしまへり」

(二) 有名な賭の問題をこの斷章でパスカルは數學上のいはゆる公算法 calcul des probabilités をもつて取扱つてゐる。人間の存在の仕方は『パンセ』のいたるところに説かれてゐるやうに不安定そのものにほかならない。我々はまことに「船出をしてゐる」のである。賭はどうしてもしなければならぬ。さて「君が勝つならば君は一切を得る、もし君が負けても君は何も失はない」何も失ひはしない、なぜなら有限なるものはそれがいかに大いなるものであらうとも無限と比べるならば無にひとしいからである。「しかし私はあまり多くをかけすぎる」あまり多くを？ なるほど無限の存在を確信しない人々には右の「無」も「あまり多く」のものであるかも知れぬ。これを表にするとつぎのやうになる。

確率	1/2	神はある	神はない
賭ける物	∞	0	0
利得	∞	0	0

(三) 「賭けることであらう」「賭を必ずしなければなるまい」これらの表現の區別から更にふかく考察を加へる必要があるにしても大よそつぎのやうな表を得る。 Cf. Lachelier, Rev. phil., juin 1901.

確率	1/2	神はある	神はない
賭ける物	2, 3	1	1
利得	1, 3/2	1/2	1/2

(四) これをこのやうな表に示すことができる。

確率	1/2	神はある	神はない
賭ける物	∞	∞	1
利得	∞	1/2 (或は1)	1/2 (或は1)

(五) ここでもまたパスカルの眞意と文言とのあひだに精密な考究と修正とを必要とするが結局左のやうな表ができる。 Lachelier の註か Cf. Dugas et Rigquier, Rev. phil., sept. 1900.

確率	1	神はある	神はない
賭ける物	2, 3, ∞	∞	1

(六) つひに表はこのやうに決定する。(パスカルの賭の論義に關して深くは Lachelier その他の哲學者にすぐれた解釋がある。B版もこれらの註においてこの哲學者たちの解釋を援用してある)

確率	1	神はある	神はない
賭ける物	∞	∞	1
利得	∞	n	n

(七) 我々はパスカルのこの證明法に關しエミール・ブートローの試みてある下のやうな解釋をさらにここに瞥見するにとどめる。 Emile Boutroux, Pascal, p. 179. すべての賭においては二つのことがら即ち機會の數と得または損の重要さとが考慮されなければならない。どちらのがはをえらぶべきかといふ理由はこれら二つの要素の積によつて表はされる。さて神が在るとすることは無限の幸福があることである。神が在るといふ機會の數をできるだけ小さく見積るとして假りにこれを「一にひとしい」としよう。さうすれば神が在るといふがはは「 $n \times 1$ 」をもつて示される。神のあたへうる幸福にくらべてこの世の幸福を見積るときそれをどんなに大きく見積るとしても有限の量をし考へることはできない。それを假りに「 n 」としよう。また神がないといふ機會をできるかぎり多くしてもこの數は、神が在るといふ機會が一つある以上、有限である。そこで神がないといふがはは「 $n \times n$ 」をもつて示される。さて後の乗積は前の乗積よりも明らかに小さい。それゆゑに我々はどうしても神は在るといふがははに賭けなければならない。

二三四 もし確實なるもののためには何事もしてはならないのであるならば宗教のためには何事もしてはならないことにならう、なぜなら宗教は確實なるものではない。しかしひとは海上の旅行であるとか

戦争であるとか不確實なるもののためにいかに多くのことをすることであらう！ だから私はいひたい、何事も確かなものはないのであるからには何事も一切せずにあるべきであらうと、また我々が明日の日を見うるかどうかといふことのうちにある確実さよりも宗教のうちにある確実さのほうが大きいと、なぜといつて我々が明日を見るといふことは確かなことではないが我々が明日を見ないといふことは確かにありうることであるから。宗教については同じやうにはいふことができない。宗教があるといふことは確かではない、が宗教がないといふことは確かにありうる誰か敢へていひえようか。*ところでひとは明日のためさうして不確實なるものために働くとき理性に適つて行動してゐる、なぜならひとは、すでに證明した配分の規則に従つて不確實なるもののために働かなければならないのである*

聖アウグスティヌスは、人が不確實なるものために海上に戦争にその他に行動するのを見た、人がさういふふうに行動しなければならぬことを證明するところの配分の規則を見なかつた。モンテーニユはひつこの精神に對してひとが腹を立てるのを見、習慣はいかなることをもすることができると見た、^(三)がその現實の理由を見なかつた。

すべてこれらの人々は現實を見た、^(四)が原因を見なかつた。これらの人々は、原因を發見した人々にくらべると、ちやうど眼だけしかもたない人々を精神をもつてゐる人々にくらべるやうなものだ。なぜなら現實は感知しえられるが原因はただ精神にだけ見えるものである。*たとひこれらの現實が精神に見えるにしてもその精神は、原因を見ぬくところの精神にくらべると、ちやうど身體的感覺を精神にくらべるやうなものだ。

なものだ。

(一) 賭の途中でやめるときにまたは賭の終つたときに受けとる賭金の部分 (二) 斷章八〇、モンテーニユ三ノ八を参照 (三) 斷章二九四、三二五を参照 (四) 斷章四八九を参照。

二三五 *Rem viderunt, causam non viderunt.* ^(一)

(一) アウグスティヌスは「メラギウス派の擁護者ユリアヌスに對する駁論」四ノ六〇においてキケロについて語つてかうのべてゐる「彼らは事物を見た。原因を見なかつた」

二三六 配分のりろんからいへば君は眞理を求めるの勞を取るべきである、なぜなら君はもし眞の根源を信することなくして死ぬならば、滅びてしまふであらうから。——しかしもしその眞の根源が私に信仰せられることをのぞんだのであるならばその意志のしるしを私にのこしてくれたであらうに、と君はいふかもしれぬ。——だからさうしてくれてゐる、ただ君がそれらのしるしをなほざりにしてゐるだけである。だからそれらのしるしをさがしたまへ、さがす値打がある。

配 分

二三七 つぎのやうないろいろの假定におうじこの世に異つた生き方をしなければならぬ。

一 この世にいつまでもゐることが出来る。

五 この世に長くないことが確かであり、一時間のあひだるられるかどうか不確かである。
この最後の假定が我々の假定である。^(一)

(一) パスカルは最初二、三、四をも書いたのであるがそのあとで消した。

二三八 要するに君は、確實なる勞苦に加へて、氣に入らうと無益にこころみるべき自愛心の十年を除いて*なぜなら十年が受け前であるから*一たい何を私に約束してくれるのであるか。

二三九 反駁——救ひをねがふ人々はそのことにおいては幸福である、がその代り地獄をおそれなければならぬ。

答。——どちらが地獄をおそれる理由をよけいに持つてゐるであらうか。地獄があるかどうか知らず、責め苦を——もしあるとして——確かなるものとおもつてゐる人であらうか、それとも地獄のあることに或る納得をしてゐる、救はれる希望を——もしできるなら——いだいてゐる人であらうか。

二四〇 ——もし信仰を得たら私はほどなく快樂をすてるであらうが。さう彼らはいふ。——私なら君にいはう、君はもし快樂をすてたらまもなく信仰を得るであらう。^(二)——ところで始めるのは君だ。もし私にできるのなら君に信仰をあたへましょうが。私にはそれができない、従つてまた君のいふことが眞であるかどうかをためしてみることもできない。しかし君は快樂をすてることができるし、また私のいふことが

眞であるかどうかをためしてみることもできる。

(一) シアンセニウス著『アウグスティヌス』第二巻序編第三章に引用せられる聖アウグスティヌスのことばに幾度びもこの教へは見られる——たとへば「心のきよい人々はさいはひである、その人々は神を見るであらう、されば先づ心をきよくすることをおもふがよい」「煙れる欲情の闇をのがれるとき光を見るであらう」

秩 序

二四一 私は、私がまちがひをしてゐることになりキリスト教は眞理であると分る、といふことのはうが、キリスト教を眞理と信じてまちがひはないのである、といふことよりもおそろしい。^(一)

(一) 不信仰者が信仰へ戻らうとするときの氣持の告白であらうか。これまでの私はまちがつてゐるやうだ、キリスト教はじつは眞理であるらしい、さう分つてくることがどうも胸にせまつておそろしい、かつて背信の私は、キリスト教を信じてまちがひはないといふことを自己の自由思想にとつての脅威にしてゐた、が今のおそれはかつてのこのおそれよりもさらに身にこたへる。

第二部の序

二四二 この問題をろんじた人々についてのべること。

この人々が神についていかに大膽に語らうとこころみるかを見て私はおどろく。

彼らはそのろんぎを不信仰者に向け、その第一章は自然の造化によつて神を證明しようとする。もし彼らがそのろんぎを信者に向けるのであるならばさやうなこころみを見ても私はおどろかないであらう。なぜといつて、心のうちに生ける信仰を持つ「ところの人々」^{PT}であるならば、存在するものはすべて彼らのあがめる神のつくりたまへるものにほかならぬことをすぐに知ることは確實であるからである。しかしさやうな光が消えてしまつてゐるのでそこにその光をふたたび點じてやらうと我々のもくろんでゐるさういふ人々、信仰にも恩寵にも見すてられ、持てるかぎりの光をかかけて彼らの見うるあらゆるものを自然のうちにさがし求めて右のやうな認識にみちびかれようとしながらただ晦冥と暗黒とをしか見出すことのない人々、さういふ人々に向つて、君たちは君たちの周圍にあるごく小さな事物を見さへすればよいさうすれば神はあらはに見えるであらうといひ、またこの重大なる問題の一切の證明として月や遊星の運行を示すだけであり、またさういふふうな説法で證明は十分であると主張するならば、それは彼らをして我々の宗

教の用ひるもろの證明はするぶんたよりない證明だとおもはせるそのたねを彼らにあたへることになる、さうして道理上また經驗上私にはうなづけることであるが、彼らをして我々の宗教にけいべつをいだかしめようとするのにはそれほど適切な仕方はない。

神のものであるところのもろの事物をすつとよく知つてゐる聖書は自然についてさういふ語り方をしない。聖書は反つて、神が隠れてゐたまふ神であること、本性の墮落して以來神は人間を盲目のうちにおきたまうたこと、人間はこの盲目からイエス・キリストによつてのほか脱れることができないこと、イエス・キリストをほかにしては神とのいかなる交はりもあたへられてゐないことを語る。Nemo novit Patrem, nisi Filius, et cui voluerit Filius revelare.

神をたづねもとめる人々は神を見出すであらうと聖書は多くの場所で語るが、そのとき聖書は右のやうなことを我々に指示してゐるのである。光といつてもあの人のいふまひるの光といふがごときものではない。まひるに光を求め海に水を求める人々はそれらを見出すであらうと聖書は語つてゐない。さうであるから神の明證性は自然におけるやうなものであつてはならない、だから聖書は別のところでかういつてゐる *Vere tu es Deus absconditus.*

(一) マタイ傳一一ノ二七に、すべての物はわれわが父より委ねられたり。子を知る者は父のほかになく「父を知る者は子、また子の欲して父を知らしめんとしたる者のほかになし」(二) マタイ傳七ノ七「求めよ、さらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらばひらかれん」(三) イザヤ書四五ノ一五「まこととに汝は隠れてゐます神なり」

二四三 聖典の著者が神を證明するために決して自然を用ひなかつたことは驚嘆すべきことである。すべては神を信ぜしめることを努めてゐる。ダビデもソロモンもそのほかさういふ人々も、眞空はないそれゆゑに神は存在するとは決していはずなかつた。これらの人々は、そのあとにやつてきたところのそしてさういふろんりを用ひたところのいかなるすぐれた人々よりも、すつとすぐれてゐるにちがひなかつた。これは大いに考ふべきことである。

二四四 これはどうも。君自身は空や鳥は神をあかしてゐるといはないのであるか。——さやう。——君の宗教もさうはいはないのか。——さやう。なぜといつて、そのことは神に光をあたへられてゐる或る人々にとつては或る意味で眞である、がしかし大抵の人々にとつてはいつはりである。

(一) グロテウスはその『キリスト教の眞理について』の中で神の存在を月や遊星の運行によつて證明する傳統的方法をとつてをリモンテーニユは鳥の巢をほめたたへるプリニウスを引用してゐる。しかし聖アウグスチヌスの徒にとつては、大抵の人々において理性は原罪のために曇らされてゐる。

二四五 信ずるのに三つの方法がある、すなはち理性、習慣、靈感。理性をもつ唯一つの宗教であるキリスト教は、靈感なくして信ずる人々をキリスト教の眞の子供としてうけいれない。それは理性と習慣とを排除するといふのではない。それどころか反つて、心をもろものあかしに向けてひらき、習慣によつてみづから固めることは必要である、がしかしながら、へりくだることによつて、眞にして有效なる効果

をあたへうるただ一つのものであるところの靈感にみづからをささげなければならぬといふのである。

Ne evacuetur crux Christi.⁽¹⁾

(一) コリント前書一ノ一七に、それはキリストの我を遣はしたまへるはバプテスマを施さしめんためにあらず、福音を宣べ傳へしめんとなり。しかして言葉のちゑをもつてせず、「これキリストの十字架の虚しくならざらんためなり」

順 序

二四六 ひと神を求めなければならぬといふ手紙のあとに障碍^{しやうがい}をとりぬといふ手紙を書くこと。^(二)この手紙のろんずるところは機械についてであり、機械を準備し、思惟^{しゆい}によつて求めるといふのである。

(一) パスカルは機械といふこの表現を際立つた仕方ですでに『愛の情念に關する説』の中に用ひてゐる、すなはち我々の愛が思惟を従つて理性を失ふならば我々はそのときはめて不快なる機械となるであらうと説いてゐる。この斷章二四六において機械といふのは我々の存在のうち理性の權威をはなれてそれみづからに固有の法則に従つて働く部分のことであらう、このとき我々の身體は何か人間の拵^{しら}へた自動機械に類するものと考へられる。信仰に入るために機械を準備するといふのは習慣的なものによつてよく内面を規制するといふことであらう、結局キリスト教徒としての態度を守り信者にふさはしい行爲を實行し快樂や欲念をしりぞけるといふことになる。思惟によつて求めるといふのは思惟が信仰に對してもつところの關係を理解することにおいて懷疑よりいやされることを意味する。

二四七 一友人に宛てて神を求めるやうにとすすめる手紙。——さうすると彼は答へる、しかし求めることが自分に何の役に立つのであらうか。すこしも役立ちさうには見えない。——そこで彼に答へる、絶望してはならない。——さうすると彼は答へる、何らかの光を見出せたら、それは合せなことかもしれない。がしかしこの宗教をほうじてもそんなふう^(一)に信ずるやうであつたら求めたとどうといふ役にも立つまい、さうであるから自分はやはり求めないでゐたい。——そこでこれに對して私は答へる、機械。

(一) そんなふうには——つまり理性の光に従つて。理性の光に従つて信ずるやうであつたら神を求めようとつとめたとしてそれはむえきのことであらう(なぜならまことの信仰は心情によつてしかえられない)このやうな相手がことばに對してパスカルは機械をもつて答へるのである。機械が人間の動物的部分、自動機械、本能、習慣を意味することはすでにのべた。斷章二四九、二五〇などを参照。

證しの有効性をしめす手紙

——機械によつて——

二四八 信仰は證^{あかし}しとちがふ。證しは人間的のものであり信仰は神のたまものである。Justus ex fide vivit.⁽¹⁾ 神はこの信仰によつて神みづからを人の心のうちにおきたまふ、さうして證しは往々にしてその手段である。fides ex auditu.⁽²⁾ しかしてこの信仰は心のうちにある、^(三) scio とはしめす credo とはしめる。

(一) 「義人は信仰によりて生くべし」ロマ書一ノ一七 (二) 「信仰は聞きたるより來る」ロマ書一〇ノ一七

(三) われ知る (四) われ信ず。

二四九 希望を形式のうちにかけるのは迷信である、しかし形式に服しようとしなないのは高慢である。

二五〇 神より受けとるためには外面が内面に結びつかなければならない、つまりひざまづく、口で祈りとなへる、そのほかさういふことをしなければならぬ、さうしてそれは神に服従しようとしなかつた高ぶれる人間をして今は被造物に服せしめるためである。外面から助力を期待するのは迷信である。外面を内面に結びつけようとのぞまないのは高慢である。

(一) 被造物——ここでは人間と対立した意味。人間からなにか神的性質をおびた一切のものを取りのけてそのあとに残るもの、それがここにはいはれてゐる被造物である。

二五一 ほかのもろもろの宗教*たとへば異教のやうなものは*比較的民衆的である*それはそれらが外面的であるからである*しかしそれらはすぐれたる人々にはむかない。全然精神的なる宗教はすぐれたる人々には合ふかもしれないが民衆には役立つまい。キリスト教のみが外面と内面とを融合してゐてあらゆる人々に合ふ。キリスト教は、民衆を内面的に高め、高ぶれる者を外面的に低める。キリスト教はこの二つのものがなければ完全ではない、なぜといふのに民衆は文字のうちなる精神を理解しなければならぬし、すぐれたる人々は彼らの精神を文字に服従せしめなければならぬ。

二五二 なぜなら我々は自分をまちがつて理解してはならない。*我々は精神であると同じやうにまた自動機械である、従つて*ひとを説きふせるのに用ひうる手段は説明だけにはかぎらない。説明しうる事柄といふものはどんなに*すくない*ことだらう！ *説明は精神を承服せしめるにすぎない*。習慣は最も力強いまた最も信頼せられた説明のかずかずをあたへてくれる。*習慣は自動機械をいざなひこの自動機械は精神を——精神の知らぬまに——ひきずつてゆく*。明日の日はある、我々は死ぬ、さういふことを誰が証明したらうか。これほどにひとの信じてゐることがあらうか。習慣が我々をしてさう納得せしめてゐるのである。習慣がかくも多くのキリスト教徒を拵へてゐるのである。習慣がトルコ人を、異教徒を、職業を、兵士を、そのほか、さういふものを、拵へるのである。*洗禮によつて信仰に入ること、異教徒によりキリスト教徒に多い*。要するに精神がひとたび眞理の在るところを見きはめたならば習慣に助けを求めて、絶えず我々から逃げさらうとするこの信仰を我々にそそぎかけこの信仰で我々を色づけることを計らなければならぬ。なぜならしよつちゆう説明を前にしてゐるのはわづらはしいことだ。もつと容易な信仰をつまり習慣による信仰を獲得することが必要であり、この習慣による信仰は、手荒さもなく術策もなくろんぎもなく我々をしてものごとを信ぜしめ、我々の持つ力といふ力をこの信仰にそそがしめ、従つて我々の魂はおのづから信仰に入る。確信の力にたよつてのみ信じてをり自動機械はその反対を信するはうにかたむいてゐるやうなさういふことでは十分でない。それゆゑに我々の二つの部分をして信ぜしめることが必要である、すなはち精神をしては、生涯にただ一度見たことがあればそれで十分であるやうなさういふ證しによつて信ぜしめ、自動機械をしては、習慣によつて、また、反対のはうへかたむ

かうとするのをゆるさぬことによつて信ぜしめなければならない。 *Inclina cor meum, Deus!*

理性の働くのはゆるやかであり、大そう多くの眼をもつてであり、大そう多くの原理の上においてであり、これら原理はつねに眼前におかれてゐなければならない、理性はそのあらゆる原理を前においてゐないならば、いつでも眠りこんでしまふか迷つてしまふかする。感情はそんなふうな働き方をしない。すなはち感情は一瞬に働き、また絶えず働かうと構へてゐる。だから我々は信仰を感情のうちにおかなければならない、さうでない信仰はいつもぐらつくであらう。

(一) 「わが心を汝の證しにかたむかしめて食りにかたむかしめたまふなかれ」詩篇一一九ノ三六。

二五三 二つの極端。理性を排除すること、理性をしかうけいれぬこと。

二五四 世の人々をあまりにも従順すぎるといふ理由で咎めなければならないといふことは稀ではない。あまりにも従順すぎるといふことは不信仰と同じく自然的なる不徳であり、不信仰と同じく有害である。迷信。

二五五 信仰は迷信とちがふ。

信仰を固く持して迷信にまでおよぶならそれは信仰を破壊することである。

異教徒はこの迷信的服従を指して、我々をひなんする。^(二) 彼らが我々をひなんすることをすることになる*。

不信仰。聖體を見ないのゆるをもつて聖體を信じないこと。

命題があると信ずる迷信、等々。

信心、等々。

(一) 「そこでもし服従を要求するすぢあひのものでないことがらに服従を要求するならば、それは」彼らが我々をひなんすることがらを、我々がすることになる、さういふ意味であらうか。

二五六 眞のキリスト教徒はすくない、私は信仰に關してさへさういひたい。信じてゐる人々はするぶんる、がそれは迷信によるものである。信じない人々はするぶんる、がそれは我儘による。兩者の中間にゐる人はすくない。

私はほんたうに信心ぶかい品性を持つ人々と、心情の直観によつて信じてゐる*すべての*人々とを、この兩者のうちに含めない。

二五七 三種の人々がある。神を見出してこれにつかへる人々、神を見出さないでこれを求めることをつ

とめる人々。求めることもなく見出すこともなく生きる人々。第一の人々は正しくて幸福であり、最後の人々は不合理であつて不幸であり、中間の人々は不幸であつて正しい。

二五八 Unusquisque sibi Deum fingit.⁽¹⁾
嫌悪。

(一)「各人はみづからのために神を作る」これはおそらく舊約外典『ソロモンのちゑ』一五ノ八および一五ノ一六の要約である。

二五九 ふつうの人は自分の考へたくないことがらを考へないでゐることができる。「メシアを預言してゐる文章をよむな」さうユダヤ人はその子にいつたものだ。——我々の時代の人々もしばしばさうする。さやうにして多くの人々のためにいつはりの宗教は保存せられてゆく。眞の宗教でさへも。しかしさやうに考へずにあつてゐるやうにしてゐられないで、禁じられるほど反つて考へる人々がある。この人々はいつはりの宗教を見すてしまふ、さうしてもし確乎とした説法を見出さないと眞の宗教をさへも見すててしまふ。

二六〇 彼らは群集のうちにかくれる、さうして多数をたのむ。
ざわつき。

權威

君はある事柄を信するのに、その事柄についてひとが話をしてゐるのをきいたといふことをよりどころにしてはいけない、反つて、すこしもきかなかつたかのやうな状態に身をおいてのほかは、何事も信じてはならない。

君をして信せしめるところのものは*君*自身の君に對する承認であり、君の理性の變らざるこゑであつて、他人のそれらではない。

信することはじつに重要である！

百の矛盾も眞となるであらう。^(一)

もし古代が信仰の規準だつたとしたら古代人は一たい規準を持たなかつたのであるか。

もし一般的承認が、人間が亡びたとしたら……^(二)

いつはりの謙虛、高慢。^(三)

垂れ幕をあけよ。

君はやつてみても無益であらう、もし信すべきか、否定すべきか、疑ふべきかであるならば。

さうであるならば我々は規準を持たないのであらうか。

動物は自分のすることをちやんとしてゐる、と我々は判断する。人間を判断するのに規準はないのであらうか。

否定すること、信すること、よく疑ふことの人間におけるのは、走ることの馬におけるやうなものであ

る。

* 罪をかす人々の罰、あやまち*

- (一) 信仰に規準といふものがなかつたらお互ひに矛盾しあふ百の事物がいつれも同時に真となるであらう。
- (二) 一般的承認が規準だとするなら、もし人間が亡びたとしたらどんなことになるか (三) モンテーニュ
- 二ノ三七「高慢から生ずる或る巧妙なへりくだり方がある」

二六一 眞理を愛しない人々は、その眞理に異論のあること、その眞理を否定する者の多數あること^Tをあけて口實にする。されば、この人々の誤謬はもつばら、この人々が眞理を或は慈悲を愛しないといふことから来るのにほかならない、従つてさういふことをあけても口實にはならない。

二六二 迷信と邪欲。

小心、悪い欲望。

悪い心配。神を信することから来る心配でなく、神が在るかどうかを疑ふことから来る心配。よい心配は信仰から來、いつはりの心配は疑ひから來る。よい心配は希望にむすびつく、なぜならよい心配は信仰から生れるものであるから、さうして人は自分の信するところの神に希望をかけるから。悪い心配は絶望にむすびつく、なぜなら人は自分の信じないところの神をおそれるから。一は神を失ふことをおそれ他は神を見出すことをおそれる。

二六三 「奇蹟を見たら私の信仰は強まるであらうが」。我々は奇蹟を見ないとそんなことをいふ。理由といふものは、遠くから見ると我々の視界をかざるやうにみえる、がそこに到達すると我々はさらにその向ふのはうを見たいといひはじめ。何ものも我々の心の口軽さをおさへるものはない。*我々はいふ*何らかの例外を持たない規則といふものはないと、また、いつれの面から見ても眞理であるといふほどにふへん的な眞理といふものはないと。我々をして當面の問題に例外を適用せしめ、「これは必ずしも眞理ではない、だからこれの眞理でない場合はありうる」といはしめるたねを我々にあたへるのには、眞理といふものは絶對にふへん的であるのではないといふことで十分である。残されてゐることはただそれがさういふ例外の場合の一つであることを證明することである。そこでもしいつかそれをさとりなないならば我はそれのことについては大いに不手ぎはであり、あるひは大いに不幸である。

二六四 人は毎日食へること眠ることに飽きない、それは飢ゑが、また眠けが再生するからである、さうでなければ、人は飽いてしまふであらう。だから精神的なものに對する飢ゑがなかつたなら、人はそのものに飽いてしまふ。正義に對する飢ゑ、第八の幸福。^(一)

(一) 第八の幸福はマタイ傳五ノ一〇に「幸福なるかな、義のために責められたる者、天國はその人のものなり」なほ第四の幸福として同五ノ六に「幸福なるかな、義にうゑかはく者、その人は飽くことをえん」

二六五 信仰は感性のいはないことをいふ、がしかし感性の見るところと反對のことはいはない。信仰は

感性を越えてゐる、が感性と反するものではない。

二六六 望遠鏡はむかしの哲學者たちにとつてはすこしも存在しなかつたもの^Tをどんなに多く発見させてくれたことであらう！ ひととはひじやうに多くの星の数のことを語つてゐる聖書をえんりよなく笑つて、我々の知れるところによれば星の数は一千二十二しかないなどといったものだ。

「地上には草がある。それが我々には見える」——月からは見えないであらう。——「さうして草の上には硬毛^はがあり、硬毛の中には小さな動物がある、しかしそれからさきはもう何もない」——おゝ高慢なひと！「混合物は要素から成り立つ、さうして要素はさうでない」——おゝ高慢なひと！「ここに微妙な表現法がある。——「見えないものが在るといつてはならない」——だからほかの人々と同じやうにいふことは必要である、しかしその人々と同じやうに考へることはいけない。

二六七 理性の最後の歩みは、理性を越えた事物が限りなくあるといふことを認めることである。もしそれを認めるにいたらないなら理性は弱いものにすぎない。

自然的事物が理性を越えてゐるとするならば超自然的事物についてひとは何をいひうるのであらうか。

服従

二六八 疑ふべきときには疑ひ、確信すべきときには確信し、服従すべきときには服従^Tすることを知らな

ければならない。さうしない者は、理性の力を解してゐないのである。この三つの原理に反する人々がある、さうしてこの人々は、證明のいかなるものであるかを知らずしてあらゆるものを證明しうるものやうに確信したり、どこで服従すべきかを知らずしてあらゆるものを疑つたり、どこを批判すべきかを知らずしてあらゆることに服従したりする。

二六九 理性の服従と行使、そこに眞のキリスト教は成り立つ。

聖アウグスティヌス

二七〇 理性はもしその服従しなければならぬ場合のあることを判定しないなら決して服従しはしないであらう。だから服従しなければならぬと判定するときに服従するのは正しいことである。

二七一 さゝは我々を幼時⁽¹⁾におくる。 Nisi efficiamini sicut parvuli.

(1) 「マタイ傳一八ノ三」もし汝らひるがへりて幼な兒のごとくならずば天國に入るを得じ」

二七二 理性にとつて、理性の否認といふことほど、ふちはしいものはない。

二七三 もし人がすべてを理性に服従せしめるならば、我々の宗教は神秘的なものも超自然的なものも持たなくなるであらう。もし人が理性のもろもろの原理にそむくならば、我々の宗教はばかけた笑ふべきものとなるであらう。

二七四 すべて我々の推理は結局は感情に負けることになる。

しかしこの感情に似てゐてしかも反してゐるものに空想があり従つてひとはこれら反するものを區別することができない。自分の感情は空想であるといふ人があり、自分の空想は感情であるといふ人がある。規準が必要である。理性が規準になりさうにおもはれる。がしかしこの理性といふものはどの方向にもたわむ、従つて規準となるものはない。

二七五 人間はしばしば想像を心情ととりちがへる、さうして改悛しようとおもふともう改悛したと信ずる。^(二)

(一) Desprez が「最近発見せられた幾つかの新しいパンセを附加して」ポール・ロワイヤル版を再版した
(二六七八年) その版の二八。

二七六 ルアンネス氏^{T(二)}はいつた、理由はあとになつてからやつてくる、といふのははじめ物事はどういふ理由か私には分らないのに私をよろこばせる。あるひは腹立たせる。がそれが私を腹立たせる理由はあと

になつてからしか見つからないのだ。——しかし私はかうおもふ、それはあとになつてから見つかることの理由で腹立たせたのではない、さうではなくてむしろ、それが腹立たせるからこそさういふ理由を見つけるのだ。^(二)

(一) Roannez とも綴るが同時代の一肖像には Rouanes としるされてゐる (二) この斷章は Guerrier の第二稿本とよばれるもの。理性に従つて行動してゐるつもりでじつは愛とか憎しみとか一般に感情がその奥に働いてゐることがある。潜在意識が推理を支配することは睡眠中一定の行爲を暗示的に命ぜられた人が眼ざめてからその行爲を遂行し、それを正當づけるために往々巧みな理由をのべることによつて分る。ラロシュユワコーの格言に「理性はいつも心情にだまされる」

二七七 心情はそれみづから、理性の知らない理由を持つてゐる。我々は幾多のことからをみてそのことを知つてゐる。

私はいはう、心情は、ふへん的存在に或は自己に専念するのにおうじて、おのづからふへん的存在を愛し或はおのづから自己を愛する。さうしてまた、心情はじぶん勝手に一に對してひややかになり或は他に對してひややかになる。君はふへん的存在をすてて自己をとつた。君が君を愛するのは理性によつてであるか。

二七八 神を感じるのには心情であつて、理性ではない。これが信仰といふものである。理性にはなく心

情に感ぜられる神。

二七九 信仰は神のたまものである。推理のたまものであるといつてゐると諸君はおもつてはならぬ。ほかのいろいろの宗教はそれらの信仰についてさうはいはない。それらの宗教は信仰にとどくために推理をしかあたへはしなかつた、がしかし推理は信仰へみちびきはしない。

二八〇 神を知ることから神を愛することへは何と遠いことであらう！

二八一 心情、本能、原理。

二八二 我々が眞理を知るのは理性によつてのみならず心情によつてである。我々が第一原理を知るのはあとの仕方によつてである。理性は、なにかそれにあづかつてをらず、それを反駁しようとするところも無益である。さやうなところのみを目的としてもつてゐるところのピュロンの徒は無益の努力をしてゐることになる。我々は我々が決して夢をみてゐるのではないことを知つてゐる。それを理性によつて證明する能力はないけれども。理性によつて證明する能力のないといふことは結局我々の理性がよわいといふことになるにすぎず、ピュロンの徒の主張するやうに我々の認識がすべて不確實であるといふことにはならない。なぜなら空間、時間、運動、數があるといふやうな第一原理の認識は、我々の推理が我々に

あたへる認識のいかなるものにくらべてもそれらと同様に確實であるからだ。*これら心情と本能との認識の上こそ理性はそのよりどころを求むべきでありそのすべての推論の根柢をおくべきである*。*心情は空間に三つの次元のあることを感じ、數の無限にあることを感ずる、次いで理性は、一方が他方の二倍であるやうな二つの平方數はないことを證明する。原理が感ぜられ、命題が結論せられる、かうして、ちがつた仕方によつてであるとはいへすべては確實である*。*そこでもし理性が心情に向つて、第一原理を承認したいからそれを證明せよと要求するならば、それは、心情が理性に向つて、理性の證明する命題を許容したいからあらゆるそれらの命題を直観せよと要求することと同じく、無益でありまた滑けいである*。

従つて——理性としては*判断を一切ひきうけたいかもしれないけれど*さういふわけにはゆかないのであつて——右のやうな無能力は、ただ理性をへりくだらしめることにのみ役立つべきものであり、我々の確實さを反駁することに役立つべきものではない。なにも理性だけが我々ををしへうる唯一のものではないのである！むしろ反對に理性をすこしも必要とせず、一切のものを本能と心情とによつて認識することができたらよいのだが！しかし自然はさやうな幸福をあたへてはくれなかつた、さうしてさやうな認識の仕方はじつにすこししかゆるしてくれなかつた。それ以外のすべての認識はもつぱら理性によつてしか得ることはできない。

さういふわけで、心情の直観をとほして神より宗教をあたへられた人々はまことに幸福であり、またその納得の仕方もまことに法にかなつてゐる。が宗教を持たない人々〔に對しては〕、我々としてはそれを理

性をとほしてしかあたへることはできない、さうしてそれを心情の直観をとほしてあたへるのは神に期待するほかはない。心情の直観によることなくしては*信仰は*ただ人間的のものたるにすぎず、救ひに對しては無用である。

秩序 聖書が秩序をもたぬといふ抗議に向つて

二八三 心情はそれみづからの秩序をもつてゐる。精神もそれみづからの秩序をもつてゐる、それは原理と證明とによるものである。心情はそれとは別のものをもつてゐる。⁽¹⁾愛のかすかすの原因を秩序正しくのべることが、ひとが愛せらるべきであるといふことを證明することにはならない。もしさうおもふならそれは笑ふべきことであらう。⁽²⁾

イエス・キリスト、聖パウロは慈愛の秩序をもつてゐる。精神の秩序をもつてゐるのではない、なぜならこの人々は、あたためようとのぞむ、をしへようとのぞむのではない。聖アウグスティヌスもさうである。この秩序は主としてそれぞれの問題についての枝葉のろんぎにおいて成り立つてゐる、ところでこの枝葉のろんぎは目的に向つて差しむけられてをり目的を絶えず明らかに示さうとしてゐるのである。

(1) 「理性がそのことばをもつてゐるやうに心情もそのことばをもつてゐる、さうしてこの心情のことばは往々この上もなく大きな効果を發揮する」*Méré, Conversation, I, 261.* (2) 或る男が或る婦人にいつた「あなたを愛してゐるといふことをあなたに納得してもらふのはどうしたらよいでせうか」婦人は答へて「私をお愛しなさればよい、さうすればあなたを疑ひますまう」*Méré, Discours de l'Esprit, I, 25.*

二八四 單純な人々が推理することなく信仰に入るのを見ても諸君はあやしんではならない。神はこの人に神を愛しみづからをいとふ心をあたへ、この人々の心情を信仰へとかたむかしたまふのだ。もし神が心情をかたむかしたまはぬならば*有效なる信念と信仰とをもつて*信ずることは決してないであらう。神が心情をかたむかしたまふやいなや人は信仰に入るであらう。これはダビデのよく知つてゐたことである。*Inclina cor meum, Deus, in……*⁽¹⁾

(1) 「わが心を汝のあかしにかたむかしめよ……」詩篇一一九ノ三六。

二八五 この宗教はあらゆる種類の精神におうする。まづ或る人々はこの宗教の構造だけに足をとめる、ところでこの宗教はその構造だけでその眞理性を證明するに足るやうなさういふ宗教である。また或る人々は使徒たちにまで行く。最も學識ある人々はこの世のはじめにまで行く。天使たちはこの宗教をさらによくまたさらに遠くから眺める。

二八六 聖書をよまないでも信仰をもつてゐる人々があるのは、この人々がまったく聖い心の素質をもつてゐるからであり、我々の宗教についてこの人々のきくところのことがその素質に一致するからである。彼らは神に造られたことを感ずる。彼らは神のみを愛しようとのぞむ。彼らは彼ら自身のみをいとふべきものとしようとのぞむ。彼らは彼ら自身ではその力をもたぬことを感ずる、また神に近づく力のないことを感ずる、また神が彼らのところへ來たまふのでないかぎり神とはすこしも交はりえないことを感ずる。

彼ら是我々の宗教において次のやう語られるのを理解する。神のみを愛すべきである、さうして自己のみをいとふべきである、また、すべてのものは墮落して神にふさはしからざるものとなつたがために神は人間となつて我々と結ばれたまふと。かかる素質を心情のうちにもち、自己のなすべきつとめと自己の無能力とにつきかかる認識をもつところの人々をして得心せしめるためには、これ以上のことは要らない。

二八七 預言と證しとを知らないキリスト教徒である人々はそれでも、それら預言と證しとを知つてゐる人々と同じやうによく彼らの宗教を判断する。後の人々はそれを理性によつて判断するが前の人々はそれを心情によつて判断するのである。

この人々をかたむけて信仰に入らしめるのは神である、だからこの人々は大そう有効に納得せしめられる。

證しを知らないで信仰してゐるさういふキリスト信者は、* 同じことを自己についていふであらうところの* 不信仰の人があるならこの人を説きふせるのに十分なちからをおそらく持たないであらう、私はそのことを認める、がしかし、この宗教の證しを知つてゐる人々は、その信者が、たとへその信者自身では證明できなからうとも、ほんたうに神から靈感をうけてゐるひとであることを、苦もなく證明するであらう。

なぜといつて神は(まぎらふかたなき預言であるところの)その預言において、イエス・キリストの代になつたならば神はその聖靈をもろもろの民の上にそそぎたまふであらうこと、また教會にあづかる息子、

娘、子供らは預言をするであらうことを告げてゐたまふがゆゑに、神の聖靈のかの人々の上にあり他の人の上になくは疑ひないことである。

二八八 諸君は神がみづからを隠してをられることを嘆くかはりに、神がみづからをかくもあらはに示されたことに感謝しなければならぬ。神が、かくもきよき神を知るのにふさはしくない高ぶれる賢者たちにはみづからをあらはに示したまはなかつたことをさらに感謝しなければならぬ。

二種類の人々が神を知ることができる。すなはち、高い或は低いいかなる程度の精神をもつてゐるにせよ、けんきよな心もちへりくだることを愛する人々。或は、いかなる障壁に出會はうとも眞理を見るのに十分なる精神をもつ人々。

二八九 證し。——一、キリスト教。じつに自然に反しながらじつに強くじつにおだやかになされたところの、その設定によつて。——キリスト教の魂のきよらかさ、高さ、低さ。——三、聖書のもろもろのふしぎ。——四、特にイエス・キリスト。——五、特に使徒。——六、特にモーセと預言者。——七、ユダヤ民族。——八、預言。——九、永續性。いかなる宗教も永續性をもたない。——一〇、あらゆるものを證明してくれるところの教理。——一一、この掟の神聖。——一二、世の人の行爲によつて。

かうしてのち人生とは何であるか宗教とは何であるかを考へこの宗教に従ひたいといふ氣持が心にわくならばこれに従ふことをひとは拒むべきではない、それは明らかなることである、またそれに従ふ人々を

笑ふわけはどこにもない、それはたしかなことである。

二九〇 宗教の證し。道德——教理——奇蹟——預言——象徴。

〔第五類 法律〕

二九一 *不正についての手紙の中で*年長の者がすべてを所有するといふのは笑ふべきことだといふことをのべる。「わが友よ、君は山のこもらがはで生れた、だから君の兄がすべてを所有することは正しい」

「なぜ君は私を殺すのか」

二九二 彼は川に向ふがはに住んでゐる。

二九三 なぜ君は私を殺すのか。——だつて！ 君は川のあちらがはに住んでゐるではないか。友よ、君がもしこもらがはに住んでゐたら私は人殺しになるであらう、さうしてかやうにして君を殺すのは不正なこととなるであらう。が君はあちらがはに住んでゐるのだから私は勇士であり、することは正しい。

二九四 ひとは彼のはかりたいとおもふ世界の調和を何の上に基礎づけるのであるか。それは各個人の氣まぐれの上であらうか。何といふこもらんがおこることであらう！ それは正義の上であらうか。ひ

とはこの正義といふものを知らない。正義といふものをもし知つてゐたとしたら、各人は各人の國の習俗に従ふべしといふ人間のあひだにある格律のうち最も一般的であるところのこの格律を、ひとはたしかに立てはしなかつたであらう。眞の公平のもつかがやきはいかなる民族をも服従せしめたであらう。さうして立法者たちは、法律の原型として、この不易の正義の代りに、ペルシヤ人やドイツ人の移り氣や氣まぐれを採るやうなことをしなかつたであらう。ひとはこの不易の正義が世界のいかなる國々にも*いかなる時代にも*うち樹てられるのを見たであらう、さうして公正とせられあるひは不正とせられてゐることがいづれも風土が變はると必ずその性質を變へてしまふといふやうなことを見ずにすんだであらう。「ところがじつは」緯度が三度ちがふと法律はすつかりくつがへつてしまふ。子午線が眞理を決定する。わづかの年月のあひだの所有が基本的法律を變へる。權利はその期間をもつてをり、土星が獅子座にはひるとそれは或るひとつの罪のおこりを我々にしめす。一すぢの川によつてかぎられるところの笑ふべき正義！ピレネー山脈のこちらがはでは眞理、あちらがはでは誤謬。

彼らは公言して、正義は習俗のうちにあるのではなく、あらゆる國に共通なる自然法のうちにあるといふ。もし人間的な法律のもととなつたところの無謀な偶然がさういふ自然法にしてふへん的なものものただの二つにでも出會つたのであつたら彼らは確かにさやうなことを根づよく主張したかもしれない、しかし笑ふべきことに人間の氣まぐれはまことに多様だからさやうにもふへん的な法などといふものは存在しない。

かつばらひ、不倫、子殺し、父殺し、これらはいづれも有徳の行爲中にかぞへられたことがあつた。或

る男が川の向ふがはに住んでゐる、また、その男の王が——私とはすこしも争ひをしてゐないが——私の王と争ひをしてゐるといふ理由で、私を殺すけんりをもつとは、これほど笑ふべきことがあらうか。

おそらく自然法といふものはあらう、がこのよき理性も一とたび墮落するとあらゆるものを墮落せしめた。 *Nihil amplius nostrum est; quod nostrum dicimus, artis est.* ⁽¹⁾ *Ex senatus consultis et ple-* ⁽²⁾ *biscitis crimina exercentur. Ut olim vitis, sic nunc legibus laboramus.* ⁽³⁾

そのこんらんからして或る者は正義の本質は立法者の權威であるといひ或る者は君主の利便であるといひまた或る者は現在の習慣であるといふこととなる。この最後の者のいふところが一ばん確かである。もつばら理性にのみ従ふといふのであるならば、それ自身で正しいといふやうなものは何ものもやはりはない。すべてのものは時とともにゆらぐ。習慣は、それが人々に受けいれられてゐるといふただそれだけの理由で、缺くるところなく公正なるものとなる。習慣はふしぎにもそれが習慣であるといふことをその權威の據りどころとしてゐるのである。習慣をその起因へとたどつてみると習慣はうせてしまふ。あやまちを直さうとするところのこれらの法律ほどあやまつたものはない。法律が正しいから法律に従ふといふ人は、その人の想像する正義に従ふのであつて法律の本質に従ふのではない。法律はすべてそれ自身において*よせあつめられた*ものである。法律は法律であり、それ以上の何ものでもない。法律の據つて來たるところをよくしらべてみようとする人は、それがはなはだ不十分ではなはだたよりないものであることを知り、もし人間の想像力の生みだすもろのふしぎを見るのに慣れてゐなかつたとしたら、その人は、一つの時代が法律のためにかやうにも光輝と尊重とを獲得したことにおどろきの眼を見はるであら

う。國家に*双向ひ*これをくつがへす方法は、既成習慣の起源にまでさぐり入ることによつてその習慣が何らその權威をも正義をも持たぬことを明示し、この習慣をぐらつかせることにある。*人はいふ、不正なる習慣の廢棄したところの國家の基本的にして古代的なる法律にたよるべきであると*。さやうなやり方をしたら一切を失ふことうけあひである。この秤にかけられるなら正しいものは何もないであらう。ところが民衆はさやうならんぎにやすやすと耳をかしたがる。民衆は軛くまを見とめるやいなや振りのける。そこで高位の人々はそれを利用して民衆の破滅と既成習慣の物好きな検査役たちの破滅とをばかる。さういふわけで立法者のうち最も賢明な人はかういつた、民の幸福のためには民をあざむくことがしばしば必要である。また或るすぐれたる政治家はいつた *Cum veritatem qua liberetur ignoret, expedit quod fallatur.* ^(四) 法律が篡奪せんたつであるといふ事實を民に知らしめてはならない。*法律は*昔は理由もなく容れられたが、「今は」正當なるものとなつてしまつてゐる。もしこれをまもなく無くしてしまはうとはおもはならないならば、これを公正なるもの永遠なるものに見せ、その起りをかくすことが必要である。

(一)「我々のものは何もない。我々のものとよぶものは習慣の持へたものだ」(モンテーニュ二二二におけるキケロ *De Finibus*, V, 21 のことばのきはめて不正確なる引用 (二) 元老院と人民議會の決議によつて罪が犯される「モンテーニュ三三〇」、セネカの書翰九五) (三)「我々はむかしは罪に苦しんだ、今は法律に苦しんでゐる」(モンテーニュ三三〇)三におけるタキトゥス『年代誌』III, 25 からの不正確なる引用) (四)「民はその救ひとなる眞理を知らないから、あざむかれるのは民にとつてよいことである」。モンテーニュ二二二による聖アウグスティヌスのことば(神の國四ノ二七)の不正確なる引用をさらに不正確に回想したものと

二九五 私のもの、君のもの。「この犬は私のものだ」さう哀れな子供たちはいつた。「そこは私の日向ほつこをするところだ」——ここに、地上のいたるところにおける篡奪の起りがあり雛型ひながたがある。

二九六 戦争をおこなつて多くの人を殺すべきかどうか*多くのイスパニア人を死刑に處すべきかどうか*これを決定しなければならぬといふことになる、これを決定する人はたつた一人であり、それも、これに利害關係をもつ人である。關係のない第三者がなすべきであらう。

二九七 *Veri juris* ^(一)——我々はこれを持たない。持つてゐるとしたら、自國の習俗に従ふことを正義の規準としなかつたであらうが。

さういふわけで我々は公正なるものを見出すことができないものだから力とかそのほかさういふものを見出した。

(一) モンテーニュ三三〇に引用せられたキケロ (*De Officiis*, III, 17) のことばに「まことの法律とまつたき正義とについては我々はそれらのもの堅固にして確實なる原型をつかんでゐない、ただそれらのもの影か形像をしかとらへてゐる」

正義 力

二九八 正しいものに服従するのは正しいことであり、最も強いものに服従するのは必要なことである。

力をもたぬ正義は無能力であり、正義をもたぬ力は暴力である。力をもたぬ正義は反抗せられる、なぜなら悪人といふものがつねにゐるから。正義をもたぬ力は非なんせられる。されば正義と力とをともにそなへなければならぬ、さうしてそのためには正しいものを強くあらしめるか力強きものを正しくあらしめるかしなければならぬ。

正義はろんぎせられがちであり、力は大そう認められやすくろんぎもせられない。だからひとは正義に力をあたへることができなかつた、なぜといつて力は正義に抗辯し、汝は不正である、自分こそ正しい、といったからである。かくてひとは正しいものをして力あらしめることができず、力あるものをして正しいものとした。

二九九 普遍的なる唯一の規準はといへばそれは、ふつうのことから對しては一國の法律でありそのほかのことから對しては多數性である。どこからしてさういふことになるのか。そこにあるところの力からである。またさういふことから、王たちは力を持つてゐるとき大臣らの多數性に従はうとしないことにもなる。

むろん財の均等は正しい、がひとは、力をして正義に服従せしめることができないものだから正義をして力に服従せしめた。ひとは正義を力あらしめることができないものだから力を正當なるものとせしめて正義と力を一しよにしようとし至高善であるところの平和を得ようとした。

三〇〇 「力あるひとが武装してその財をまもるとき、その持ち物は安全である」

(一) ルカ傳「一ノ二」を参照。

三〇一 ひとはなぜ多數性に従ふか。多數性のうちに一そう多くの理由があるからか。いな、一そう多くの力があるからである。

ひとはなぜ古い法律と古い意見とに従ふか。それらが最も健全であるからか。いな、それらが唯一のものであるからであり、我々から多様性の根を取りのぞいてくれるからである。

三〇二 それは力の結果であつて習慣の結果ではない。なぜといつて獨創の可能な人々といふものは稀である。大多數の人々はただもう従はうとするだけであり、もろもろの獨創をもつて榮譽を求めるところのこの獨創的な人々に榮譽を得させてやらうとしない。もし獨創的な人々が榮譽をしつこく得ようとし獨創的でない人々をけいべつするならば、獨創的でない人々は*獨創的な人々をあざけりの名前をもつて呼ぶであらう*さうして棒でなぐるかも知れない。だから誰も自分の巧みさを自慢してはならない、自分自身に満足してゐるがよい。

三〇三 力が世界の王である。意見はさうではない。

しかし意見は力を使用するところの王だ。

力こそ意見を成り立たせるのである。我々の意見によれば柔弱といふことはよいことになる。なぜ？
なぜなら綱渡りをしようといふ者が一人だけある、ところでそれはほめたことでない主張する人々を以つて私は一そう強い一團をつくるであらうから。

三〇四 或る人々の他の或る人々に對する尊敬をつなぐところのつなは、一般に必要なから生じたつなである。なぜといふのに、すべての者が支配者となることをのぞむが皆が皆といふわけにはゆかずそのうちの幾人かの者のみが支配者となることをうるのであるからにはそこには異つたさまざまの階級があるはずである。

そこでそれらさまざまの階級が出来はじめのを我々が眺めるとしてみよう。たしかにそれらはお互ひに争ひあふ、さうしてやがて強い方が弱い方をおさへつけるにいたり、つひに支配的なるがが出来るところになる。がしかし一たびそれが決定すると、支配者たちは戦ひのつづくのを好まず、その手中にある力が自分の氣に入るやうな仕方でけいぞくしてゆくやう秩序を立てる。この力を或る者は人民の投票にゆだね或る者は世襲にゆだねそのほかさういふものにゆだねる。

そこで想像がその役割をえんじはじめ。それまではもつぱら力が事をなしてきた。これからは力は、フランスでは貴族スイスでは平民といふやうに或る黨における想像によつて支へられてゆく。人のそんけいを特にこれこれの人につなぐつなは、想像のつなである。

三〇五 スイス人は貴族といはれると怒る、さうしてりつばな仕事に當るにふさはしい者と見られようとして眞の平民であることを證據立てる。

三〇六 公國、王權、*司法職*は、實力をもつてをりまた必要でもあるから（力が一切を支配するがゆゑに）いたるところにありまたつねにある。がしかしこれこれの者がさういふ地位につくといふことになるとそれはただもう氣まぐれによるのにすぎないから、それはきちんと定まつたものでなく、變動やさういふものをうけがちのものとなる。

三〇七 大法官はおもしろい、さうして裝飾を身につけてゐる、それは彼の地位がいつはりであるからだ。ところが王はさうではない。王は力をもつてをり想像を問題にしてゐない。裁判官や醫者やそのほかさういふ人々は想像のみをたよりとしてゐる。

三〇八 王を見ると衛兵や鼓手や將官やそのほかひとがつい尊敬と畏怖とをいだいてしまふやうなあらゆるものをともなつてゐるのが習慣である「ために」、王がをりをさういふものをともなはずたつた一人であるときでも、その顔は臣下の者に尊敬と畏怖とをおこさせる、そのわけは王のすがたと、つねにそのすがたにともなつて見てゐる王のお供とを、頭の中で切りはなさないからである。そこでさういふ現象が